福井久藏著

青年佛教叢書第十六編

# 國文學と佛教

三省堂發行

# はしがき

我が國文學が佛教思想をうけ入れて著しい進展をとげ來つたことは苟も文學を解するものゝ皆知了してゐることで、更に贅說を費すまでもない。純眞にして祖先を崇み、常に君恩を身にしめて現世を樂しむ我等の遠き祖先が、時世につれて東漸し來る佛陀の敎を奉じ篤く因果のことわりを信じ、現世のみならず來世の福利を祈るに及び、我が國民思想はやうやく複雜化し、その生活樣式も頗る變化を來たした。造寺造佛經供養のごときも屢々行はれ、種々の佛會は年中行事に織りこまれるに至つた。斯ういふ生活や思想は文學ににじみ出て幽玄高遠の趣を加ふるに至つた。二千年にあまる國文學を竪に見渡す時は、佛教的色調の極めて濃厚なものもあれば表面稀薄なものもあるが、後者に於てもその底に無常

思想が強く流れてゐて、全く佛教思想と交渉のないものは絶無と云つても過言ではあるまい。蓋し吾人はこれを空想的獨斷的に云爲するのではない。嘗て上は記紀より下は江戸末期に至る間の代表的文學書一千三十四餘部に亘り一々檢討を加へて見たことがある。斯くて稿を了へた「國文學中に見えたる佛語總索引」には佛・法・僧・戒・人間等常に見えるものを控除して二萬三千餘の語句を數へあげたのである。されば苟も國文學に携るものは一わたり佛語に通じなくては眞にこれを味讀し鑑賞することはなし得られぬであらう。

自分は學習院を退いて後、近年宗教大學等に關繫することになつたので、佛典や佛教々理等にも多少の考究を進めて見たいと思つてゐるが、常に塵事に煩され今に宿志を遂げるに至らないで、徒らに老いてしまつたことを遺憾とする。唯先年佛教と國文學と題する一講座を擔當してみ

たことがある。顧みると、冷汗背になにとかいふ諺に洩れなかつたであらう。然るに今次長井博士のすべられる帝大佛教青年會の叢書の一つとして請はれるまゝに舊稿に多少手を加へて公にするに至つたのは烏滸がましい極みかも知れぬ。唯一面にはかゝる題目の研究は世に多く出づべくして、而も管見に觸れるものの極めて少いのを慨して、なまじひ玆に筆を執つたに過ぎないことを序にかへて云ふばかりである。

多年、おのが業を助けてゐた亡き妻の一周忌に、この小冊子もやがて手向けられる運びに至つたことをひとり喜び、私情を書き加へたことを讀者にお詫をする。

昭和十四年夏六月、小松園の書窓に於いて

著　者　識　す

# 目次

第四章　鎌倉時代……九二

# 國文學と佛教

# 第一章　序　說

我が思想界が日本精神の昂揚期に當り、新聞に雜誌に盛にその流露を見るのは洵に喜ぶべきことで、超非常の時局の上から云つても當然すぎる程當然のことである。皇祖皇宗の天業を立て給ひてより玆に二千幾百年、綿々として萬古渝ることなく、國民が克く忠に克く孝にして上下一致、この金甌無缺の國體を擁護し奉り、更に進んで八紘一宇の聖旨を奉戴し、東亞の建設に邁進する秋に際し、我が靑年諸氏の奮起を望んで止まないものが尠くない。靑年は前へ前へと進むのが常であるに反し、我儕老人はとかく後を過去を顧みがちの事が多い。兩者相俟つて事の宜しきに從はねばならぬ。徒に偏狹獨善の境地にとぢこもるべきでない。神皇正統記に我か邦は神國なりと高唱してある思想は今もかはりがあるべきでないが、併し

これが爲に狹い考を推し通さんとするのは日本精神ではない。固有の神道を基とし、久しく國民の精神上の糧となり、生活の法を規定してゐた思想をも併せて考ふべきである。儒教や佛教の我が文化を助けたことは實に甚大なものがある。他に發生したものでも、我が國に移し、我が風土に合ひ、我が固有のものと融合して美しい花や實を結んだものは決して排外してはならぬことは識者を俟たずして明かであらう。余は國文學と佛教といふこの小册子をものするも、斯ういふ信念から出發したことを豫め述べて置く。

抑も佛教が我國に渡來してから實に長い年月を累ねてゐる。その年代は日本書紀や扶桑略記や一代要記や、三國佛教傳通緣記等により多少の相異はあるが、大凡一千四百年になんなんとし、爾來幾多の變遷を重ね、國民の信仰の對象となつて來たことも實に久しいもので、我が國民思想史に重要な地位を占め、隨つて國文學史上に影響を及ぼしてゐることは頗る大きいものでその間に殆んど不可分の關係が存するやうに思ふ。

また藝術上の方面から眺めて見ると佛教との關係を切り離すことは出來ない。彼の法隆寺

の伽藍、東大寺の大佛より始め、建築、繪畫、乃至一切の莊嚴に至るまで、佛教と切りはなすことは殆ど出來ない。我が文學に於ても歷代の撰集家集にその思想を全く詠み入れないものは恐らくは多くはあるまいと思ふ。我が文學の最大傑作たる源氏物語より些々たる筆のすさびに至るまで、無常厭欣の思想を盛らないものはない。鎌倉室町文學には特にその色彩が濃いが、いづれの時代いづれの文學にもその臭味のないものはない。試に私が嘗て日本精神文化誌上に載せた、日本文學書中に包含してゐる佛語の數は夥しいもので、その總數は亡慮二萬三千語を下らないと思ふ。今代表的國文學書中に見える佛語の統計を少しく抄記して見る。

| | |
|---|---|
| 本朝文粹 | 二千十四語 |
| 榮華物語 | 九百二十四語 |
| 梁塵秘抄 | 四百九十四語 |
| 寂然法文百首 | 四百五十四語 |

| | |
|---|---|
| 保元平治物語 | 四百三十九語 |
| 平家物語 | 九百四語 |
| 源平盛衰記 | 千七百六十九語 |
| 太平記 | 千百五十一語 |
| 神皇正統記 | 三百三十七語 |
| 謡曲 | 千八百語 |
| 醒睡笑 | 四百六十六語 |
| 西鶴全集 | 千八百八十一語 |
| 近松全集 | 六千二百三十三語 |
| 本朝粹菩薩 | 二百四十三語 |
| 八犬傳 | 七百二十一語 |
| 浮世道中膝栗毛 | 百十四語 |

これは大數を示したもので、佛、法、僧、經、人間など屢〻見える語は除いた計數である。今昔物語また沙石集の如き、佛教說話集や敎義宣揚を旨とした文學にはその數が一層多いのは當然のことゝ思ふ。以上の統計だけに就いて考へて見ても我が國文學や國語學の上に佛教や佛語との關係が頗る深く、これを除外しては國文學史も正當に說くことは出來ないことが了せられると思ふ。

## 第二章　奈良朝及その以前

文學が時代の思潮を受入れることは更に言議を費さないで明かであるが、新しい思想や新しい文化がその中に滲み出るまでには多少の年月を要する。佛教思想や佛敎藝術が文學の上にあらはれ來つたことも同樣な關係に立つてゐる。抑も佛教の隆盛に赴いた第一次は推古期である。聖德太子が海外の文化をお取入れなさらうと極力佛教を奬勵遊ばされたことはあまりにも著名なことである。四天王寺を難波の荒陵に建立された。百濟の僧惠聰や高勾麗の僧

惠慈を召してみづから法を聽かれた。勅を奉じて撰まれた憲法十七條の中にもその第二條に

篤く三寶を敬へ、云々（原は漢文）

それ三寶に歸しまつらずは何を以て枉れを直さむ

とさへ宣せられてある。　推古天皇の御爲には勝鬘經を講じ奉り、また大乘妙典である法華經を岡本宮で講じられた。この二經竝に居士の佛敎道を說いてある維摩經の義疏をみづから作らせられ、中にも法華經義疏はその當時唐土にも傳へて彼の國の人々が參考に供したとさへ云はれてゐる。太子は我邦に於ける悉陀と推尊されたことであらう。推古紀二十一年冬十一月の條には太子は片岡山にて道のほとりに臥してゐた飢人を勞はり、飲食を賜ひ、自ら御召しになつてゐた御衣裳を脫いで着せられたといふ。さうしてその時

しなてる　片岡山に
飯に饑(ゑ)て　臥(こや)せるその旅人
あはれ親なしに　生(な)りなれけめや

刺竹の君はや無き
飯に饑てこやせる　その旅人あはれ

といふ長歌をお詠みになつたと傳へられてゐる。これに就いては種々の傳說がともなはれてゐて、上宮聖德傳補闕記にはその飢人は

いかるがの富の緒川のたえばこそ
我が大君の御名は忘れめや

と奉答したと見え、片岡山の麓を帶の如くにめぐつて流れてゐる富の緒川の絕えないかぎり、太子の令名が傳るであらうと讃したと見え、本朝文粹以下の書にはこの飢人は達磨大師の化身であるとの傳說さへ生んでゐる。上宮聖德法皇帝說には飢人ではなくて、巨勢三枚太夫が奉答したことになつてゐて、第五句が「御名忘らえめ」となつてゐる。また萬葉集卷三には太子が竹原井に御出遊の時、龍田山死人を見そなはし悲しみ傷みて詠ませられた

家にあらば妹が手まかむ草枕

たびにこやせる旅人あはれ

の一首が載つてゐる。由來佛敎は慈悲を本とする。太子の大悲大慈の御心が斯く三十一字詩や長歌に遺音を傳へてゐるのである。萬葉集の河邊宮人が姬島松原の美人の屍を見て詠んだ哀歌や、柿本人麿が狹岑島石中死人を見て詠んだ挽歌などは太子の歌の緖を引いたものと考へられる。

聖德太子は世を早くされたが次の御門　舒明天皇の御代には學問僧の歸朝するものがあつて釋尊や彌陀の敎は漸次に榮えて來た。孝德天皇の御代には僧の旻が國博士に任ぜられた。宮中に二千一百餘の僧尼を請じて一切經を讀ませられ、齊明天皇の御代には飛鳥の大寺で盂蘭盆會が創められ、內臣藤原鎌足は病氣平癒の謝恩の爲に興福寺にて維摩會を修する。萬葉集に見える燿歌が佛會に結びついて後代の民衆藝術である盆踊が次第に起つたではあるまいか。

天武天皇は王法擁護の爲、經文中國體に合し易い金光明最勝王經と仁王經との開講を四方

に勸奬させられ、民間にありても補陀落信仰が行はれてゐたことは常陸風土記がそれを證してゐる。上下の信仰が卽て萬葉集に現れて來ずには止まぬ。聖武天皇は劃期的に佛法を興隆あらせられ、國々に國分寺の出來たのもこの御代である。これらの寺々には莊嚴をきはめた七重の寶塔が作られ、親しく宸筆を染めさせられた金字の最勝王經は塔ごとに一部づゝ安置せられたといふ。更に天平十五年には金銅盧舍那佛を造り奉らむとの發願あらせられ、行基は勅を奉じて諸國に勸進しまはつた。御佛を造る爲に

金……金……金

との聲は國中に響き渡つてゐた。由來黃金は人の國より獻ることはあれど、斯の國には無きものと念つてゐたに、必要は發明の母といふ如く、陸奥の國守百濟敬福は小田郡から美しい山吹色のものが澤山出たと云つて獻上した。御門の御大喜びはいかばかりであつたことか推し量り奉られる。續紀の天下勝寶元年四月の第十二詔及第十三詔はこれが爲にお下しになつた宣命である。特に第十三詔は宣命文學として注意すべきものである。三寶の勝れてあやし

き大御言のしるし、又世々の天皇の御靈のちはひにて、上御一人の幸でなく天下のものと共に樂しむべきものとし、改元の詔を下し、それぐ關係の人々の官位を進め遊ばした。その中には

又大伴佐伯の宿禰は常も云ふ如く、天皇がみかど守り仕へ奉る事顧みなき人等にあれば汝たちの祖どもの云ひ來らく、「海行かばみづく屍、山行かば草むす屍、王のへにこそ死なめ、のどには死なじ」と云ひ來る人等となも聞し召す

と仰せられてゐる。大伴家持が賀陸奥國出金詔書歌一首並短歌はこの時に成りたるもので

すめろぎの御代さかえむとあづまなる
　　みちのく山に黄金花咲く

の歌はその反歌の一つである。

由來萬葉人は多く日本固有の思想を謠つたと云はれてゐる。併し佛會の行はれるにつけては、印度に於ける伽陀のやうに佛前唱歌が謠はれた。佛堂に納める器物にも斯の信仰に關す

る歌が刻みつけられた。大佛造營の時元興寺から獻上した牙笏には讃佛の歌が四首までも刻まれてあつたと東大寺文書に見えてゐる。河原寺の佛堂裡の倭琴には

世の中の醜き假庵にすみ〳〵て
　到らむ國のたづき知らずも

生き死にの二つの海を厭はしみ
　汐干の山をしぬびつるかも

の二首が誌されてあつたと萬葉集十六に載つてゐる。萬葉人がいかに生死を觀じ、この穢土を去らうと希つた願往生思想を十二分に詠じてゐるかが分る。薪の行道に際しては法華經提婆品によつて作つた

法華經を我が得しことは薪こり
　菜つみ水汲み仕へてぞこし

と謠ひ、また佛前讚唱には

百石に八十石添へて給ひてし
　乳房のむくいけふぞ我がする

と乳養の鴻恩を心地觀經などによつて作られた歌を唱へた。波羅門僧正は拜領の田を作つてゐた。さうして田の畔には幡幢をしるしに立てゝゐた。烏が稲穂を啄みにやつて來て罰を蒙つて瞼が脹れたとおどけた風の歌も殘つてゐる。滿誓が

世の中を何にたとへむ朝びらき
　こぎにし舟のあとなきがごと

と無常思想を詠んだのは沙彌の身であるからといへば論はないやうであるが、それより以前に出た歌聖柿本人麿でさへも

巻向の山邊とよみて逝く水の
　水泡のごとし世の人我は

と脆き人生を泡沫に比して居る。現世に執着の多かつた大伴の家持でも病に臥しては

うつせみは數なき身なり山川の
　さやけき見つゝ道を尋ねな
渡る月の影にきほひて尋ねてな
　淸きその道またも逢はむ爲

と修道を希つた作を遺してゐる。
奈良朝時代に榮えてゐた六派の佛敎には大乘もある、小乘もある。冥府も想像される冥官も心にゐがゝれ、輪廻の說も人心に浸みこんでゐた。萬葉隨一の思想詩人たる山上憶良は幼くして先だつた愛子を哀みて、

若ければ道ゆきしらじまひはせば
　下べの使おひて通らせ
幣おきて我は請ひ祈むあざむかず
　たゞに率ゆきて天路しらしめ

と冥官に御遺物をして心から憑みをかけてゐる。六道錢でも持たせないと、黄泉といふまつくらな知らない道に途方にくれると信じてゐる。事に觸れて亡兒を懷ひ出し、瓜を食べても栗をはみても愛兒のことを思ひ浮べる。その小長歌にもその序に釋迦如來金口正說、等思二衆生一如二羅睺羅一云々と經典を引き、大伴卿夫人の亡くなつたのを悲しんだ漢詩

愛河波浪已先滅　苦海煩惱亦無結
從來厭離此穢土　本願託生彼淨刹

には願極樂往生の意をそのまゝに賦し、その漢文の序は「蓋聞、四生起滅、方夢皆空、三界漂流、喩環不息」で始まつてゐる堂々たる佛敎文學で綴られてある。哀二世間難一レ住歌も無常思想を十分に謠ひて世の青年及少女を戒めてあつて、その詩歌を誦するものがこれら佛敎文學の影響を受けたものが鮮少でなかつたと信ずる。

また藥師寺に詣でるものは彼の文屋眞人淨見が生母茨田女王追福の爲に建てた佛足石歌を思ひ浮べぬものは無いであらう。

よき人のまさ目に見けむみあとすらを我は見えずて石に彫りつく玉にゑりつく
みあとつくる石の響は天にいたり地さへゆすれ父母が爲にもろ人の爲に
このみあと八萬ひかり放ちいだし諸人濟ひわたしたまはな救ひたまはな

等二十一首が敬虔な信仰のあらはれであり、また一種の六句歌體の創始であることは世の人々の知悉するところであらう。以上で寧樂朝またその以前に於ける國文學と佛教との關係がおぼろげながら明かになると思ふ。

# 第三章　平安朝時代

## 第一節　最澄空海及その門流

平安朝の始に方り佛教界に二つの明星があらはれた。最澄を宵の明星とすれば空海は夜明けの明星である。共に桓武天皇の延暦二十三年に求法の爲に入唐したが、最澄は翌年歸朝し、叡山によりて天台宗をひろめ、空海は大同元年に歸朝し、東寺及高野山にありて眞言宗を開

いた。最澄は初め唯識を學んでゐたが、寧樂京は宗教も墮落し全く虚榮の市となつてゐるのを慨いて、服飾嗜好を絶ち、

衣食の中に道心なし
道心の中に必ず衣食あり

の二句をモットーとして山林に入り、入唐一年、二百三十部四百六十卷の經典を請來し、叡山の上に一乘止觀院を開いて天台宗を唱へ、平城六派の人々を向ふにまはし教義を爭つたことはあまりに知れ亘つたことで、顯戒論二卷五篇にその烈々たる精神主張が見られ、弘仁十三年には傳燈大法師位を授けられ、翌年止觀院には延暦寺の號を賜り、寂後六年戒壇を建立しこれより天台宗が盛大となつた。蓋し法嗣に圓仁があり、唐にあること九年、承和十四年歸朝してよくその法燈をかかげ、延暦寺を中心とし堂塔の建立、舍利會、天台大師供、不斷念佛會の如き法會を定め宗祖我が立杣の慈光を一層輝かしめた。圓仁は後慈覺大師の謚號を賜つた人、文學の資もありて入唐求法巡禮行記四卷の作があり、また讃嘆文學として舍利讃

嘆の作がある。この讃嘆は初中後の三段より成り、長短七五を基調とし、八五、八六、七四調を交錯し七十二句の長篇から成り、初段には佛舍利値遇の功德を說き、中段には舍利會値遇の功德、下段には施行の功德を述べてあつて、百石讃嘆法華讃嘆に亞いで古く、而もその形は雄大なもので、律語と散文と相雜るが如きものではあるが、人身得がたく御法の教聞くこと希なるこの世に、この會によりて三世の如來の照鑑を受けることを述べてあつて、中に

箜篌のしらべ笙の音　　眞如の御教に違へじや
傾くる首擧ぐる袖　　密印の教に合へむとや
香の煙はたとひ細くとも　　法界の空に匂はむ
花の色はたとひ淺くとも　　十方の薗にうつさむ
一つの色一つの匂　　いづれか中道に背かむ

といふあたり初期の讃嘆文學としてさすがに捨てがたいものもある。

因に云ふ。天台宗は傳教の後に慈覺があり、慈覺の後に良源が出で、興福寺の維摩會（承和

七年）には壯齡で南都の義昭を折き、淸凉殿の法華會（應和三年）には法相宗を論破し天台の座主となり、行基以來ためしの無かつた大僧正に叙せられ元三大師の謚號を賜はり、三千人の門人中に源信以下の四哲を始め昇堂のもの七十を數ふるに至つたと云はれ、その註本覺讚は衆生本覺の心身法を說きて顯密一致の深遠な敎義を力强く直截的にあらはしてあるなど讚唱文學中逸すべからざるものと云はれ、その敎を一層擴充した源信に至り、この種の文學のうるはしい花を開くに至つたのである。

空海は讚岐の多度浦の人、俗姓佐伯氏、延曆十年十五の春を迎へて上京して大學寮に入り明經道を修めたが衷心の滿足を得られないので、三敎指歸を著して孔子老子釋子三敎の批判を試み、勸操に從つて三論及密敎を學び、遣唐大使藤原葛野麿の一行に從ひ入唐し、靑龍寺の慧果に就いて金剛胎藏兩部の秘密壇儀印契の附法を受けて眞言の第八祖に推され、名を遍照金剛と改め、經論章疏二百十六部四百六十一卷を携へて歸朝し各地に巡歷し、京都に綜藝種智院を創立し、ひろく諸子の子弟を入學せしめ、弘仁七年朝廷に請ひて高野山を拓き金剛

峯寺を剏し、最澄歿後は朝野の尊信を一身に集め平城天皇高岳親王を始め幾多の人々に灌頂を行ひ、弘仁十四年には道場に賜つた東寺を敎王護國寺と改めその本山となした。その法門に關する釋摩訶衍論や十住心論のことは玆に云はないが、東洋の詩學として修辭學として光を放つてゐる文鏡秘府論や文筆眼心鈔の如きは(漢文で書かれてあるが)、支那詩學の粹をぬいて日本の和歌詩文の典則を示すものとして貴ばれてゐる。和讃の嚆矢といはれる以呂波歌は涅槃經の四句の偈を翻案して一層內容外形の整つたもので、從來兒童の手習の始に本とされてゐる。この無同字の歌は

いろは匂へど散りぬるを
　我が世誰れそつねならむ
有爲の奥山けふこえて
　淺き夢みじ醉もせず

の口調がなだらかで、且天曆時代に於ける源順の天地の歌の四十八音であるより一字少いか

らその後のものだといふ議論も多くあるが、古傳說もあり且は入木道の大家であるので、これもその作とする人が少くない。その建議によりて承和二年正月から恒例になつた眞言院の御修法は玉體の安穩、寳祚の無窮、國家泰平を祈る莊嚴な儀軌であつて、終にこの宗は天台宗と共に王法鎭護の二大宗となつた。眞言院の御修法は後には紫宸殿にて轉修されることになつた。中古文學にこの佛會の事が屢々見えてゐる。その金胎兩部の曼陀羅供養は加持祈禱であると共に神秘的な藝術であるのである。

以上の高僧の和歌は世々の勅選集に載せてある。今兩部和歌集から少しく引いてみる

南天竺より東大寺供養に菩提が渚につきたる時よめる　　行　基

靈山の釋迦のみまへに契りてし
　眞如くちせず相見つるかな　　(拾　遺　集)

山鳥の鳴くを聞きて　　同

山鳥のほろ〳〵と鳴く聲きけば

父かとぞおもふ母かとぞ思ふ　（玉葉集）

伊駒山の麓にて終とり侍りけるに　同

法の月久しともがなと思へども

さ夜更にけり光かくしつ　（新勅選集）

比叡山中堂建立の時　傳敎大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち

我が立つ杣に冥加あらせ給へや　（新古今集）

方便品　同

三つの川ひとつの海となるときは

舍利佛のみぞまづわたりける　（續古今集）

分別功德品　同

我命ながしと聞きてよろこべる

人はさながら佛とぞなる　（續古今集）

比叡の山中堂に始めて常灯ともしてかゝげ給ひける時

あきらけき後の佛のみよまでも

光つたへよ法の灯

土佐國室戸といふ所にて　弘法大師

法性の室戸といへど我すめば

うゐの浪風よせぬ日ぞなき　（新勅選集）

高野の奥院、參る道に玉川といふ川の水上に毒蟲の多かりければ、此流をのむまじきよしを示し置きて　同

忘れてもくみやしつらむ旅人の

高野の奥の玉川の水　（風雅集）

眞如親王おとづれて侍ける返事に　同

かくばかり達磨をえたる君なれば
陀多謁多までは至るなりけり　（續千載集）

藥草喩品の心を　慈覺大師

雲しきて降る春日はわかねども
秋の垣根はおのがいろ〳〵　（續古今集）

題しらず　同

三界をひとつ心としりぬれば
十の境こそ直に道なれ　（新拾遺集）

同

大方に過ぐる月日を詠めしは
我身に年のつもるなりけり　（新古今集）

入唐のときの歌　智證大師

法の舟さしてゆく身ぞもろ〳〵の
　神も佛も我をみそなへ　（新古今集）
天台大師の忌日によめる　大僧正慈惠
そのかみのいもゐの庭にあまれりし
　草の莚もけふや敷くらむ
此等の諸作は果して高僧の眞作であるか否やは證しがたいが、勅撰にとられてあるからさながらそれに從つた。いづれも經文を翻するか或は佛道に因んだ作で、文學の主流とはならないものである。

## 第二節　佛教説話文學

皇室貴族の間に佛教が尊奉されることは既に說いた。この敎は爾後民間にも次第に汎く信仰されるに至つた。斯くて國文學と佛敎との關係が一層緊密になつていつた。佛敎說話集は

この關繫を見るに恰適のものであらう。大和藥師寺の沙門景戒の著した靈異記、委しくは大日本國現報善惡靈異記は我が佛教說話集の嚆矢たるものである。この書は弘仁中の作にかゝり、當時まだ假名の發明が完成しなかつたので、和臭を帶びた漢文で書かれてある。

上中下三卷、百十餘の說話を收めてある。唐臨の冥報記や作者不詳の般若驗記に象つたもので、諸惡莫作、諸善奉行の爲に、本邦に於ける因果談、利生談、發心談を錄し、ひたすら敎誨を垂れんことを庶幾したものである。その說話は上は雄略天皇より下は弘仁期に及んでゐるが、聖武天皇時代のものが多く(六十四話)、次は孝謙天皇の御代のもの(十九話)、次は光仁天皇の御代の(十五話)といふ順になつてゐる。これを地方別に分けて見るならば、大和は六十三話、紀伊が十八話、山城河內攝津が各十話、和泉が七話でこの他全國各地に亙り、海外のものも極めて少しばかりはある。また別に內容より分けて見ると、善報に屬するものが五十八、偸盜邪淫殺生地獄惡報に關するものが三十九、世話神仙鳥獸等に關するものが十五で、善報に關するものは信仰談が最も多く、靈驗談がこれに次ぎ、高僧に關するもの及放

生談が最も少い。尙これを諸佛經文によりて分けて見ると、

| | | | |
|---|---|---|---|
| 觀音信仰 | 九 | 釋迦彌勒吉祥天女 | 各二 |
| 藥師妙見等 | 各一 | 佛像靈驗談 | 十一 |
| 法華經功德談 | 九 | 金剛經心經功德談 | 各三 |
| 方廣經功德談 | 二 | 大般若經 | 一 |

の如く、建塔讀經の功德談が二、聖人高僧に屬するものが六、放生に關するものが三。惡報は偷盜八、地獄七、邪淫殺生は各五、その他の惡報は十四ある。これらの中、後の說話集である三寶繪にとられたものが十四、今昔物語に入つたものが七十三の多きに上つてゐる。

この書中卷に見えてゐる女人大蛇所レ婚、賴二藥力一得レ全レ命緣は今昔物語には蛇に嫁く女を醫師治す語となり、世俗譚に收めてある。江戸時代に於ける上田秋成の雨月物語中の蛇性の淫はこれより系を引くもの、道成寺傳說もこれに基いたものである。斯く說話は簡單なものが尾鰭が附いて次第に複雜になつてゆく。一つから他に展開してゆく狀を究むるは頗る興味

あるものである。

次に第二の佛教說話文學は源爲憲の三寶繪である。爲憲は源順に學んだ人、口遊等の好著がある。冷泉天皇第二皇女尊子內親王の命を奉じ、三寶に關する繪を畫師に命じ、みづから文詞を加へ永觀二年に奉つたもので、上中下三卷、これを佛法僧に宛てゝある。繪を主體に見て三寶繪といひ、詞書を主體に考へて三寶繪詞といふ。佛の卷には本生譚(十三)、法の卷には聖德太子以下本邦の佛教傳說(十五)、僧の卷には月次に行はれた各種法會の來歷を說いてある。

この書は佛教傳說書として上は靈異記を受け下は今昔物語を引起す中繼のものとして意義深いものであるばかりでなく、その文章が漢文の格に據つて駢麗體を交へ、後の軍記文體を想はしめるものがある。上卷本生譚の中に

頂ハ高コト高蓋乃如ク面ハ圓ナルコト滿月ニ同シ頭ノ上ヘノ螺髻ハ靑ク絲ヲ卷カト疑ヒ眉ノ間ノ毫相ハ白ク玉ヲ瑩ケルニ似タリ眉ハ細ク月ヲ並ヘ齒ハ白キ雪ヲ含ミ眼ハ靑ク蓮ニ喩ヘ脣ハ赤ク

菓ミニ等シ紫磨金ノ膚ヘハ耀天塵无シ千輻輪ノ趺ヲハ歩ムニ土ヲ離レ給リ

とあるが如きは源平盛衰記の文章などの粉本と見ても差支がないやうである。上卷は六度集經智度論最勝王經報恩經涅槃經太子須檀那經等によりて印度の本生譚を擧げ、中卷に於ける說話には平將門の如きは惡人ではあるが前世の功德により天王となるが如き、事實よりも傳說化したものが加はつてゐることも看過できない。下卷に擧げた佛會は佛敎が朝廷を始め勅願寺等にてどのやうに行はれてゐたかを知るに便宜があるばかりでない。その中にも貧女の一燈や放生された龜の報恩譚などの說話も附載されてある。

年中行事に於ける佛會も新儀式には正月八日の講最勝王經儀一つしか載せてないが、延喜の頃にはずつと殖えて來た。それでも式に載せてあるものは十あまりに過ぎない。然るに三寶繪になると、增して三十を數へる。これによりても佛會が、公私の間にいかに盛んに行はれたかを知るべきであらう。この狀勢を示さんが爲にまづ延喜式玄蕃寮の條下に載つてゐる佛會を擧げて見る。

御齋會　正月八日より十四日まで、大極殿にて執行。王法守護の金光明最勝王經を講說。
　僧三十二口、沙彌三十四口を講說せしめる。
御修法　眞言院にて正月八日より一七日修む。
大元帥法　同上
安　居　四月十五日より七月十五日に至る。經を分ちて講說。
大般若　四月一日より八月二十日まで食時食堂に於て各一卷を讀む。
　大安寺大般若會は四月六七兩日。僧一百五十口。
　藥師寺大般若會は七月二十三日より二十九日まで、僧及沙彌各三十口、沙彌は金
　剛般若經をよむ。
悔　過　崇福寺にて四月十三日より。
最勝會　藥師寺三月七日より十三日まで。
維摩會　興福寺十月十日より十六日まで。

竪　義　諸國々分寺にて正月八日より十四日まで金光明最勝王經を轉讀。

尊勝陀羅尼　日に誦すること二十一遍。年末遍數を錄し朝集使に附し言上。

華嚴會　東大寺三月十四日。

大般若會　大安寺四月六七日。

成道會　西大寺、三月十五日。

この他御卽位の御時に一代一講の仁王般若會が行はれ、また治部省にては天智天皇以降の御國忌が東寺西寺にて行はれる。さてこれより約八十年を經て成つた三寶繪を見るとき、年中行事になつてゐるものが三十の多きに上つてゐる。卽ち

正月　修正月　御齋會　比叡懺法

溫室　布薩

二月　修二月　西院阿難悔過　山階寺涅槃會　石塔

三月　志賀傳法會　藥師寺最勝會

高雄法華會　法華寺花嚴會　比叡山阪下勸學會
四月　比叡山舍利會　大安寺大般若會
　　　灌佛　比叡受戒
五月　長谷菩薩戒・施米
六月　東大寺千花會
七月　文殊會　盂蘭盆
八月　比叡山不斷念佛　八幡放生會
九月　比叡灌頂
十月　山階寺維摩會
十一月　熊野八講會　比叡霜月會
十二月　佛名

の如く宮中や勅願寺にての法會は隨分少くないのである。尙これに逸したものもある。から

いふ法會の有様が隨筆や物語や日記の上にあらはれ、國文學をして佛教臭味を濃厚にせずには置かないものである。

## 第三節　勅撰集と釋教和歌

平安朝の初期は漢學の流行した時代で、遣唐使に從ひて留學した學生や求法僧が歸朝し、大に朝廷に用ゐられ、官吏の登用試驗にも漢詩文を用ゐた程で、從つて十餘歳の內親王ですら詩文に巧みであらせられた。斯くして凌雲集、經國集、文華秀麗集の如き漢詩文の勅撰集を生じた。その後國民の自覺も生じ宇多天皇の頃より和歌がやうやく盛んになつて來て延喜の御代には古今集の如き第一勅選集を生ずるに至つた。天曆の御代には母后の追善の爲に法華八講を行はせられた。謂はゆる八講は天台の正依經たる法華經八卷を朝夕二座に分ち四日に講了するもので、尙その開經には無量義經、結經には普賢經を用ゐ、或はこれに代へるに心經と阿彌陀經とを以てし、その中の要文を取りて歌に詠じるのが常で、造寺、造佛、寫經

などの供養には八講を行はれ、もしくは經文の要文をとりて歌に詠じることは、恰も白樂天の詩句などをとりて句題和歌を賦するが如く行はれた。落窪物語には大納言の君が舅の爲に八講を盛大に擧行したことを書いてある。これらの小說も唯空想によつて描いたのではなくて、社會の實相をうつしたものである。藤原公任の選とも花山法皇の御撰とも云はれてゐる第三勅撰の拾遺和歌集には哀傷の部に聖德太子、婆羅門僧正、行基菩薩、空也上人の佛道に關する歌や、八講、經供養、說敎等に關する歌を擧げ、第四勅撰の後拾遺集に至りては釋敎の部門を立てられ、天台大師の御懺法や、涅槃會に參會した歌とか、月輪觀の如き心法に關する作や、維摩の十喩を翻した歌などを載せ、第七勅撰の千載集に於ては釋敎の和歌は漸次に多くなつて來た。また公任卿や赤染衞門の集などをみると法華經二十八品を詠んだ歌を多く收めてある。かげろふ日記の作者は爲雅朝臣が普門寺で經供養を行つた翌日小野に立ちよりて

　薪こることはきのふにつきにしを

いざ斧の柄はこゝにくたさむ

と詠んでゐる。辨乳母は懺法に際し、周防内侍に佛に奉る菊の花を請ひにやつたところが、おこしたので、その挨拶に

　八重菊にはちすの露をおきそへて

　　九品までうつろはしつる

と詠んだ。公任卿が普門品を詠じた

　世をすくふうちには誰か入らざらむ

　　普き門は人しさゝねば

の如きは人々が集まつて共に諷詠したことが榮華物語に載つてゐる。當時菩提講、涅槃講、藥師講などが所々の寺院で行はれ、莊嚴な式にあやかり、說經聽聞しようと集まり、そのさまを歌詠した。傳敎大師が一念三千の觀を修める爲に空假中の三諦を以てし、煩惱卽菩提、卽身成佛をモツトーとしてゐた。その奧深い思想、幽玄な境が次第に歌詠に入り、經典では

法華經が最も多く詠まれた。後拾遺集には土御門右大臣家の女房が

もろともに三つの車に乘りしかど

我は一味の雨にぬれにき

と詠んだ歌を擧げてある。上句には長者の子の火宅にあるのを、羊鹿牛の三車にて救出した譬喩品の意をよせ、下句は以二一味雨一潤二於人華一の藥草喩品の語を以て一首を仕立てゝある如く、當時の人は女流でも重要な經文を體得してゐたらしく、赤染衞門、伊勢大輔、小辨、康資王母、辨乳母等の集を見ると法華經等の要文などを巧に諷詠してゐる。法華經に次では維摩經、涅槃經、華嚴經等も詠まれてゐる。金葉集には心經、遺教經や普賢十願などが詠まれ、千載集には大品經、往生講式等の歌も見え、彌陀の十二光佛の歌もあり、三十三所の觀音詣なども行はれそれを詠んだ歌も載つてゐる。後拾遺集以後は釋敎歌は神祇歌と對して集の一部をなすに至つたのは佛法弘通の結果である。

## 第四節　發心和歌集と法門百首

佛教の弘通は以上に止まらないで、時世は個人で宗教歌集を發表するやうに進展した。その卒先者は村上天皇の皇女選子內親王である。皇女は少くして野宮に入り三とせの潔齋を終へ、十二歳にして賀茂の齋院に立たせられ、五十七年の久しきに亙つてその職にあらせられた方であるが、神に仕へながら佛陀を尊み、諸經の義に通ぜられ、長元八年六月蓮華往生を遂げられた方で、寛弘九年發心和歌集を著はされた。一集僅に五十五首であるが漢文の序もあり、一つのまとまつた集で、その冒頭に「妾久保二念於佛陀一常寄二情法室一爲二菩提一也」云々と記され、その內容を檢するに、菩薩の四弘誓願から普賢の十願、また轉女成佛經、如意輪教、阿彌陀經、理趣分、仁王經、本願藥師經、壽命經、無量義經、法華經、普賢經、涅槃經にも及んでゐるが、その中心をなすものは法華經である。

　誰となくひとつの法の筏にて

彼方の岸につくよしもがな

は四弘誓願の中の無量無邊のあらゆる衆生も救濟しようと誓はれた衆生無邊誓願度を譯したもの。

　いかにしてつくして知らむ悟ること
　　入ることかたき門ときけども

は一切の法門を悉く學び究めようとする法門無盡誓願智を詠じたものである。法華經の方は序品の佛子を思ひて未だ嘗て睡眠せず云々を

　ぬる夜なく法を求めし人もあるを
　　夢の中にて過す身ぞうき

と反省的に詠じられたものから末は願以此功德普及於一切云々を

　いかにして知るも知らぬも世の人を
　　蓮の上に友となしけむ

で結んである。此の如き自己反省から民衆濟度の大願に進んである。宇佐八幡宮に神宮寺をたてたのはやく遠き昔であるが、嵯峨の野宮で瓦葺染紙髮長中子などの忌詞を學習され、賀茂神宮に久しく奉仕されてゐらせられる中にこの著作のあつたことは神佛の境が一紙を隔つる程もなかつた時相を語る證據ではあるまいか。尙江戶期に成つたものながら片岡山や富の緒川を繙いて見ると、佛典が如何に我等の祖先により優美高尙な三十一文字に詠ぜられたかに驚かざるを得ないのである。

釋敎和歌集として、第二回目に出來たのは寂然の法門百首である。この集は春夏秋冬祝別變述懷無常雜の十門に分つてある。その成立年時は確かでないが、平安朝の末期と見て大きな誤はなからう。寂然俗名は賴業、崇德院に仕へて從五位壹岐守となつたが兄爲業弟爲隆と共に剃髮して大原山に入り寂念と號した。兄弟三人が三人まで墨染の衣を着けて同じく大原山にこもり三寂の名を留めたのは如何なる機緣によつたのか。一門の哀史は閉ぢられて今に開かれない。風雅集には崇德院を悼み奉つた作が載つてゐる。或はその事には與らなくても

保元の亂に際し、世相の頽を憂へしめなどした結果ではあるまいか。この百首は悉く金玉といひたい。その釋文はいづれも名文である。歌人木工權頭爲忠の子、歌の血を引いて、更に出色のものが多い。

おしひらく草のいほりの竹の戸に
　袂すゞしき秋の初風

の如きは無量義經の開ニ涅槃門一、扇ニ解脱風一を詠んだもの。

五月雨に入江のあやめみがくれて
　ひく人もなしに朽ちぬべきかな

は摩訶止觀の雨多郎爛を詠んだもの。

諸人の連ぬる袖に散かゝる
　花もわきてぞ身にはしみける

の如きは維摩經の天女の散せる花二乘の身に著きて離れず、菩薩の身に著かざるを說いた語

を詠じたものである。百首中、法華經に由つたものが二十六首、摩訶止觀を論つたものが十三首、輔行傳弘決によつたものが七首、その他法華玄義、法華文句大智度論等天台に關するものが多々で、涅槃經、維摩經、華嚴經、般若經これに次ぎ、阿彌陀經、雜寶藏經、善導疏の中に資りたるものも少しはある。尙この百首には每首歌意を推廣演繹したる註文を加へ歌文相俟つて渾然たる一大佛敎文藝を織りなしてある。試に卷頭の無明轉爲レ明、如ニ融レ氷成一レ水を詠んで一首とその釋文を擧げると

春風にこほりとけゆく谷水を
　心のうちにすましてぞ見る

山ふかきすみかもあら玉の年立ちかへりぬれば、あらしの聲もかはり、峯の朝日ものどかなるに、止觀の窓おしひらき、かすかなる谷を見やれば、音たえにし山水も春しりがほに出づる波いと哀なり。妄想おのづからしづまり、法門心にうかびぬれば觀慧の春の風に無明の氷とけて生死のふるき流、法性の水とならん折はかくやと思よそふるにや、

すまして見るといへる此心なるべし。

のやうである。釋文は他の手に成るか、自ら註して人のなしたやうにしたものか明でないが、流暢の筆致思ひやるべきである。寂然には別に唯心房集があり、五十篇の今様を自撰したもので、梁塵秘抄と共に傳ふべきものである。心の友西行は自然に隱れ寂然は讃佛乘に隱れたものか。この法門百首こそ玩味すべきである。

## 第五節　讃頌文學

凡そ佛會には朝廷に於けると官寺に於けるとを問はず、いづれも莊嚴な儀式を擧げられる。恰も神の祭典に神樂を謠はれ大和舞などが奏せられるやうに、音樂を伴ひ舞踊さへ行ひて佛德を讃し、或は敎化善導につとめる。そこに佛敎藝術が榮え、讃頌文學が成生するのである。この讃頌文學に和讃があり、敎化がある。敎化といふ語は法華經にも轉二無上法輪一敎二化諸菩薩ともある如く、人を善道にみちびくことに用ゐたが、後には聲明の節で朗唱する諷誦文

を指すやうになつた。これに散文體のものがあり、律語體のものがある。律語體のものは四句を基本とし、その一聯から成るものを片句といひ、四句二聯から成るものを諸句といふ。天台宗で八講に用ゐるものは片句、眞言宗所用のものは諸句である。その作者も天台用ののは行基の作と傳へてゐるが、勿論後人の作である。その末尾を「ものこそありけれ」と結ぶのが通型となつてゐる。

龍女は佛となりにけり
などか我等もならざらむ
五障の雲こそあつくとも
如來月輪かくされぬものこそありけれ

は眞言宗用の型である。この類を集めた敎化之文章色々といふ古寫本中には三十二相とか、梵音とか、後誓とか、六種とか、勸請とか、懺悔とか、錫杖などゝ記したものもある。併しいづれも文學としては低級なものである。

和讃には教祖や碩德を讃頌するものと教義を和解するものとがある。舍利讃歎や天台大師和讃の如きは前者に屬し、慈慧大師の本覺讃の如きは後者に屬する。眞言よりも天台宗に多く、天台の中には山門派に多く、寺門派に少いのは、叡山には慈覺に次いで空也千觀源信等の碩學が出てつぎ〳〵に相承して名作を出したからである。慈覺は五台山に學んで彌陀念佛の法を承け、歸朝の後比叡山上に常行三昧堂を建立し、西方願生を披瀝してゐる。叡山は教學上法華經は最も重要のものとし、大智度論を羽翼とし、涅槃經を補助經とし、大品經を觀法の所依としてゐるが、眞言禪をも交へ、支那に於ける天台とは自ら異るものがあり、文學に於ては法華經に亞いでは阿彌經の思想にはぐまれたものが少くないのである。

天曆の御代に至り、光勝が出で空也念佛を創し、諸國をめぐりて民衆にこれを勸む。その足跡は遠く陸奥出羽の邊陬にも及び、その

一度も　南無阿彌陀佛と　いふ人の

蓮のうへにのぼらぬはなし

といふ短歌式の和讃は諸人の見易い柱の上などに書きつけて人々に謡はせ、また夢に極樂に到り蓮華の上に坐してながむるに、その莊嚴のうるはしいことは經文に說いてあるところと全く同じであることを知り、

極樂ははるけき程とき丶しかど
　つとめていたる所なりけり

と誦したともいふ。世に汎く行はれてゐる。

長夜の眠りひとりさめ
五更の夢におどろきて
靜に浮世を觀ずれば
僅に刹那の程ぞかし

で始まる七五調四行から成る和讃の三章は空也和讃と呼ばれてゐるが、或は後人の作かも知れぬ。けれどもよく無常迅速を謡つてあつて、而もその節奏が宜しきを得てゐるので、よく

耳から入つて世の善男善女の心をよく捉へるのである。

千觀律師は顯密二教を兼習し、食時を除く外書案を去らなかつたといふ、極めて博渉の人であつた。その彌陀和讃は都鄙老少これを謡つたと日本極樂往生記などに見えてゐる。但しその長さは同書に二十餘行とあるに對し學者間に異説があり、現に今も謡はれてゐるものは

沙婆の世界の西の方
十萬億の國すぎて
淨土は有りつ極樂界
佛はゐます彌陀尊
七重行樹かげ淸く
八功德水池すみて
苦空無我の波唱へ
常樂我淨の風吹きて

天の音樂雲にうつ
黄金の沙地にしきて
晝夜六時に迎へつゝ
寶の蓮雨ふりて

で始まつて七五二句を一行とすれば六十八句三十二行となる。隨つて志田博士は一行六句より成るとし、廿行とあるは十行の誤といひ、高野辰之博士は二十行とあるは三十行の誤とし、大矢透博士は七五四句を一章とし、十二行脫落したものと見做してゐる。(こゝにはそれらの批評を避け別に述べることゝする。)この和讃は彌陀の淨土の依正二莊嚴を讃歎し、十善五逆謗法の罪人も一たび南無と唱ふれば、彌陀の誓願により極樂世界へ引接されるから、人々信を起してその悲願にたよるべきことを優雅典麗な文詞で綴られてある。

千觀に尋いで出たのは源信卽ち惠心僧都である。僧都は和讃の作者とし最も卓出してゐた。その天台大師和讃は七五調二百數十句から成り、天台智者大師の一生を述べたもので、

高僧和讃としては最も古く、後の同種類のものに影響を與へたことが鮮くない。梁塵秘抄にはそれを切りつめて

天台大師は　能化の主
眉は八字に　相分れ
法の使と　世にいでゝ
ほと〳〵佛に　近かりき

の如く諷詠し易いやうにしてある。神歌で有名な

柴の庵に　聖おはす
天魔は種々　惱ませど
明星やうやく　いづる頃
つひには從ひ　たてまつる

の如きはその想により句を取捨して汎く世に行はしめたもの。その來迎和讃は流麗な筆致を

用ゐてあつて、その圓滿な相好を叙したるあたりは一たび誦すれば、端嚴の感じが自ら發すると云はれて云る。

眼に滿つる慈悲の色
落つる涙もとゞまらず
耳に聞ゆる法の聲
歡喜の心いくばくぞ

とその高潮した感じを述べてある。八百七十餘句から成る極樂六時讃もその作といはれ、二十五菩薩和讃も山王和讃も同じ手に成ると云はれてゐる。僧都は横川に籠つて往生要集を著し、鎌倉以後の念佛宗に絶大なる影響を與へた。蓋し慈覺の念佛は天台理觀の念佛、善導流の念佛、密教の念佛、引聲の念佛等を含んだ複雜なものであつたが、天台の念佛を捨て直ちに天親の淨土論に據り、往生極樂の教行は濁世末代の目足なりと斷じたところに教義上重大なものが含まれてゐる。さうしてその厭離穢土欣求淨土の主張は後の文藝の上に甚大な影響

を與へたのである。

惠心の弟子に覺超があり、阿彌陀如來和讃を作り、華嚴から出た永觀律師も興福寺の涅槃會の爲に舍利講式を定め、その和讃をも作つたと云はれ、文殊應化の稱があつた珍海已講は菩提心讃を作り、少納言入道は智證大師和讃を作り、その子櫻町中納言成範は弘法大師和讃を作り、寶池房證眞は慈惠大師和讃を作つたが、惠心の作をこの類の最高峰とし漸次に下降した趣がある。

## 第六節　今樣と梁塵秘抄

萬葉の長歌が衰へて、これに代つたものは今樣である。五七調が七五調に變つた原因に就きては定說がない。唐の越天樂の影響だといひ、或は和讃から導かれたものだといひ、上代にあつてあまり用ゐられなかつた調子が大にとりたてられたものだといひ、短長句の重くるしいものから長短句の輕快を好む時代人の傾向だといひ、未だ不動の定說はないが、それら

の諸因の錯綜したものかも知れぬ。性空上人が生身の普賢菩薩を拜みたいと希ひ、夢想によつて攝津の神崎に到り遊君を訪ねて今様歌を聞いて歡喜したことや、慧心僧都が心中の所願を金峰山の巫女に占はせたところが、「十萬億土の國々は、海山隔てゝ遠けれど、心の道だに直ければ、つとめて到るとこそ聞け」と今様で答へたことを古事談に載せてゐるから、今様は圓融花山天皇の頃には既に行はれてゐたと見るべく、教壇の碩德に關係があつたことを知るべきである。さうして一條天皇の御代には朝仕する若公達が切りに謠つたことが諸書に見え、それから後白河天皇は深くこれを好ませられ、苟もこれに達してゐる者には卑賤を嫌はず遊女でも傀儡にでも就いて習はせられたもので、承安四年九月には十五日間御所に於て毎夜今様合を遊ばされ、終にはその作品の結集を行はせられた。これが所謂梁塵秘抄二十卷である。この書は今卷二と一の卷の少部分しか遺つてゐないが、平安朝の民謠として貴重すべきものである。而してこの集に口傳集が添つてあつた。祕抄の卷二に收めてあるものが五百四十餘首。その中二百八十首までが法文歌であり、神歌の中にも佛教に關するもの多く、

その中神分といふは佛法擁護の神に手向ける歌を稱したもので、法文歌の中に編入すべきである。して見ると當時の民謠が佛教に關係の極めて篤かつたことが分る。中に詩趣の豐かなものが少くない。

佛は常にいませども　現ならぬぞ哀れなる
人の音せぬ曉に　ほのかに夢に見え給ふ

の如き、また前に擧げた

柴のいほりに聖はいます　天魔はさまぐに惱せど
明星漸くいづるほど　終には從ひ奉る

の如き

寂寞音せぬ山寺に　法華經誦して僧ゐたり
普賢からべを撫で給ひ　釋迦は常に身を守る

の如き

曉靜かに寢覺して　思へば泪ぞ抑へあへぬ
はかなく此世を過しても　いつかは淨土へ參るべき

の如き

極樂淨土の東門に　はた織る蟲こそ桁にすめ
西方淨土の燈火に　念佛の衣ぞ急ぎ織る

の如き

大品般若の春の水　罪障氷のとけぬれば
萬法空寂の波立ちて　眞如の岸にぞ寄せかくる

の如き、敬虔なもの、明哲なもの、純信なもの、洒脫なもの、滑稽なものとり〲である。

さてこの法文の歌を檢べて見ると法華經が中心となつてゐる。その他には花嚴、阿含、方等が各二首、般若と涅槃が各三首あるが、これとても天台大師の五時教判より來つたもので、（佛の一代五十年間衆生の機根に應じて應病與藥の說法を時節に約しての區分である）この

順序にあるのが却つて法華中心の證明をなすものと謂はれる。

釋迦の月は隱れにき　慈氏の朝日はまだ遙なり
その程長夜の闇きをば　法華經のみこそ照いたまへ

といひ

法華經八巻は一部なり　廿八品いづれをも
須臾の間も聞く人の　佛にならぬは無かりけり

といひ

法華のみのりぞ頼もしき　生死の海は深けれど
諸經くりよむ喩にて　終に我等も浮びなむ

といひ

法華は佛の眞如なり　萬法無二の旨をのべ
一乘妙法聞く人の　佛にならぬはなかりけり

といひ

峰に起き臥す鹿だにも　佛になることいと易し

己が上毛をとゝのへ　筆にむすび

一乘妙法かいたんなる功德に

といひ、いづれも法華經を信念とし、これによりすべての人間は云ふまでもなく、悲情のものまでその功德により無明長夜の闇を破り出離得脫を得るとしてゐたのである。これにより天台の敎義が平安朝の人心にいかに浸徹してゐたかゞ察しられる。

法華の利益には靈山往生と極樂往生との二樣があるが、今樣にあらはされてゐるものは前者が少く後者が多い。法華の開結の一つとして用ゐられた觀無量壽經の渇仰も注意せねばならぬことは先輩の既に說いてゐるところで、慈覺以後惠心空也等によりて導入された極樂往生の想が漸く人心に浸み入つたことを語るもので、當時法華と念佛とは衝突せず並び行はれてゐたのである。

阿彌陀佛の誓願ぞ　返す〴〵もたのもしき
一たび御名を唱ふれば　佛になるとぞ說いたまふ
淨土は數多あんなれど　彌陀の淨土ぞ優れたる
九の品なんあんなれば　下品下にても有りぬべし

と淨土を禮讃し、法華經を詠んだ作にも

法華を行ふ人は皆　忍辱鎧を身に着つゝ
露の命を愛せずて　蓮の上にのぼるべし　（勸持品）

の如く蓮華往生を謡つたり

四大聲聞つぎ〴〵に　數多の佛に逢ひ〴〵て
八十隨相備へてぞ　淨土の蓮に上るべく　（授記品）

の如く、淨土の蓮などいふ法華經に見えないことを附け加へるに至つた。また神分の中にも

佛法ひろむとて　天台ふもとに跡を垂れ

おはします　光を和げて塵となし
東の宮とぞ　いはゝれおはします

の如く佛教に因んだものが多く、佛歌・經歌・僧歌・靈驗所歌は云ふまでもなく雜の歌にも

鵜飼はいとほしや　萬劫としふる龜殺し
又鵜の首をゆひ　現世は斯くしても有りぬべし
後生我身をいかにせん

の如きがあり、佛教と文學が如何に抱合したかを見るに十二分であらう。

## 第七節　物語と佛教

平安朝の初に至りて假名は發達を遂げた。むつかしい漢字と違ひて半百の音字ですべてが表現されるので、廣く流通を見るに至つたことは國文學の隆昌を來たす大きな誘因となつた。打續く太平で干戈を執る要もなく、上流の人士は文學や藝術を樂しむ餘裕があつたので創作

も盛に起つて來た。爰にはまづ物語に就いて考へて見やう。

物語の祖といはれてゐる竹取物語は作者と年代がはつきりしないが、古今集の前または直後と見てゐる學者が多い。興味深い短篇小說で、一般に讀まれてゐるので、その梗概は擧げるまでもないが、竹を取つて生業としてゐる翁が、竹の中より玉の如き愛らしい少女を得てしばらく養ふ中に絕世の美人となつたので、種々の人がこれを娶らむとあらゆる力を盡して交涉するが、天から假りに此の世に下つてゐるので、何れの人にも添ふことが出來ぬと云つて終に昇天して仕舞ふのである。多くの男性が求婚の爲にうき身をやつす物語とも見るべく、財力で求婚の出來ると思ふ世相を打壞す爲にものしたとも考へられる。また神佛思想を浮世の事に託したとも見られる。いづれにしてもその構想は萬葉集に見えてゐる竹取翁の長篇とちがつて巧みに出來てゐる。ロマンスも斯うも書けばまづ成功である。爰にはこの構想にヒントを與へたものは何かといふ問題を考へて見たい。契冲は竹の中から人が出てくるのは佛典にある本生譚に基いたとし、大寶廣博善住秘密陀羅經を指摘してゐる。併し三本の竹

が十ケ月目に自ら裂けて光輝く三童子を生じてこれが三如來となるといふだけでは緣がうすいやうだ。幸田露伴氏は前說をたよりないとし月上女經を擧げだ。月の美人はこの世の戀を捨て慾火に燃える若者どもを遺して昇天した筋の類似に重きを置いた。藤岡東圃氏は神佛思想が漲つてゐるので、漢武內傳などの翻案と見做した。山邊習學氏は天上の世界と地上の世界とは美醜淨穢が比べものにならぬ。一旦淸められたものが二度穢い境に落ちてはならぬとの長阿含の思想がはつきりと物語の中に認められる。尙これにもまして佛教の因果應報の觀念が民衆化したものと說かれてゐる。面白い見方だ。とに角作者は想像力も逞しく佛典の智識も相當にあつた人と考へられる。後のうつぼ物語に大きな影響を與へてゐる。

竹取と前後して出た物語に伊勢物語がある。在原業平といふ風流のやさ男を中心とした戀物語で、一面よりいへば多くの戀歌に詞書を加へてつなぎ合せた小說とも見られる。古來非常に多く讀まれた物語であるが佛教には關係がうすい。主人公が詠んだ

つひにゆく道とはかねて聞きしかど

昨日けふとは思はざりしを

といふ辭世を以て結めた點を考へれば無常迅速の理を寓したものと云へる。その作者は業平の自記に他の補說したものといひ、或は文章の類似から伊勢の御の作といひ、定說はない。文章が簡潔であるので、竹取よりも古いと見る說もあるが、容易く斷じがたい。

この二つの物語に次いで種々の物語が出たやうであるが多くは佚して了つて、現存してゐるのはうつぼ物語や落窪物語で、それから物語の王である源氏物語、次にはそれを摸した狹衣、その他堤中納言といふ短篇物及濱松中納言物語が遺つてゐるぐらゐである。

うつぼは天曆より二三十年後に出た大きな物語で二十卷から成つてゐる。竹取がかぐや姫を中心としてゐるに對し、これは太政大臣家のまな娘貴宮を中心とし求婚小說である。その相手の人々は上は皇族以下近親・才人・學者・技藝家・高僧・素封家・力行者多樣の人が姫の美しい姿にあこがれ我がものにせむと樣々の悲喜劇が演ぜられる。始の俊蔭の卷は渡唐談で波斯國へ漂着し、仙人に助けられ音樂を學ぶ譚で荒唐なロマンチックなものであるが、藤

原の君以下の巻々は寫實的でノーヴェルの要素を具へてゐる。遣唐使の船の漂泊といふことは我に高岳親王の御事跡のごとき幾らかの史實がないではあるまいが、その筋から考へて見ると、大智度論や阿含經や大唐西域記等に記された說話を綜合して書いたのではないかとも云はれてゐる。

この俊蔭の巻と他の十七巻とは結構や描寫が大分ちがつてゐる。恐らくは俊蔭の巻が已に出來てゐたのに後に加へられたものであらう。それで巻々の次第順序に議論が生じるのであらう。斯くして一つの話には面白い筋があるが、全體としては機構が整つてゐない。これは長篇物の陷り易い弊竇にかゝつたのである。竹取に於てはかぐや姫は五人の競爭者は勿論帝王の御使にも御斷り申して天に上つて仕舞つたので「けり」がついてゐるが、貴宮の方は、腕の力でも金の力でも才の力でも法の力でも姬宮の心を動かすことは出來ない。唯音樂の天才である俊蔭の孫の仲忠ばかりには宮も意がないではなかつたが、これも東宮の御召しによつて參內することゝなり、仲忠は他の姬宮と婚して幕を閉ぢるのである。この物語に於ける佛

教的の色彩はといへば、繼母の讒により父をおきて山に遁れた忠こそが半生であらう。梅の花笠の卷に、舊友左大將正賴の問に對し遁世の次第を告げ、暗部山に入つた心境を

念じあまりてなむ十四歲にてなむ罷りこもりし。ことし二十年になむ侍りぬる。年若くて忍辱の袂にまかり後るゝ事一生の悲びに覺え侍りしかば、前生の罪業をも滅さむ。かの母とじをも佛の御國にさぶらはせむとて、全く穀を絕ちて行ひまかりあるく

と答へてゐる。この高德の行ひ人が貴宮のめでたく淸らな姿を一目見てからは熊野參詣も中止し、夕暮に落ち散る花片に、爪もとから血をさしあやして

憂き世とて入りぬる山はありながら
いかにせよとか今も佗しき

と書きつけてゆくといふ如く戀の熱情には多年修養の道もくづれてゆくことを叙してゐる。

落窪はまゝ子いぢめの小說、溫順で消極的な落窪の君と剛愎で偏愛の繼母、落窪の夫君の感情的反抗的で幾分義俠的な性格とは粗描ではあるが孰れも相當にうつされてある。大臣の

北方になつた昔の落窪の君は七十餘になつた繼母に「功德をおぼせ」と勸めて尼になした記事は甚だ簡單である。夫の君は舅の爲に法華八講を行ふくだりなどが佛敎の色が濃く出てゐる方である。

玆に八講の次第を史實から考へて見るに、村上天皇は大皇太后の爲に天曆元年三月柏梁殿に於てこれを擧行され、十六日に始め十九日に滿了した記事が日本紀略に載つてゐる。西宮記に據ると、八講に於ける講師は十人いづれも鈍色の法服を着ける。聽衆は二十人、梵音錫杖の人々も召される。五卷の講が了る日、殿上人は御捧物をもちて公卿の前に立ち、藏人は薪及若菜の籠を荷ひて行道したとある。朝廷に於てはこれより恒例になつてゐる。落窪は他の物語と異なりて叙事が主となつてゐて、自然の景はあまり書かないのは物足りない感じがする。次にこの催しの一端に觸れて置く。

阿闍梨律師などいとやんごとなき人多くてあはれに尊き經どもとて經一部を一日に充てて、九部なむし始め給へりければ、合せて佛九體經九部なむかゝせ給ひける。云々

朝座夕座の講師に鈍色の袷の衣どもかづけ給ふ。云々

より始めて、寫經の色紙や軸のことから人々の捧物などのことが仰々しく書いてある。

次に藤原氏の全盛時代に成つた源氏物語に就きて述べる。一世の源氏の大將光の君を中心とした四十帖とその子薫の大將及匂兵部卿宮を中心とする宇治十帖とその間をつなぐ三帖と合せて五十三帖から成る大物語はその梗概を知ることだけでも容易なことでなく、昔は小かどみや忍草で間に合せた學者もあつた程で、而もこの大作がかよわき婦女の手に成つたことを思ふ時、有髯の男子も冷汗三斗の概が無くんばあらずである。世相をゑがきてその間に作者の理想を寓してある物語のこととて、堂塔の建立が多く、造佛寫經の供養が頻々で、また佛會の典儀が盛んであつた時世の作なれば、佛教に因めることが少くない。花から花にうつる蝶の如き源氏の君の生活がいかに麗筆で書かれても教訓にならぬことが多い。されども誨淫の書と貶するも當らない。儒數といふ「ものさし」で文學を批判する時代には作者の靈は地獄におち入つたかも知れぬ。式部の魂を安んじる爲に源氏供養を行ひ表白文を佛に奉ることも

起つたのであらうが、文學本位の立場から眺め、物のあはれをいかに表現したかと考へるときはそこに不朽の名作であつて、世界の最も優秀な文學と頡頏することが可能であると領かれると思ふ。今こゝには源氏の大筋を書かうとするものでもなければ、これが全般に亙る批評をする積りもない。唯佛教がいかにこの物語と交渉があるかといふ問題の一端に觸れて見ようと思ふのである。式部は天台宗の敎がひろく行はれ、眞言の祈禱が盛んであつた時代に學者の家に生れ庭訓を受けた女性で、佛敎上の智見も優れてゐたことはその日記にも徵せられる。御堂關白に召され、土御門邸に上東門院に奉仕してゐた時の記錄を見ると、御安產の爲に取り行ふ「不斷の御讀經の聲々あはれまさる」のを聽き、「後夜の鐘うちおどろかし五壇の御修法はじめつ。我も我もとうちあげたる伴僧の聲々遠く近く聞き渡さる」といひ、「法住寺の座主は馬場殿、遍智寺の僧都は文殿などにうちつれた淨衣姿まで、ゆゑ〳〵しき唐橋どもを渡りつゝ木の間を分けて歸り入る」といひ、「山々寺々を尋ねて驗者といふ限りは殘りなく參り集ひ、三世の佛もいかにか聞き給ふらむと思ひやらる」といひ、「やんごとなき僧正僧都か

さなりゐて、不動尊の生き給へる像をも呼び出で現はしつべう賴みみ恨みみ聲皆かれわたり」云々といひ、「頂にはうちまきの雪のやうにふりかゝり」云々といふが如き記事を拾ひとることが出來る。吾等の今日には疎い佛教上の儀軌が目の前に行はれるさまを幾度となく實見し、また尊き說教も聽聞したことも少くなかつたであらう。此の如き不斷の御讀經、法華經の供養、懺法、八講などの大小法會が如何にこまかに、いかにおごそかに描き出されてあるかといふことは、御法の卷、若菜の卷、蜻蛉の卷、榊の卷等を繙いて見ると、日記以上に委しく書かれてあることが分る。佛のかざり、經机のおほひ、殿堂の莊嚴、講師のふるまひ、伽陵頻迦の妙音の如き、奏樂などに法悅を感じた有樣も目に觀、耳に聽くやうな感じがする。本意(ほい)とか行ひといふ語は中世文學には一般に出家、勤行の義に使用されてゐる。式部が理想的女性として描いた紫の上も病にかゝりては「いかでなほほいあるさまになりて、しばしもかゝづらはむ命の程は行をまぎれなくもたゆみなく思し」と願つてゐられる。年頃の御願にて書かせて奉つた法華經千部急ぎて供養され、七僧に法服品々賜つてゐる。御自分の二條院

に於けるこの供養は三月十日花盛の頃で、その式場は「佛のおはす處の有様も遠からず思ひやられ、薪こる讃歎の聲もおどろ〳〵しく、格段に深い心のない人までも罪障が消える程であつたと御法の巻には見えてゐる。藤壺の中宮の八講のことは榊の巻に載つてゐる。明石の中宮の御八講は蜻蛉の巻に述べてある。今鈴蟲の巻の御持佛の一節を引いてその莊嚴のさまを示して見やう。

幡のさまなどなつかしう。心ことなる唐の錦をえらびぬはせ給へり。（中略）花机のおほひなどをかしき纐纈もなつかしう、凊らかなる匂ひ染めつけられたる心ばえ目なれぬさまなり。夜の御丁の帷を四面ながらあげて後の方に法華經の曼陀羅かけ奉りてしろがねの花瓶に高くこと〴〵しき花の色をとゝのへて奉れり。名香には唐の百歩の香をたき給へり。阿彌陀佛、脇士の菩薩各白檀して作り奉りたる細やかに美しげなり。閼伽の具は例のきはやかに小くて、青き白き紫の蓮をとゝのへて、荷葉の方を合せたる名香蜜をかくしほろゝげてたき匂はしたる一つかをりに匂ひあひて懐かし云々

等にその一斑が推し量られる。

初音以下野分に至る六帖を讀み歡樂にひたつた讀者が御法から幻の卷に及ぶと、源氏の君の亡妻を忍ぶの情が深く濃かで、一字一涙その筆の限りを盡してあるのに、袖の濡へるのを忘れるであらう。

佛菩薩に對する信仰は隨所に現れてゐる。中にも彌陀の信仰が最も多く、觀音、藥師がこれに次ぎ、釋迦・大日・普賢・彌勒・勢至・不動はまたこれに亞いでゐる。蓋し惠心僧都の歸依は一般に盛んであつた爲であらう。夕顏の卷には「今なむあみだ佛の御光も心淸く待たれ侍るべき」と見え、宿木には「あみだ佛より外には見奉らまほしき人もなくなりて侍る」ともあり、明石の卷には「晝夜六時の勤に自らの蓮のうへの願をばさるものにてたゞこの人を高き本意かなへ給へとなむ念じ侍ると」あり。若菜の卷には一遙に西の方十萬億の國隔てたる九品の上の望は疑なく侍りぬれば」などゝ彌陀信仰を禮讃してある。宿木の卷のは往生救濟の佛として他力信仰のものと見るべく、明石の卷のは現世利益後生善處の現當二世救濟

を願つてをる。若菜の巻のは淨土教本來の報身佛を指したやうであり、夕顏のは法身佛でなく、來迎思想と共にこの上に接近し來つて人間と親しい應身佛を指してあるやうに彌陀信仰にも幾つかの差がある。次に法華經の弘道から觀音信仰はこれに亞いでゐる。如意輪觀音で有名な石山寺や、淸水の觀音や、十一面觀音をまつつてある長谷寺に願かけたことは關屋や玉葛や浮舟の巻などに見えてゐる。その一には佛の中には長谷なむ日の本の中にはあらたなるしるしあらはし給ふと唐土にだに聞えあんなる」と人の口を借りて述べてある。釋尊信仰は須磨の巻には源氏の君がみづから釋迦牟尼佛弟子と名のることが見え、藤のうら葉には灌佛のことが出てゐる。藥師信仰は若菜の巻には供養のことが載つてゐ、手習の巻にも同じく一所見えてゐる。大日如來の信仰のことは夕霧の巻に律師が御息所の物のけを調伏する詞に「大日如來そらごとし給はずはなどて斯く某が心を致して仕る御修法に驗なきやうはあらむ」云々と見え、彌勒信仰は夕顏に一ヶ所あるに過ぎない。僧生活に入つた例は十數帖に亙つてその例を見る。尙僧と神官との半物といふべき修驗道のこともある。かく樣々なれども法華

經が中心であつたことは矢張動かない。

源氏を摸した狹衣には佛教に關したことは相應にあるが、これも同じく法華經が中心になつてゐる。さうしてその曼荼羅供養の條には自然の風物を佛前の莊嚴そのものと見立てたところもある。

果ての日は十三日なれば月の光さへ隈なくて兜率天までいとやすく澄みのぼり給ひぬべかめり。嵯峨野の花やう〳〵さかり過ぎて、女郎花色變り尾花の袖も白みわたりつゝ心細げにうち招きたるに露は重げにきら〳〵と置きわたりたるは如意寶珠かと見えわたされたるに、聲の聲々樣々に懺法にうちそへたるは迦陵頻伽の聲にも劣らず貴くあはれに聞ゆ

と叙し、次に譬喩品の要文を引いて結めてある。一條太政大臣伊尹の子の後少將義孝は死の迫るに及びて、方便品を讀みて極樂往生を遂げたことが大鏡に見えてゐる。誦經は一般に行はれゐたもので、物語はこれらの實生活を寫し出したものが多きに居るのである。

## 第八節　日記文學と佛教

王朝時代に日記文學を刱めたのは紀貫之である。承平四年に任が滿ちて土佐から歸京するに方り、「男のすといふ日記を女もして見んとてするなり」と冒頭に女になつて筆を執つたやうに裝ひ、海路の佗しさ、海賊の返報の噂さ彼地でなくした娘の思出などを心に惱ましく思ひながら滑稽を交へて五十餘日の行程を錄したもの。この書には佛敎との交涉はない。次に出た增基法師の庵主も同樣であるが、右大將道綱の母なる人の蜻蛉日記には述ぶべきことがある。この書は天曆八年から天延二年に至る約二十一年の日記といはれてゐるが、始の方三分の二は追想によりて記述したもので、記憶をたどるといふより刹那々々の直觀を巧みに描いてある。蓋し著者の性質がみづ〳〵しい若さを失はないで、觀照力が強く、多情な大槪家と性格を異にし、飽くまで眞面目で、遺瀨ない感情もさながら寫し出してゐるので人を引きつけるものがある。斯ういふ性質の婦人は節操のない良人に追隨することを欲しないで、信

仰に生きようとする。即ち初瀨に參つたり石山に籠つたりするのは、觀世音菩薩の法力をたよりとしたのである。天祿元年七月石山に詣でた條にも「夜になりて齋などものして御堂にのぼる。身のあるやうを佛に申すにも涙にむせぶ」云々と見え、御堂にて曉方に見たる夢も佛のみせ給ふのであると信じ、二年三月朔日の條には「幼き人を呼びて長き精進をなむ始むる」云々と見え、「土器に香うち盛りて脇息の上に置きやがておしかゝりて佛を念じ奉る」といひ、「疾く死なさせ給ひて菩提かなへ給へ」と行ひをなし、天祿二年六月には鳴瀧に籠り髮を削らむと決心してゐたが、愛子道綱の迎に來りたれば止むなく都に歸つた。斯ういふ風に世を侘びて疾く佛の救を得たいと希つた志が斷片的に散見してゐる。

紫式部日記には上東門院の御安產の祈禱のことがやゝ細かに記された外には佛敎に關したことは少ない。その生活や同輩の批評など見るべきものがあるが、源氏物語の如く信仰生活のことは殆ど記されてない。蜻蛉日記著者の姪に當る菅原孝標朝臣の女は夢を追うてゐる小說の愛讀者で父に從つて常陸の國廳にゐた少女時代に

姉繼母などやうの人々のその物語かの物語光源氏のあるやうなど、ところ〴〵語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、我が思ふまゝにそらにいかでか覺え語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に藥師佛を作りて手洗ひなどしてひとまに密に入りつゝ京にとくあげて物語の多くさぶらふなる、ある限り見せ給へと身を捨てゝ額をつき祈り申す

と自著更科日記の冒頭に書いてゐる程變つた信仰をもつてゐた。その願は空しくならず、後にはみつの濱松や朝倉の如き物語を作るに至つた。この日記には夢に關することが多く、黄な袈裟をつけた僧が來て「法華經五卷を疾く習へ」と告げた夢も記し、また阿彌陀來迎の夢も見てゐる。後には源氏物語の浮舟のやうな身にでもなりたいといふが如きはかない夢はさめて、「昔よりようなき物語歌の事をのみ心にしめで、夜晝行ひをせましかば、いとかゝる夢の世をば見ずやあらまし」と心よりの悔恨を發してゐる。(夙くより生じてゐたその錯簡も今は是正されて讀みよくなつて來た。)

## 第九節　隨筆枕草子と佛教

清少納言枕草子は我が國隨筆文學の祖であつて、兼好法師の徒然草の如きもこれに倣つたものである。枕草子は歷史的の價値が高いばかりでなく、內容も優れてゐるので、昔から紫式部と並べられ來つた。少納言の趣味は多方面で、觀察の雋敏であることは世に定評がある。式部のやうに佛敎の信仰は乏しいやうに云はれてゐるのは妥當であらうか、再檢討を要すると思ふ。菩提寺の結緣八講に詣でた。その歸來をもどかしく待つてゐる友に

もとめてもかゝる蓮の露をおきて
　うき世に又もかへるものかは

と答へてゐるのは唯他のうらを缺くとばかりと見るべきではあるまい。淸水寺にこもつたこともある。皇后宮から

山ちかき入相のかねの聲ごとに

戀ふる心のかぜは知るらむ

ものとこよなの長居や」と仰言があつたので、紫の蓮の花瓣に御返しを書いて奉つた。（二七〇段）泊瀨に籠つた記事もある。（一一〇段）若き法師が足駄をはきて長い廊下を倶舍の頌などを言ひつゞけて昇り降りするのをふさはしいと聞いたり、鐘聲が收つて餘韻がいづこから響くのかと耳をとゞめてゐる時、貴きあたりの御平産を祈る詞を聞いたりしたことも見える。皇后宮の父中關白が二條京極の邸に積善寺を移し、一切經供養を執り行つた狀をこの世ながらの極樂世界と見立てゝ書いてゐる。（二四七段）

大門のもとに高麗唐土の樂して獅子狛犬をどりまひ亂聲の音鼓の聲に物も覺えず、こはいづくの佛のみ國などに來にけるにかあらんと空にひゞきのぼるやうに覺ゆ

といひ、その式の次第を詳述し、關白の末子の僧都の君は全く地藏菩薩のやうだといひ、

事始まりて一切經を蓮の花のあかきに一花づゝに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位何くれまでもて續きたるいみじう貴し。大行道導師まゐり廻向しばしまゐりて舞な

ど日ぐらし見るに目もたゆく苦し

と書いてある。また小白河の小一條邸で結緣八講の時にも參會してゐる。講師清範が富樓那の辯を揮ひて講說するのを吾も吾も聽かんと皆高座に近くよらうとしてゐる狀が手にとるやうに描寫されてゐる。座席のあまりに狹いので、淸少は中座をすると、權中納言義懷が釋尊が開三顯一の御法を說かうとされた時、五千の增上慢は法座を中座したことに擬へ、「やゝ、まかりぬるもよし」と言はれたので、「五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と方便品の詞によりて應酬した態度の如きも經典をよく暗んじてゐたことが分る。(三八段)常に一乘を志してゐたと人に評せられてゐた。(九四段)佛に關してはまづ

如意輪は人の心をおぼしわづらひて頰杖をつきておはする、世にしらずあはれにはづかし。(八一段)

といひ、次に千手すべて六觀音、不動尊、藥師佛、釋迦佛、彌勒、普賢、地藏、文珠とならべ、寺は(一七八段)つぼさか、かさぎ、ほうりん、石山、粉河、滋賀といひ、經は法華經はさらな

り、千手經、普賢十願、隨求經、尊勝陀羅尼、阿彌陀の大呪、せんず陀羅尼といひ、陀羅尼はあかつき、讀經は夕暮（一八四段一八六段）といひ、尊きものは九條錫杖、念佛廻向といひ、（二四八段）樂しきものは心地あしき頃伴僧あまたして修法したる（二三八段）また遠くて近きもの丶中には極樂をその一に數へてゐる。（一五九段）これらにより淸少納言の佛敎に對するおほよそが窺はれる。卽ち經は法華經を第一とし、佛は觀音を第一に擧げてゐる。觀音は法華經の普門品に禮讃してあり、六道能化の主として種々に應現されてある。當時の佛敎は現世利益と來世得脫の二つを要としてゐた。この世に生れたもので延命の望をもたぬものはあるまい。隨つて攘災得福の思念が生ずるのである。觀世音淨聖は

慈眼視二衆生一　福聚海無量

とも云はれてあり、その妙智力はよく世間者を救ふともあるから、初瀨に詣でたり淸水に籠つたりするのである。右手に施無爲の印を結びて三障を破する正觀音の御姿は實に懷しい御姿であり、三目十八臂よく人間の三障を破して佛性を示される准胝觀音も賴もしく、千手觀

音は猶更たのもしく、ありがたかつたに違ひないのである。

## 第十節　假名の歷史と佛敎

朝廷に於ける修史事業は古事記を始めとし、書紀以下六國史の成立後は行はれなくなつた。これに次いで民間の學者の假名の歷史が發生した。その最初に成つたものを大鏡及榮華物語とする。中に大鏡は我國に於ける最初の紀傳體の歷史といはれ、帝王は文德天皇より後一條天皇に至り、大臣攝政關白家の列傳は閑院左大臣冬嗣より御堂關白道長に至る。始に名高い序があつて大宅世繼と夏山繁樹との二長老が問答をするのを青侍が聞書したやうに粧うてある。作者は藤原爲業說があり、源道方說があり、源經信說があるがいまだ確定するに至らない。いづれにしても道長に緣故の人か又はその崇拜者の手に成つたもので、帝王十二代大臣攝關二十八家に亙つてゐてもその中心は御堂關白の榮華を描くにあつた。その榮華は「日本國には唯一無二におはします」と云つてゐる。聖德太子の再世かといひ、その治世は彌勒の

世だと考へ、その才幹、膽略をたゝへるばかりでなく、詩歌の才も人麿赤人貫之以上とさへ見倣してゐるのである。史實を枉げない爲に昔話のさまにしなしたところなどその作意を想ふべきである。この書と佛教の關係を考ふるに、序に雲林院の菩提講に詣で、說經の始まる前の二人の談話とするところに夙くも佛教との交渉がある。全體記載の大綱を見るに、首に序あり、次に本經ともいふべき帝紀並に列傳があり、末に昔がたりと題し御堂關白の榮える所以を說いてある。これはすべての經文は序分正宗分流通分の三部から成つてゐるのに象つたものである。造寺の功德を氏の榮えに結びつけて考へてゐたのも佛教の因果應報のことわりから來てゐる。始祖鎌足は氏寺を多武峯に造つた。その子不比等は山階寺を剏した。この寺から始まりて八省院に於ける御齋會、藥師寺の最勝會、山階寺の維摩會には藤原氏の殿原が勅使に任ぜられ加供するのである。道長所願の無量壽院のめでたき造作は遠祖不比等の山階寺、基經の極樂寺、忠平の法性寺、師輔の楞嚴院も比べにならぬとした。あめのみかどの造り給へる東大寺も佛ばかりは大きにおはしますが、猶この無量壽院には並び給はずといひ、

唐土の西明寺をうつした大安寺よりも無量壽院が優つてゐる。爲光の法住寺も及ばない。難波の天王寺は聖德太子の御心に入れて造られたものであるが、猶この無量壽院がまさつてゐる。奈良の七大寺も十五大寺も比べるとこれに劣る。實に無量壽院は極樂淨土の出現で道長は眞の權者であるとしてゐる。その他圓融院の女御四條の宮の功德も御祈も如法に行はれたことや、小野宮右大臣が一女かぐや姬の息災を祈つたり我が身の滅罪生善の祈の爲に佛堂を作り僧をあつくもてなしたやうな事實を書くにも特に筆を用ゐた跡がある。當時佛敎が深き信仰の對象となつてゐた事を知ることが出來る。

榮華物語は大鏡と同じく御堂關白の榮華を旨とした假名の歷史で、一名を世繼といふ。宇多天皇より堀河天皇の寬治六年まで十五代二百餘年に亙つてゐるが、始めの宇多醍醐朱雀の三代は極めて簡單であつて村上天皇の御代よりの記事の準備に添へたものと見られる。全體が四十帖から成り、月宴から鶴林までの三十帖を前編とし殿上花見から紫野までの十帖を後編と見るべく、その作者には藤原爲業といひ、赤染衛門といひ、或はあらずといひ、前後兩編

作者を異にするといひ、後編は出羽辯であらうといひ、定說がないが、前後別人と見るのが正しいやうだ。大鏡と異なり編年體で、記事は概ね正確であるが、各編に優美な篇名を附し、御堂關白の薨去を以て前編を結めるところなど源氏物語に範を取つたもので、關白を權者と見做し、その薨去の章を鶴林と名づけたのは源氏の雲隱れに擬へたものと見られる。歷史とはいへ、この書は宮廷に於ける貴い方の冠婚葬祭のことや、それらの儀式に於ける人々の裝束や調度など有職に關すること、風俗史の資料となるべきことも少くないが、また佛教に關することが頗る多く、現世利益來世得脫の思想のあらはれが多い。

內大臣伊周は叔父粟田關白道兼と權を爭ふに方り、法の力を借らうとして高階成忠に囑して特別な修法を行はしめたことが見はてぬ夢に見え、安產を祈る爲には御修法がおきまりのやうに行はれた。關白道長は上東門院の御懷姙に方りては三段の修法を常のことにさせられ、不斷の御讀經を行はせられたことが初花の卷に見え、臨月になつては五大尊の修法を行はせられた。同時の記錄類例へば左經記を繙いて見ると、後一條天皇の中宮威子の御產に當りて

は、山門寺門以外に、長谷寺、山階寺、東大寺大佛殿、南圓堂に祈り、孔雀經、藥師經、大般若經等の讀經を行ひ、五壇修法、不動調伏法、北斗法、尊星王法等を修したことが見えてゐる。これらは現世利益の爲に行つたのである。

因に修法の沿革を考へて見るに、如意輪法や吉祥天法は夙く奈良朝に行はれたが、當時はまだ壇を設けて行ふに至らなかつた。

最澄は宮中に於て始て毘盧遮法を修め、空海は仁王經法、請雨經法を修めてその信仰を高め眞言院の設立を見た。圓仁は大熾盛法、七佛藥師法、大安鎭法、佛頂法を傳來し、圓珍は尊星法を將來し、常曉は大元帥法を傳來し、相應、喜慶は不動法を修し、仁和寺は寛空寛朝以來孔雀法を以て聞え、醍醐寺は仁海僧正の請雨法を以て著れ、皇慶は普賢延命法を修めてその名高く、その他如法愛染法、法華法等の大法、準大法は山門寺門東寺その他にも行はれ、特に眞言宗は祈禱教のやうになつた。

關白道長は奈良に行つて受戒し、藤原氏累代の墓所である木幡に三昧堂を建てその供養を

行つたことは疑の巻に見えてゐる。阿彌陀堂を建立したことは本のしづくに御堂の供養は音樂の巻、藥師堂の建立のことは鳥の舞の巻に上東門院が無量壽院の旁に東北院を建てられたことは歌合の巻に、宇治關白が平等院を建てたことは煙の後の巻に、九日に夜を日につぎて百體の觀音を作つたこと、千部の法華經を思立たれたことは鶴の林の後の巻に、後一條天皇の中宮威子が多寶塔を供養せられ御懺法を行はれたことは駒くらべの巻に、皇太后宮妍子が故三條院の爲に御八講を行はれたことは衣の珠の巻に見えてゐる。此の如く、寺院の建立、造佛、寫經、八講、懺法等を行つて來世得脱の企をされたことが數かぎりない程行はれてゐる。さうしてその一つ一つが善盡し美盡したものであつた。爰にはその一例として皇太后宮の女房達で二三十人で一品經の供養した記事を少しく述べて見る。その經文は靑を地にして金の泥で書いたのもある。或は綾の紋に下繪をし、經の上下に繪を書き、涌出品の恒沙の菩薩が涌出し、壽量品の常在靈鷲山の有様、或は提婆品のかの龍王の家のかたを書きあらはし、白金黄金の札をつけ、玉の軸をし、七寶を以て飾り、紫檀の經筥にいろいろの玉の綾に入れ、

黄金の筋を置口にするといふ贅澤さである。特に御堂供養の卷には、四五人の尼がお參りをして見た御堂のさまを叙した玉の臺の卷の如きは小說物語かと思はしめる程で、佛會に臨んだものはこの世ながらの佛の御國に生れ逢ふ心地がしたのであつた。道長はもとは法華經の信者であつた。御堂關白日記によると覺運僧都から天台の四敎儀の講義を聽いたことが見えてゐる。後には彌陀信仰に安住した。鶴林の卷に

後生のことより外のことを思し召さず、御目には彌陀如來の相好を見奉らせ給ひ、耳には尊き念佛をきこしめし、御心には極樂を思し召しやりて、御手には彌陀如來の御手の絲をひかへさせ給まはんと北枕に西向にふさせ給へり

と見えてゐる。一條天皇は御修法を中止して念佛を聞かばやと仰せられた如く、當時の信仰の狀況が窺はれる。隨つて法華經をとつたところは少くないが、また往生要集の句を引いたところも多い。觀音經、藥師經、仁王經、大般若經、壽命經、涅槃經、華嚴經、倶舍唯識、增一阿含經、大佛頂陀羅尼經等の名は書中に見え、大集經、大智度論、摩訶止觀、賢愚因緣

經、佛本行集經、維摩經、大寶積經、太子瑞應本起經、觀普賢菩薩行法經、過去現在因果經等の要文等を取つたと思はれるところがある。書中佛語を含んでゐることは前にも記したやうに九百二十四語に上つてゐる。

## 第十一節　今昔物語と佛教

佛教說話集として靈異記や三寶繪詞に就きては既に述べた。その後もこの類の文學の興味は相當に湧いたらしく、長承三年桑門榮源の署名ある打聞集も近年發見された。この打聞は一集二十七條の說話を錄するに過ぎないが、後の今昔物語に影響を與へてゐる。

抑も平安朝中期に勃興した物語はその末期に至りては優れたものが出でなくなつて、歷史物語にその地位を讓つた觀があり、歷史物語はまた說話物語にその地位をうつした趣がある。その偉大なものは今昔物語である。この書はまた宇治大納言物語と呼ばれた。その作者は宇治大納言源隆國と云はれてゐる。坂井衡平氏の否定說もあるが、隆國は佛敎に關しては安養

集の著もあつたし、今はまづ舊說によつて置く。一集三十一卷の中、卷八、十八、二十一の三卷が缺けてゐる。本朝震旦天竺の說話は合して一千五十一に上つてゐて、印度の「ジヤターカ」や「アラビヤンナイト」やグリムの「メルヘン」よりも更に大きい說話集である。最初の五卷は印度傳說で釋尊の傳記誕生より入滅に至るまでとそれに續いて御弟子の傳記並に印度佛敎の起原及發達を說いてあり、次の五卷は震旦の部で、その始の三卷は印度から支那に佛敎の渡來したことを詳記し、後の二卷は宿報、因果、應報等の物語を列ね、以下は我が國の部とし、始めの十卷には奈良時代に行はれた六宗の傳來より平安朝時代に至り天台眞言二宗の弘まつたこと、尋いで新に起りたる淨土敎のこと、奈良の大寺を始めとして各國の寺院堂塔のこと、及一派の敎祖及高僧の傳記を述べ、佛會を說き、苦行談、功德談、往生談を擧げ、靈驗談、發心談を載せ、後の十卷には人物傳(藤原氏)能藝傳說、武勇傳說(主として源氏)變化の物語、世俗の滑稽、惡行、雜事に關する說話を收めてある。一名を宇治大納言物語とも云つたやうであるが、宇治拾遺物語の序に云つてある如く宇治の別莊に暑さを避ける習であ

つた隆國が旅人に聞いた譚を册子に書きとめたといふが如き漫錄ではなく、和漢の學に博き著者が數多の典籍より資料を摘出し自分の立てた系統に連ねた頗る大きな業績である。

その出典は狩谷棭齋や岡本保孝の如き人々の考究から進んで芳賀矢一博士の攷證今昔物語集によりて殆ど餘すところがないくらゐ原據が明かとなつた。天竺の部は梁の經律異相や、唐の道世の諸經要集や、法苑珠林から採つたものが多く、法苑珠林は賢愚經から採つたのが最も多く、その他引據の佛典は八十餘經に上つてゐる。震旦の部は三寶感應錄や冥報記や神僧傳などから資つたものが多く、その他七十餘典に亙つてゐるといふ。我が國のものは靈異記、續紀、三寶繪詞、往生極樂記、本朝往生傳から採つたものが少くない。外國の資料でも單なる翻譯ではない。それをうち碎いて當代の言語に分り易く通俗的に書かれ、或は日本趣味に多少改めたものもある。この多種多樣にして汲めども汲めども盡きない說話のうち、天竺の部では釋迦八相成道譚や本生譚が佛の敎のありがたさや因果律の恐ろしさを敎へたことが少くない。震旦の部では地獄冥界譚が人の心をさま〴〵の恐しい世界に導いたことが多か

つたであらう。鎌倉期に於ける宇治拾遺物語や古今著聞集や、十訓抄や、雜談抄、地藏靈驗記、私聚百因緣集の如き說話集にとられたものは多く、特に宇治拾遺の如きは百九十六話中、八十五はこの物語に據つてゐる。この書中にある靈驗譚は室町時代に於ける本地物の源泉となつてゐる。また淨瑠璃などに採られたものも少くない。その靈驗譚の中には法華經に關するものが多いのは云ふまでもなく、その外にも毘沙門天、吉祥天及妙見大士の利益譚なども その發生を示してあるのは注目に値する。

附記。現代にては平安朝文學と鎌倉以下の文學をつなぐものとして語學上から見るものも生じて來た。
聖德太子黑駒の話は宴曲の馬の德にあらはれ、橋柱說話の老人に扮した觀音の說話は舞の本の築島に流れて本地物の完成となつた。斯樣の例を拾つて展開の跡を見るのも興味の津々たるものがあるが、今此の小册子にはこれを省略する。

## 第十二節　寶物集と佛敎

この時代の末期にあたり出來た佛敎文學に就きて述べなくてはならぬものに寶物集があ

る。これは佛教說話文學とも見られるが、適當にいへば佛教宣傳文學とすべきかも知れぬ。鹿ケ谷に於ける平家滅亡運動に加つて鬼界島に流された平判官康頼が大赦に遇ひて治承の始め歸洛し、東山双林寺で執筆したといはれてゐる。一卷本三卷本七卷本があるが、一卷本が原形で、他は次第に後人によりて增益せられたものといふ。嵯峨の釋迦堂に通夜した時、或人の問に人間には何が第一の寶であるかと言ひ出したのを切つ掛に、或者は隱蓑といひ、或者は打出の小槌といひ、或は黃金、或は如意寶珠といひ、或者は子といひ、或者は壽命といひ、結局佛法が最も第一の寶と決し、その理由を女人の尋ねるに對し、或沙門が三寶・六道、十二門を說き示すと夜も明けはなれ、人々も散じたといふ趣向に書いてある。蓋し問答體に仕組んだのは大鏡の序に倣つたもの、十二門は往生要集に基いたものであつて、覺堅上人の孝養集に則つたといふ說はいかゞであらう。幾多の挿話があるが淨土教の宣傳文學と見るべきであらう。般若經、金剛經、涅槃經、普曜經、摩耶經、法華經、維摩經、華嚴經、心經、寶積經・稻稈經、盂蘭盆經等の名も見え、七卷本には引用の經文は七十五種に上り、中に法

華經を引用するものは六十七回の多きに達してゐるのを見ても、法華經を通じての淨土門のものであることが知られる。

# 第四章　鎌倉時代

## 第一節　法然上人の元久法語

平安朝末期に及んで武家が漸く頭をもたげ、公卿は次第にその權力を失つて來た。これと同時に上流の奉じてゐた天台や眞言の教は下火になつて念佛淨土の教が盛んになつた。これに點火したのは法然上人である。法然に先ちて良忍は融通念佛宗を弘め、永久五年五月

一人一切人、一切人一人、一行一切行

一切行一行、是名他人往生

の偈を示し、後勸進帳を作つて日課念佛百遍を唱へしめ、その名を記帳してまはつたもので畏くも時のみかども皇后宮も皆その教を奉じて記帳せられた程で、この他力往生の思潮は汎く廣がつていつた。頓て法然上人は起つて淨土宗の一門を開いたところが上下歸依するもの

が雲集する有様であつたので却つて反感を買ひ、文治二年叡山の顯眞、高野の明遍、笠置の貞慶等の碩學三百餘人と大原に於て大に宗論を闘はした。これが有名な大原問答である。斯くて後白河法皇の御信仰を受け、建久九年には月輪關白兼實の爲に撰擇集を著した。(これはもとは漢文で書かれてあるが、後人の手によりかなに寫された。)一たび土佐に配流されたが、歸洛の後尊信するものが彌々殖えた。勝尾寺にゐた時の詠に

柴の戸にあけくれかゝる白雲を
　いつ紫の色に見なさむ

の如きがあり、また

あみだ佛といふより外はつのくにの
　なにはのこともあしかりぬべし

と本願の念佛を勸めてゐる。淨土に聖道淨土の二門を立て、人々の機根によつて他力易行道と自力難行道を修めさせた。玆に於てその教に趁るものが計量の出來ない程であつた。その

遺文は門人の手によりて結集されたものが多いが、宗教文學として燦々たる光を放つものがある。安居院聖覺法印が上人の口授によつて筆記した元久法話一名登山狀の如きは當時佛教文學中の傑作の一つである。

我らいかなる宿緣にこたへ、いかなる善業によりてか佛法流布の時に生れて生死解脫の道を聞くことを得たる。然るを今あひがたくして逢ふことを得たり。いたづらに明し暮して止みなんこそ悲しけれ。あるは金谷の花をもてあそびて遲々たる春の日を空しく暮し、あるは南樓に月を嘲りて漫々たる秋の夜を徒にあかす。あるは千里の雲にはせて山のかせぎをとりて年を送り、あるは萬里の波に浮びて海のいろくづをとりて日を重ね（中略）斯くの如くして昨日も徒に暮れぬ、今日も亦空しく明けぬ。今いくたびか暮しいくたび明さんとする。それ朝に開くる榮花は夕の風に散り易く夕に結ぶ命露は朝の日に消え易し。是を知らずして榮えんことを思ひ、是を悟らずして常にあらんことを思ふ。然る間無常の風一たび吹きて有爲の露ながく消えぬれば云々

に於けるが如く、當時行はれた駢儷體ではあるが實に莊重なものである。從來文學史家は各宗祖師の法語の類を顧みなかつた傾向は適正と云へない。信仰ある多衆に誦讀され、而も文學としての諸要素を具する以上は決して逸脫すべきではない。その消息類にも味讀玩賞すべきものがある。月輪關白の北方に遣されたものかといふ一帖の如きは委曲を盡した名文である。

## 第二節　西行と長明

この期に至りて世の隱遁者の數は頗る增して來た。病により罪により入道した類は除き、道敎並に佛敎思想の影響を受け、繁瑣な社交を厭ひ、或は靑雲の志の遂げられないのを悲觀して山林に遁る類が多くなつた。或は草庵生活は經濟上の逼迫を感ずることも多くなかつたので、社會の爲國家の爲といふが如き犧牲的な兼濟の志をすてゝ個性的獨善的な生活を喜んだものが殖えて來たのである。こゝに於て隱遁文學が盛んになつて來たのである。その秀で

たものは寂然であり、西行であり、長明である。寂然には法門百首があり、唯心房集があり、西行には山家集があり、長明に方丈記があり、發心集がある。前二者は不朽の和歌を遺し、後の一人は散文家として知られてゐる。西行が今に讀まれるのは自然への愛着と宗教の憧憬とが繕はず飾らずにその心胸から流れ出てゐるからである。

よしの山こずゑの花を見し日より
　心は身にもそはずなりにき

花にそむ心はいかで殘りけむ
　すて果てゝきと思ふ我身に

うちつけにまた來む秋のこよひまで
　月ゆゑをしくなる命かな

の如き捨身の後自然の尤物である月花にいかに執着したかゞ分る。辭世の

願はくは花の下にて春死なむ

そのきさらぎの望月の頃

の吟にも自然の愛着と宗教への憧憬が交響樂を奏でゝゐることが何人にも領かれる。さうしてその宗教は

入日さす山の彼方は知らねども
心をかねて送りおきつる

山の端にかくるゝ月を眺むれば
我も心の西に入るかな

に於けるが如く、彌陀の淨土が中心であつた。

同じ隱者でも鴨長明は西行が天下を遍歷したとは異つて、閑雅な境地に安住しようとしてゐた。日野山に占めた方丈の庵は

南に假の日かくしをさし出して竹の簀子を敷きその西に閼伽棚を作り、中には西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置しまつりて落日をうけて眉間の光とす

とある如く簡素であつてその信仰の對象は矢張阿彌陀崇拜であつた。西行は熱中する人、長明は冷清な人、念佛がものうい時は休んだもので、西行は一笠一簑杖と筆とで行脚したとはちがひ、よし貯へるものは少くとも折琴や經琵琶をする置きてみづから搔き鳴して樂しむ風流は西行以上であつた。この記が慶滋保胤の池亭記に倣つた作にしてもその趣味や信仰等の個性はあらはれてゐる。西行は賴朝の銀猫を貰つても路傍の子供にやつてしまふ程の潔癖家である。長明は鎌倉の法華堂の右大將の影前にぬかづいたゞけの相違はもつてゐた。維摩のやうな明哲は缺けてゐても、日野山の居士ですましてゐたかと思はれる。

發心集は見聞くがまゝに本朝人の發心譚を集めたもので、各種の往生傳の影響を受けたものので、その文章は方丈記の如き雄健はないが、後の閑居の友や撰集抄と交涉がある。これは長明の作と云はれてゐる。

撰集抄は西行の作と云はれ、壽永二年に書き了へたと流布本にはあるが、史實に合しないところがあり、後人の假託と見るべく、閑居の友に比しそれより後のものと見るか、或はそ

の前後に成つたものとすべきで、百餘の說話を含んでゐる。その序文は

生死の長き眠いまだ醒やらで、夢にのみほだされつゝ、水の面の月をまことゝ思ひ鏡の內のかげをげにとふかく思入て、あけくれは只妄念の心のみうち續きて、生死の船をよそへずして居所の羊の步みは我が身の外にもてはなれ鳥部舟岡のけぶりをよそにみて、過ぎにし方四十餘年の霜をいたゞき、行末しらずけふしもあるらむ。しかれば同じ夢のうちの遊にも新舊の賢跡をえらび求めけることの言の葉を書集め撰集抄と名づけて座の右に置きて、一筋に智識に賴まんとなり。卷は九品の淨土に思ひつゝ十に一をもらし、事は八十隨好に思ひよそへて百に二十を殘せり。抑凡夫の習明眼しゐて眞月を見ず心老て斷妄の利劍おこらざるものなり。されば偏に冥如を仰ぎ奉らんが爲に卷每に神明の御事をしるし載せ奉り侍り。

とあるが如く著作の目的が明に示され、佛神の加護を仰がんと靈驗譚や發心譚や遁世譚等を錄してある。もとは九卷八十項から成つてゐたものに後人が二十餘項を追補したのであら

う。文を粉飾し或は旅路に於てみづから見聞遭遇したやうに書いてあつたりするので、他の佛教說話集と違ひて多く讀まれた一書であつて、今昔物語にある硯破の說話はこの書は性空上人のことになつてゐて、御伽草子の硯破の粉本となつてゐる。謠曲の隱岐院や雨月物語の白峯もこの書に根ざし、謠曲の雨月はこの書の江口の遊女說話から出てゐる如く、後の文學に影響するところが少くない。

## 第三節　鎌倉初期の和歌

鎌倉時代の初頭を飾るは新古今和歌集である。その絢爛にして技巧に富んだ佳什に充されてゐて、我が和歌史上萬葉集に對して一大偉觀であることは世の遍く知るところである。上には後鳥羽院がおはしましてこの道を奬勵遊ばされ、攝家には後京極良經があり、廷臣には藤原定家壬生家隆及藤原秀能等があり、女流には齋院式子內親王、俊成卿女、宮內卿、二條院讃岐殷富門院太夫等男も女も歌の天才が輩出した時代である。遍歷歌人西行法師のこ

とは既に述べたが、尙茲に、一二の僧侶歌人を述べなくてはならぬ。新古今集中最も多く歌を採られたのは西行法師で、その數は九十三首に上り、これに亞いで最も多いのは前大僧正慈圓で、これは九十一首をぬかれてある。世に中古六家集と呼ばれたものは攝政良經の月淸集、京極定家の拾遺愚草、壬生家隆の壬二集、藤原俊成の長秋詠藻、西行の山家集、慈圓の拾玉集である。中に俊成は古來風躰抄に「歌のよきあしき深き心を知らんことも詞に述べがたき」ことを天台止觀の首に章安大師が「止觀の明靜なること前代もいまだ聞かず」といつてあるのに擬へて思へといひ、「法華經には若說、俗間經書云々資生業等皆須正法といひ、普賢觀には何物かこれ罪、何物かこれ福、罪福無主、我心自空也」と說いてある。「和歌の深き道も空假中の三諦に似たり」と述べ、和歌が佛道を修める爲の所緣と觀じてゐた。康治の頃待賢門院の中納言の勸により結緣の爲に序品の要文を詠んだ

渡すべき數もかぎらぬ橋柱

いかに立てける誓なるらむ

以下二十八品の翻歌を試み、また美福門院よりの仰を奉じて極樂の六時讃の歌を獻詠してゐる。勅を奉じて撰んだ千載集に幽玄調の多いのも佛教にちなみが無いと云はれぬ。

大僧正慈圓は月輪關白兼實の弟で、四たび叡山の座首に補せられ、鎌倉の右大將とも親しかつた人、歌は西行の教を受けた。一生中に詠出するところ頗る多く、拾玉集に收めてあるものでも他に比類がないくらゐである。屢々速吟を試み、百首を二時とか一時半に詠むといふ風で、中に述懷百首、厭離百首、日吉法樂百首、法華二十八品百首等は百首悉く皆佛教に關した所詠であつて、最も夙い時代に山に千日籠つてゐた時の詠には內陣行法供奉八千枚の修業に關し

三とせまで御法の花を捧げつゝ
　九の品をも願ひつるかな

と詠じ、また

垂乳根もまたたらちめも失せはてゝ

たのむかげなき歎きをぞする

と卽ち、また

明け暮は西に心をかくるかな

月日の入るをうちながめつゝ

の如き淨土の旨を謠つた作も少くない。

あはれなり門もなき庵のませの内に

こぬ人まねく薄一本

の如き寂しき境地から

時わかぬ心の空のさみだれも

草の庵にははれざらめやは

の安心に進み、終には

いつか我苦しき海に沈みゆく

人みなをすくふ網をおろさむ

の境地に至つていつた。

京極中納言定家は歌道の權威で、徹書記物語に「凡そ歌道に於て定家を難ぜんものは冥加あるべからず、必ず神罰を蒙るべきものなり」とまで崇拜された人、併し今日より云へば歌學者であつて歌は必ずしも秀でゝゐるとも云はれぬと評すべきであらう。その集を見ると、人の勸によりて亡き人の名をとりて卒都婆供養をした十首詠がある。

黑き髮の長きやみぢもあけぬらむ
置きまよふ霜の消ゆる朝日に　　(磐之姫)

紫の雲間に今日やむかふらむ
待ちにはまたぬ心かよはゞ　　(衣通王)

の如きその逸事などに基づきて作したもので追慕的の詠史といふべきものか。

次にこの集には入つてないが、明惠上人の作にも味ふべきものがある。上人は摧邪論を著

して法然上人の撰擇集に痛撃を加へた人、華嚴宗を再興した人。その歌は技巧を事とせず、無造作に思ひのまゝをのべる風がある。

夢の世のうつゝなりせばいかゞせむ
　さめゆく程をまてばこそあれ

常ならぬ世のためしだになかりせば
　何によそへてあはれ知らまし

契あらば生々世々にも生れあはむ
　かみつぐやうにそくひにはよらじ

始めの二首はその遺心和歌集にありて後の勅撰集にもぬかれたもの、後の一首は栂伽山傳に見え、北條泰時が時料を奉らうとしたのを辭した作である。京極爲兼は遺心和歌集の序の文を引いて共鳴の情を述べてゐる。「あかくやあかくあかやあかくやあかくくやあかくや月」の如き嬰兒のいふやうな歌も詠んでゐる。酒脫の襟胸が想ひやられる。時代は

やゝ下るが、序に曹洞禪を開いた永平寺の開山道元禪師の傘松道詠を一瞥して見やう。禪師は北條時賴から越前六條の地三千貫を寄進したのを受けず、後嵯峨天皇より紫衣と佛法禪師の徽號を賜つたのを二たびまで拜辭し奉つた程の高德で、その著正法眼藏九十五卷の法語は貴く深義を含むものであることは今喋々を要しない。その直指人心、見性成佛の直截簡明にして、然も抽象論理を去つた實行的宗敎たる禪宗が室町時代の武士の精神に多大の影響を與へたことは茲には縷述しない。その傘松道詠の中には達磨大師の悟性論の敎化別傳不立文字を詠じた。

いひすてしその言の葉の外なれば
　　筆にも跡をとゞめざりけり
あら磯の浪もえよせぬ高岩に
　　かきもつくべきのりならばこそ

の如きより正法眼藏を詠んだ

波もひき風もつながぬ捨小舟
　月こそ夜半のさかりなりけれ

即心即佛をうたつた

　鷗とも鴛ともいまだ見えわかで
　　立るなみまに浮き沈むかな

また草案雜詠中の

　山ふかみ岑にも尾にも聲たてゝ
　　けふも暮れぬと日くらしの啼く

の如き佳詠があり、禪の敎義を三十一文字に淀みもなく詠し出してさすがに人格を忍ばしめるものがある。

## 第四節　親鸞と日蓮の遺文

保元平治以來佛徒の所謂末法思想は上下一般を風靡し男も女も皆現世の希望を失ひ、ひたすら彌陀の引攝を庶幾してゐたことは前に屢〻縷述した如くである。傳統的形式主義に墮した舊佛教に慊らないで、眞實の信仰を喚起し、煩瑣な形式をかなぐり捨て、專ら稱名念佛の一行にたよることを勸めた法然上人の提唱は時代的要求にかなつたもので、その法力は偉大であつた。併し時代は尙曉闇で世相とあまりに隔絕することは徒に摩擦を生ずる處がある。從つて上人は諸宗に於ける戒を雜修としながら、みづからは嚴重な持戒者であり、且信仰には貴賤を超越せねばならぬが、尙貴族や智識階級を導くに專らにして、洽く大衆を化導するに至らなかつた。かくて他よりの排斥妨害を蒙つた。その門下の人々は師の全貌をつかまないで各一面をとつて誘導しやうとし、師の寂後幾何も經ないで、宗はいくつもに分れた。中に親鸞は法然の罰せられた所謂承元の法難によつてその身も北國に配された。大赦に遭つても歸洛しないで、非僧非俗愚禿と稱し、妻孥を携へ、賤民に伍して民衆の化導に努めた。その生活信條は師より一層徹底したもので、その敎義は敎行信證や三帖和讃に明かである。謂

はゆる三帖和讃とは淨土和讃、高僧和讃、正像末和讃を指し、中に淨土和讃は大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經及曇鸞の讃阿彌陀佛偈和讃等によりて彌陀の悲願を詠じ、現世利益等を說き、高僧和讃は龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空七人の教說信仰を讃し、正像末和讃には疑惑和讃や述懷和讃が添へてある、三者共に詞藻の美は少いがこの宗の精神を端的に力强く示してある。

無明の大夜をあはれみて
法身の光輪きはもなく
無碍光佛と示してぞ
安養界に影現する

に於ける如し。親鸞は行よりも信を尊重し、信の一念は彌陀の力によりて、來世を待たず、それと同時に人間を正定聚の位に上らしめる。日々修する念佛は往生の爲といふよりも彌陀の攝護に對する報謝行と說いてゐる。そこに淨土宗よりも一步を進めたものがある。併し文

學としては法然上人に比すべくもない。これに亞いた宗教改革者は日蓮上人である。

日蓮上人は淨土宗の開宗の後八十年にして法華宗を刱めた。旣成宗教に慊らない點は同一であるが、熱烈にして自ら矜持することが極めて高い日蓮はまづ折伏の弘通をなさうと、

念佛無間　禪天魔　眞言亡國　律國賊

の四個の格言を絕叫し、爲に法難をかうむること屢次で、最初は師僧から淸澄山を逐はれ、ついで伊東に流され、それより小松原に襲はれ、やがて龍ノ口では死罪に處せられようとして終に赦されて、佐渡に流されるといふ有樣であつたが、いかに諫曉しても爲政者は顧みないのを知り、世を遠ざかつて身延山に入り、久遠寺を刱し、純信な生活を營み、敎を後世に垂れようと志し、弘安五年十月池上本門寺にて示寂された。鎌倉の松葉谷で書いて幕府に呈した立正安國論でも、佐渡流謫中に撰した開目抄でも實に堂々たる大文字であるが、國文學としては身延の御文や信仰者に對する消息の如きは誰にもなつかしみを以て讀まるゝ不朽の好文字である。入山の翌年二月十六日房州の故舊新尼御前に送られた御返事にはまづ身延

第一印象を叙して、

富士川と申す日本第一のはやき河北より南へ流れたり。此河は東西は高山なり。谷深く左右は大石にして高き屛風を立て並べたるが如くなり。河の水は筒の中に强兵が矢を射出したるごとし。此の河の左右の岸をつたい或は河を渡り、或る時は河はやく石多ければ舟破れて微塵となる。

と富士河の急流を有りのまゝに叙し、次に

かゝる所をすぎゆきて身延の嶺と申す大山あり。東は天子の嶺、南は鷹取の嶺。西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屛風を四ついたてたるがごとし。峯に上つてみれば草木森々たり。谷に下つてたづぬれば大石連々たり。大狼の音山に充滿し猨猴のなき谷にひゞき鹿のつまをこうる音あはれにて、蟬のひゞきかまびすし。春の花は夏に咲き秋の菓は冬になる。たま〳〵見るものはやまがつがたき木をひろふすがた、時々とぶらう人は昔しなれし同法也。彼の商山の四皓が世を脫し心ち、竹林の七賢が跡を隱せし山もか

くやありけむ

と叙し、身延山御書には

後ろには峨々たる深山そびへて梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には蕩々たる流水を湛て實相眞如の月浮び、然明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし。

と云つてあるなど文章を以て立つ人の筆と劣るところはない。況んやその堂々たる主張を述べる文字は頗る迫力に富んだものである。唯自尊心が極めて強く、自ら不輕菩薩を以て任じ、「現身大師號もあるべし」と傲語し、他をこきおろしてゐるのは鼻につくが、その人物としての異常性がそのまゝ文章にあらはれたもので、等しく法華經を正依としてゐても、天台宗とは大に面目を異にし、一方では迹門に重きを置くに反し、日蓮は本門を重しとし、理論よりも實行を旨とし、簡單な唱道題目によつてこの身卽證大覺位を成ずるとした。直截簡單な行き方が國民性にぴつたりと來る點は淨土眞宗に相似てゐるが、これは烈火の物を燒く趣がある。方丈記を愛するものは身延御文を始め日蓮の遺文を味讀せずに止むべきではない。上

人を文章家と見るのは上人の大に欲しないところであらう。けれども彼の力強い文章は國文學上より決して見のがしてはならない。

## 第五節　軍記物と佛教

平安朝の中頃より承平天慶の亂や前九後三の役もあつたが、いづれも近畿を遠く離れた、云はゞ邊陬の地に起つたことゝて、都の縉紳貴女乃至は文筆を弄する人々の文學に主題として戰爭を取扱はれるには至らなかつた。然るに保元平治の亂は都も都、畏くも九重の中にて矢叫の聲ものすごく、紫の御庭にも腥き血を濺ぎ、仙院も遠きあたりへ播遷のうき目を免れさせ給はず、一の上の大臣、氏の長者も流矢に仆れ、月卿雲客もはかなき最後を遂げ、また遠流に處せられるなど、開闢以來ためしなき慘劇を眼前にまざ〳〵と眺めては、操觚者流がこれを看過し了るべき筈がない。爰に鎌倉期に至り軍記物語といふ一類の文學を生むに至つたのである。その主なるものは保元物語、平治物語、平家物語等である。

これらの軍記物語は勇將猛卒のたけき武者振を中樞として、はかなき運命の俘となつた人々の上をも叙するのが常であつて、その底に流れるものは無常思想である。佛教思想である。今まづ時代の夙い保元物語を繙いて見るに、その首章に鳥羽上皇の御落飾に關し、著者は

御年三十九、御齡も未だ盛んなるに、玉體も恙なくおはしませども、宿善內に催し善緣外に顯れて眞實報恩の道に入らせ給ふぞめでたき

と贊し奉つてゐる。次の熊野參詣の章には「眞言妙典の御法樂に臨終正念往生極樂とのみぞ御祈念ありける」といひ、次の法皇崩御の章には

有待の御身は貴きも賤しきも高きも卑きも異なることなく、無常の境界は刹利も首陀も替らねば、妙覺の如來、猶因果の理を示し、大智舍利弗又先業を顯すことなれば、凡下の驚くべきにあらねども云々

といひ、左大臣賴長は烏芻沙摩、金剛童子、聖天供の法を修せさせた事が見え、當時佛法が

盛に行はれ、剃髪染衣が貴ばれ、人皆無常を觀じてゐたことが以上二三の引例で察知される。内記平太等がその仕へてゐた若君に介錯する條は涙を絞らしめるものがある。

次に成つた平治物語は保元物語が鎭西八郎爲朝を大立物として描いてあるに對し、惡源太義平をそれに擬へた趣があるが、前者に比べて遜色がある。公卿の方では前書が宇治左大臣を主役としたるに、これには少納言入道信西を配したと見られる。劍戟相磨し武きものも忽ち息根を絕つ修羅の裏には無常思想が漲溢すべきであるが佛敎思想は比較的濃厚でない。むしろ儒敎思想が多く盛られてある感じがする。併しそれでも叡山物語の章には摩訶止觀に見える禪鞠、梵網經に見える頭子だのその他禪杖や助老など所謂山門大師の修禪定の四具足、不空羂索人骨の念珠等の入つてゐて、宇賀神や陀天の法をこめ、大師の手印を以て封ぜられた第十九の箱の由來等に就きて縷々と述べてあるが、これも生身の觀音といはれた信西の宏才を示す爲で、信仰の方は常盤御前が觀音信仰により平氏に囚へられながら、母子共に命を助かつたとし、いよ〳〵信を起し普門品を讀み、幼い子にも名號を唱へさせた外には多くは

見えない。これに反し、光賴參內の條は尊王的精神の烈々たるものがあつて逆臣の膽を寒からしめる。蓋し大義名分を說くところが著者の本旨の存するところであらう。

軍記物語の王ともいふべきは平家物語である。平清盛が武門から起つて藤氏三百餘年の公卿政治を覆してこれに代り、一時平族にあらざれば人に非ずと謠はせ、大政をおのが心のまゝにあつかふこと二十年、源氏の餘蘖忽ち蛭ケ小島から起り關東を風靡し、これを討滅するに至らないで他界し、やがてその遺族は都を落ちて西南にさすらひ、終に壽永の末、一族壇浦の藻屑と消えた盛衰の跡を謠つた一部十二卷から成る悲劇的一大叙事詩であつて、鎌倉文學を代表するばかりでなく、後の太平記などもこれに比べて遙に遜色をみるばかり傑出してゐる。その前半は平家の榮華を叙し後半は九郎判官義經の活躍と平家の衰滅を叙してあるが、當時一般に弘通した法然の淨土佛教の精神が横溢してゐる。その卷頭の

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者、必衰の理を顯はす。驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し云々

の提言は一篇を貫き、最後の六道の沙汰、女院の御往生で終つてゐて、縱に雄大悲壯の戰記を列ね、横に優雅哀憐の情話を交へ、剛柔兼ね備り讀むものをして飽くことを知らざらしめ、盲法師が四筋の琵琶に合せて語るを聞きては心剛の武將も涙を絞らせ來つたもので、後の文學に影響を及ぼしてゐることが甚大である。

著者は勤行を旨とする僧侶ではないが、叡山にゆかりのあつた人、社會の種々相に通じてゐて、當時新舊思想を代表してゐた文武の對照を始めとし、幾多の對照となるべきものを巧に按排することを忘れなかつた。横紙破りの入道相國に對しては忠孝兩全を期してゐる小松内大臣を配し、雅びな平家の公達に對して唯武强ばかりで風雅を解しない東國武士を以てし、運命に從順な婦人に對しては新しい宗教意志に燃える女性を以てし、皇朝の事實には唐土の類似の事相を配することを怠らなかつた。

建禮門院の雜司横笛は相契つてゐた齋藤瀧口時頼が急に髻を切つて嵯峨の往生院に入つたのを歎き、訪ねていつたが同棲が叶はぬので姿を換へた。本三位中將重衡が釜中の魚の如き

囚はれの身となつてゐるのを慰める爲に、頼朝の命を奉じてその側に侍した千手の前は「十惡といへども尙引攝す」とか、「極樂願はん人は皆彌陀の名號を唱ふべし」といふ朗詠や今樣を謠つたりしたが、中將の奈良阪で斬られたのを聞きて、墨染の衣にやつれ善光寺に入つてその菩提を弔つた。上西門院の女房小宰相は夫三位通盛卿の湊河で戰死したことを聞き乳母の諫も聞かず、和田つ海の底の藻屑となつた。これらいづれも入涅槃の志が深かつたのであるが、白拍子では妓王と佛御前が尼となつて嵯峨の山奥に籠つたのは宗教的反省が一層强烈であつたと見るべきである。同じ道のよしみを以て佛の御前を太政入道に紹介した祇王は却つてその人に愛を奪はれ、西八條邸を去ることゝなつたが、それのみでなく、その佛の御前にお伽するやうに命じられて悔しさの念に堪へず、

佛も昔は凡夫なり　我等も遂には佛なり
いづれも佛性具せる身を　隔つるのみこそ悲しけれ

の今樣を謠ひ、西八條邸を下つて自殺を企てた。妹の祇女は自ら死を急ぐのは老母の悲を增

しその胸に刄を加へるのと同じ、かくては五逆罪の一つだと諫めた。卽ち

まだ死期も來らぬ母に身を投げさせんずることは五逆罪にてはあらんずらん。この世は假りの宿りなれば、恥ぢても恥ぢても何ならず、只永き世の闇こそ心憂けれ、今生に物を思はするだにあるに、後世にさへ惡道へ赴かんずることの悲しさよ

と說いた。祇王は思ひ止まつて、終に親子三人が二尊院の奧に法躰となつて世を遁れた。二十一歲と十九歲の姉妹は四十五の母刀自と春また秋を送つて西方淨土を欣求してゐる。爰に一夜竹の編戶を排いて姿をかへた佛の御前が訪れて來て懺悔する。

熟々物を案ずるに、娑婆の榮華は夢の夢、樂み榮えて何かせん。人身受け難く佛敎には合ひ難し。この度泥犂に沈みなば他生曠劫を隔つとも浮び上らんこと難かるべし。老少不定の境なれば、年の若さを賴むべきにあらず、出づる息入る息をまつべからず。蜻蛉稻妻よりも猶はかなし。一旦の榮華に誇つて後世を知らざらんことの悲しさに、今朝まぎれ出で、かくなりてこそ參りたれ。

と告白してゐる。佛の御前はこの時十七歳であつた。先の怨敵は今一蓮托生の友となつて四人がそこに厭欣の生を送つた。これは一部を貫く思想である。本三位中將重衡は囚への身となり鎌倉に送られるに先ち、法然上人に後生の教を受け戒文を授かつた。熊谷直實は大夫敦盛の首を掻いて菩提心を起し後蓮生房となつた。中宮建禮門院の御産に際しては大赦立願、誦經等とり〴〵に行はれ、仁和寺の守覺法親王は孔雀經の法、天台座主覺快法親王は七佛藥師の法、寺の長吏圓慶親王は金剛童子の法、その他五大虚空藏、六觀音、一字金輪五壇の法、六字如輪、八字文珠、普賢延命に至るまで殘る所なく修せられたと見え、呪詛の爲に大納言成親は眞讀大般若、また吒枳尼の法を、後二條關白の爲北政所は百座の仁王講、百座の藥師講以下……の供養等を行つた例も見えてゐるが、法然上人の行住坐臥時處諸緣を嫌はず三業四威儀に於て心念口稱を忘れなければ、この苦海を出でゝ極樂淨土の不退の土に往生するとの教が一般に擴つてゐた。

女院御出家、小原への入御、小原御幸、六道の沙汰、女院往生の五條を包容せる灌頂の卷は

成立に關しては諸家の議論があつて、流布本に於ける如く、六代御前斬られの條にて平氏の血統が絶えたといふので大尾であつたのを、琵琶に合せ語る上から、他に散在してゐたのを取纒めて灌頂の巻としたといふ説も相當有力であるが、祇園精舍の鐘の聲で始めた點から考へると、小原御幸や六道の物語で結めた一方系統本の方が作品として首尾完いものと考へられる。灌頂の巻といふ名稱は後より附したものであらうが、これがあつてこの物語は一層引き立つのである。小原御幸などの節は名文であるので別人の手に成ると疑ふのは無理である。源氏物語の宇治十帖が紫式部の手でなく別人の筆とするのと同一轍に歸することゝ考へらる。小原御幸は閑居の友を基とし、法然上人の淨土教の教により、首卷の諸行無常に照應させて不朽の名文を成したものである。從つて灌頂の意義も作の上よりいへば結緣灌頂と見做すべく、平曲傳授の上よりは傳法灌頂となる。この點から見ても名稱は後に附したものに相違あるまい。幾多の戰爭を詳記し、勇將猛卒の活躍をゑがきながら、和歌に音樂に雅びを捨てない平家の公達を配し、上は國母とましますう皇后宮から下は白拍子や賤の女の愛語を挾み、

榮枯盛衰の踵を回すが如く忽ち變りゆく跡をまざ〳〵と見せ、厭欣の志を專とすべきことを示した經典であり文學である。爾後に出た幾多の文學はこの物語の精神を基調としないものは殆んどないと云つても過言であるまい。特に舞の本には硫黃ガ島、木曾願書、敦盛、那須與市、文覺、景淸、築島は平家をそのまゝに取り、謠曲には佛原、敦盛、淸經、大原御幸はこれに據つてゐる。淨瑠璃にもこれに據つたものが少くない。

## 第六節　宴曲と佛教

歌謠文學としては、夙く今樣が行はれてゐた。これに代つたのは宴曲である。宴曲は一に水狼曲ともいふ。後鳥羽院の御時より建武中興の頃まで武家桑門の間に行はれたらしく、現存するものが百七十二篇、その大部分が釋明空によつて作られた。時相の然らしめるところ、佛教に關するものが多い。明空は天台宗の人らしく聲明にも通じてゐたので節もみづから附けた。その門人月江も師の衣鉢を受けてゐる。宴曲には四季戀等を題材としたものもあ

るが、神佛の靈驗を述べ、その靈地への參詣修行等の名目で道行のさまに叙したものが少くない。例へば南都靈地譽、摩尼勝地、補陀落多瑞、諏訪効驗、熊野參詣、善光寺修行などの題目を見ただけでもそれと首肯される。今それらから起首の二三行を引いてみる。

八相成道の無爲の城、眞如の臺は廣けれど、和光同塵の月の影はやどらぬ草葉やなかるらん

は熊野參詣の發端にして兩部習合のさまを叙し、當時の信仰界の狀を詠じてある。

西天月氏の古、信心の窓を照しては三尊光を並べつゝ紫磨金の尊容、東土日域の今まのあたり結緣絶えずして利益を普く施す。忝くも十萬億刹の堺を過ぎ、妙覺果滿のうてなを出で、粟散邊地を猶捨てず、濁世の塵に交る。故あるかなや本願のあの難化難度の誓ならず

は善光寺修行の次篇の結尾である。巨山景は建長寺を詠じ、得月寶池砌は圓覺寺を詠じたもの、石淸水靈驗には蒙古襲をよみ入れてあり、これらは時世を反映せるもので、また勝地に

關せず、釋教、新淨土、二禪提、善巧方便德などの敎義を題材とするものもある。新興佛敎の禪に關しては曹源宗、少林訣の如きがある。今前者の起首數行を引いて見る。

向上の一路千聖も傳へず、格外の宗は又遙に文字の外に出づ。あの威音那畔のいにしへ、機前に會得し去るも猶一重の關を隔つ。到る處聖凡の道にあらず、參是心意識を離る。釋迦文は多子塔の前に、始めて半座を分ち與へ、靈山會上の筵には拈華微笑の時到る云々

のやうに經典要文にすがつた文學を驅使してある。そも〳〵宴曲は經文や麗辭をはぎ合せたもので、獨創の見がないと貶るものも少くないが、當時の諷詠文學として盛に用ゐられてゐたもので、これがやがて室町期における謠曲に範を示し、その前行文學として捨てられないものである。

## 第七節　繪卷物

平安朝以來行はれてゐた繪卷物が鎌倉時代の初頃より非常に流行した。蓋しこの時代は佛敎の全盛時代であつて、各宗の祖師の傳記と諸寺の緣起とをあらはすにこれを用ゐたからである。その中緣起卷物として古いものは鎌倉光明寺藏の當麻曼陀緣起で、畫は住吉慶恩、詞書は後京極攝政良經の筆である。華嚴緣起一に華嚴祖師繪傳六卷（もと八卷あつたのが二卷紛失した）繪は信實、詞書は明慧上人、書は光明峰寺道家、岡屋關白兼經、御室法助の筆。高山寺の所藏である。志貴山緣起三卷、繪は鳥羽僧正、書は世尊寺家の人、或は定信か、或は寂蓮法師の筆蹟に似てゐると謂はれてある。僧正の繪が飛躍のものであることは今更云ふまでもない。次に粉川寺緣起二卷初卷は燒失、これも繪は鳥羽僧正、詞書は定家卿とも勘解由小路行俊卿とも云はれてゐる。水野家本は二卷ありて繪は土佐光長詞書は飛鳥井雅經といふ。次に鑑眞和尙東征繪緣起五卷繪は蓮行、詞書は極樂寺沙門忠性、一遍上人繪傳の中歡喜光寺の所藏にかゝるものは十二卷、四條金蓮寺の藏にかゝるものは二十卷、前者は六條緣起と稱し、繪は法眼圓伊の筆、詞は高弟聖戒の作。正安元年八月に成り、後者は四條緣起と稱し、繪は越前守土佐行

光の筆、詞は上人の高弟宗俊の作。時宗の開祖一遍上人智眞の行狀を記述したもので、第二世他阿上人の傳を併せ載せあげてある。彰考館本は內容によりこれを一遍上人緣起、他阿上人緣起の二部に分けてある。この繪傳は國文脉が優つてゐて、上人の和歌も多く挿入してある。他阿上人は冷泉爲相、京極爲兼に和歌の點を乞ひ、二祖御詠集を遺してゐる。

この聖は重瞳うかんで纖芥のへだてなく、面に柔和を具へて慈悲の色ふかし。應供の德至りて村里盛なる市をなし、利益おのづから用を施して國土遍く歸服するさまことに權化の人ならではかゝるふしぎはありがたかるべき事にやと

讃仰された程の人である。

法然上人繪卷はその種類が少くない。夙く鎌倉の中葉嘉禎三年に成つたものは傳法繪といひ、繪は觀空、詞書は耽空の轉寫本が筑後の善導寺に遺つてゐる。最も有名なのは勅修御傳四十八卷で、知恩院第九世舜昌法印が勅を奉じ從來世に行はれた法然傳を總括統一し詳細を極めたもので、詞書は伏見後伏見後二條の三帝を初め奉り尊圓法親王、三條實重、世尊寺行

尹、同定成、姉小路濟氏の八筆、繪は土佐吉光同邦隆、姉小路長隆、同長章、飛驒守惟久、土佐行光、同光顯、法性寺爲信の八家の合作で、精緻の描寫、典麗な土佐派の樣式を極めたもので、繪傳の中最も優なるものである。本願寺三世覺如上人が正安三年常陸の門徒の爲に書いた拾遺古德傳は九卷今は常陸の常福寺に藏してあり、繪は土佐法眼と云はれてゐる。この卷物には元亨三年の製作にかゝり、法然と親鸞との關係を說いてあることが委しい。

覺如はまた親鸞上人繪傳四卷を作る。繪は淨賀の筆「慕歸繪詞に永仁三歲の冬應鐘中旬の候にや、報恩謝德の爲にとて本願寺聖人の行狀を草案し二卷の緣起を圖卷せしめしより以來、門流の輩遠邦も近邦も崇て賞翫し若齡も老者も書せて安置す」とその子慈俊が云つてゐるとほりで、所々にその副本が出來た。本願寺高田專修寺所藏の卷子本もその眞筆を傳へ、後醍醐天皇の宸筆を染めさせられたものは今佛光寺に藏すといふ。その他にも上人の繪傳が存する。

鎌倉の光觸寺の藏にかゝる頰燒阿彌陀緣起、矢田地藏緣起、石山寺緣起、越後乙寺緣起等

もそれに前後して成つた。光觸寺のは冷泉爲相の筆、繪は土佐光興とも權大僧都諸嚴ともいふ。矢田地藏のは巨勢有家又有康の繪に世尊寺家の人の詞書、今も京都の壇王法林寺に存す。石山寺のは隆兼の筆といひ、乙寺のは加賀守惟久の繪と傳ふ。繪はすべて所傳のごとくであるが疑問のものも少くないであらう。

春日驗記は延慶二年左大臣西園寺公衡が春日寶前に上つたもの、今は帝室の御物となつてゐる。詞書は鷹司前關白基忠、その子攝政冬平、弟權大納言冬基、同一條院良信僧正四人、繪は右近將監隆兼が一線一劃もゆるかせにせず、細緻の筆丹靑の妙をつくし、土佐派の典型的なもの、鎌倉末期に於ける繪卷物の最高峯である。その內容は春日大明神の靈驗に關し承平託宣の事より嘉元神火の事に至る五十有餘の物語の數々を畫いたもので、中に影向や、加持祈禱や、維摩會や、說法聽聞や、炎魔の廳のことや、法華經の誦讀等佛教に關することが少くない。

北野天神緣起は數種あるが、鎌倉初期の巨匠、信實の筆と傳へる根本緣起八卷は最も名高

い。これも神社本位のものながら、終の二巻は地獄を始め六道の描寫を以て埋め、佛教的色彩の極めて濃厚なものがある。その他行光筆といふ弘安本や、光信光起等の緣起もある。尙他に存する天神緣起としては周防の松崎神社及鎌倉荏柄天神緣起等有名である。吉野朝時代のものには眞言宗の開祖弘法大師の行狀記十二卷があり今も東寺に藏せられてある。應安七年より康曆元年にかけて成ると云ふ。寺傳に繪は光信といふは誤にて、繪所預大藏大輔行忠以下十名、詞書は大覺寺無品深守親王以下十名。文中所々に歌を挾む。試にその一節を引く。

室戶の崎は南海前に見えわたりて高巖かたはらにそばたてり。遠くは補陀落をのぞみ、遙に鐵開山を限りとせり。松を拂ふ嶺の嵐は旅人の夢〻破り、苔をつたふ谷の水は隱士の耳を洗ふ。村煙渺々として水雲茫々たり。吳楚東南拆乾坤日夜浮などいふ句もかゝる佳境にてやと思出られはべり。大師此砌を歷覽し給ひしに、修練相應の地形なりと思しめしやがて此處に留まりて草庵など結ひて行ひ給ひしに折にふれて物ごとにあはれなりければ、我國の風とて三十一文字をかきつゞけ給ひけるとかや

法性のむろとゝきけど我すめば
　有爲のなみ風よせぬ日ぞなき

室町時代にも多少その後を襲ふものがある。蛇性の淫を強張した道成寺縁起二卷、繪は寺傳に土佐光重といひ、詞書は後小松天皇の御宸筆である。嵯峨清凉寺栴檀佛緣起は詞書は前大僧正公助、繪は狩野元信及その門下の作。執金剛神緣起一名東大寺緣起は一條太閤兼良の詞書、繪は土佐將監光弘の筆といふ。

淨土五祖双紙一卷繪は土佐光重、詞書三木行俊卿、應永の頃のものといふべきか。眞如堂緣起三卷、大永中住持昭淳僧都が掃部助久國にゑがゝせ、上卷の詞書は後柏原天皇、中卷は尊鎭法親王、下卷は前內大臣堯空前大僧正公助に請ひて成つたもの。鞍馬寺緣起三卷、因幡藥師三卷共に繪は狩野元信、詞は尊應、勸修寺緣起は詞は甘露寺元長、繪は光信の筆といふ。

かゝる數多き繪卷物は我が佛教藝術としてとこしへの光を放つもの、詞書は文學としては

價値は高くないものも多いが、この敎のいかに弘通したか乃至は世の善男善女がいかに佛陀に隨喜したかを跡つける上に於て重要なものである。

# 第五章　室町時代

## 第一節　徒然草と佛教

南北朝時代は社會の組織が變り、戰爭の絶え間がなかつたので、一般の文運は盛んになる譯に至らなかつたが、世相から徒然草の如き隨筆、正統記の如き史論、治亂興亡の跡を叙した太平記、愛國精神の迸り出た新葉集李花集の如き文學を生んだ。これら不朽の作と佛教思想とは如何なる關繫を有するかを考察して見やう。

大きな社會の制裁といふ絆がたち切られた時、有象無象の大衆は北へ南へ或は明るみへ或は暗がりへさまよひ出づるものである。意欲つよく筋骨の逞しきものは大きな權力にむすびつき、否らざるものは現社會に望をかけないで山林に交り隱逸の生を送らうとする。その他は唯浮世のさがに隨つて世にもまれて一生を過す。徒然草の著者は神官の家に生まれ、僧衣

をまとひ、老莊の學を甘なひ、平安盛時の世相にあこがれ、時に野山に旅寢するかと見れば權門にも何氣なくたちうかゞふ。無抵抗主義であきらめが善く、趣味に生きてゆく人、その思のまゝ行ふ姿、考へてゐる心、批評のくさ〴〵多面的な生活情操を筆にとゞめた隨筆は各種の人に讀まれるのは偶然でない。その思想にも時により著しい矛盾があり衝突があるが、その中より佛敎思想の背景を拾つて見ると、まづ

萬の事はたのむべからず（二一一段）

と喝破せるは無常思想から來てゐる。

人と生れたらんしるしにはいかにもして世を遁れんことこそあらまほしけれ。ひとへに貪ることをつとめて菩提におもむかざらんは よろづの畜類にかはる所あるまじくや（五八段）

の如き遁世を希つてゐる。

つれ〴〵わぶる人はいかなる心ならむ。まぎるゝ方なく、たゞひとりあるのみこそよけ

の如く閑寂の生活を欲してゐる。現世に我と等しき相手を求めがたいのを知りては
れ（七五段）
ひとりともし火のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするこそこよなう慰むわざなれ
（一四三段）
の如く過去の人を友とすべきことを自ら信じ且體驗してゐる。さうして世上百般の事にかゝ
ずらひゐても求道心が大切であつて、これも强ひられたり、努めてではなく、
人事おほかる中に道をたのしぶより氣味ふかきはなし、是れまことの大事なり。一たび
道を開きてこれに志さん人いづれのわざかすたれざらん、何事をかいとなまん（一七四段）
といふ如く道を樂む境地に達すべしとしてゐる。「老來りて始めて道を行ぜんとまつことな
かれ」といひ、また「名利につかはれて閑なるいとまなく一生を苦しむるこそおろかなれ」
と云つてゐる。隨筆のことであり、且は道の墜れた時代に存へてゐたので、以上の如く思想
に幾多の矛盾の言說があるが、そこが却つて多くの讀者を今にひく所以である。

## 第二節　太平記と佛教

太平記は後醍醐天皇の御即位から後村上天皇御崩御の一年前まで約五十年間の治亂興亡の跡を錄したもので世人に最も深い感激を與へる史書である。一部、すべて四十卷、神田本、島津家本、北條家本、西源院本、南都本、吉川家本等異本が多く、古本は二十二の卷を闕いでゐる。作者は小島法師と洞院公定公日次記に見えてゐる。漢學に長じ博く佛典に通じてゐた人に違ひないがその傳記は全く分らない。書中の記事は戰亂のことが主であつて書名がふさはしくない。隨つて太平記理盡抄には四度題名が變つたと見えてゐる。細川賴之が幼君輔佐の任にあたり、「氏族もこれを重んじ外樣も彼の命を肯かずして中夏無爲の代になつてめでたかりし事どもなり」と大尾をとぢめた點から考へて見るに、厭ふべき幾多の戰亂を重ねて來たが、やがて太平の御代に復したいとの志から名づけたものか。

この書は平家物語の如き全部の統一はないが、和漢の故事を引き美辭麗句をつらね、或は

椽大の筆を揮つてあるので、一章一章には諷詠すべきものが少くない。特に愛國忠勇に關したものは讀者の精神を鼓舞するものが多い。但しその叙述は大體事實に基いてゐるとしても、人格や事件に少からぬ空想を加へ、劇化してあるものも認められる。隨つて今川貞世の難太平記に於けるが如く、成立直後に史實の相違を非難したものも生じ、近世歴史學の進展につれ、この書の價値を云々するものも出でたが、文學として見ればそれは問題にならぬ。屢〻改補されたことは異本の多いのでも察しられる。その文章に魅力を具へてゐるので夙くから多く讀まれた。而して戰法兵事に關することが多いので武士の故訓として兵法家の參考として讀まれ、またその中の忠臣義士の行績に關するものは太平記評判と唱へ講釋師が街頭に讀みあげ、聽くところの大衆に節義を知らしめたことも少くない。併し建武中興を中心としてその前後三十年間の事績は悲しむべきことが相當多くあつても何となく明るい感じもあるが、以下二十年の事績は武臣の横暴や世人の利欲や、下剋上の世相が讀者をして暗い感じを催さしめるものが多い。率直に世相をゑがいた言句の中には國民として激しい憤や呪はしい

嘆聲を發せずには卒讀されないものがある。皇室に對する不敬事件などもあまりに恐れ多くて削除したいとまで思ふものもある。尤も著者は率直大膽に叙述しても究竟は王法の榮を庶幾してゐるのであるが、一方神道を重んじると共に佛法を信じ、種々の不倫なことは天狗妖怪の所爲となし、すべては佛教の因果應報に由るとしたところ佛者の面目を見るのである。

今書中佛教に關するものを斷片的に摘出して見るに、卷首に後醍醐天皇の治世をことほぎ「寺社禪律の繁昌爰に時を得、顯密儒道の碩才も皆望を逹」すといひ、儲王の條には三宮護良親王の御器量をたゝへて、「承鎭親王の御門弟とならせ給ひて一を聞いて十を悟る御器量世に又類もなかりしかば、一實圓頓の花の匂を荊溪の風に薫じ、三諦卽是の月の光を玉泉の流に浸せり。されば消えなんとする法燈を挑げ絶えなんとする慧命を繼がんこと唯この門主の時なるべしと一山掌を合せて悅び九品首を傾け仰ぎ奉る」といひ、南都北嶺行幸の事を記し、文觀、圓觀、忠圓の碩德を叙し、大塔宮熊野落ちの條には柳の衣に笈を掛け頭巾眉半ばに責め田舍山伏の體に裝はせられ、切目王子にて通夜祈願をこめられると鬟ゆひたる童子の夢のお告げが

あり、またその牒使があれば、山門の衆徒は高祖や慈恵僧正の遺業を述べ、「王身盡きことなし、釋門假令出塵の徒たりとも、この時奈何ぞ報國の忠を盡すことなからんや」と議を合せ、官軍數度の戰にうち負けたれば、主上御身みづから金輪の法を修せしめられたことを錄されてある。禪の信仰も深くして命終に際しても臆するところもなく、辭世の偈を靜に書いて死に就く人も多くなつた。日野資朝卿は人間のことに於ては頭燃を拂ふが如くと悟り「五蘊假成形、四大今歸空、將首當白刃、截斷一陣風」の偈を遺し、俊基朝臣は斷頭場裏で、古來の一句「無死無生萬里雲盡長江水淸」の頌を疊紙に書き遺し、源具行は柏原の山際で硯を取りよせ「逍遙生死、四十二年、山河一革、天地洞然」と辭世の頌を書いた。萬里小路中納言藤房卿は心の垢を雪め憂世の耳を洗はんと遁世し岩藏の草庵に入り、こゝも浮世と觀じ、その障子に

住み捨つる山をうき世の人とはゞ
　あらしや庭の松にこたへむ

の一首と棄恩入無爲眞實報恩者の文の下に黃檗の大義渡と題した古頌をかきつけて又その居

所を晦ました。

當時神佛一體の思想が信奉された。日本朝敵の章には天照大神が御裳濯川の邊に跡を垂れたまふといひ、また「或時は垂跡の佛となつて番々出世の化儀を調へ、或は本地の神に歸つて塵々刹土の利生をなし給ふこれ則ち跡高本下の成道なり」と云つてある。

前代よりの影響を受けて、佛法は王法と一致するとの考は一層堅く信じられてゐた。怨敵を滅す最上の手段として重々しい御修法を行はれたことは後醍醐天皇が關東調伏の爲にこれを行はせられたことでも分る。白河法勝寺の高塔が炎上した時には佛法も王法もあつてなきが如くならんと歎かぬ人もなかつたと見えてゐる。叡山では「王道之盛衰者依佛法之邪正、國家之安全者在山門之護持」などゝ唱へてゐる。佛法に害を加へると、非常な非運に陷らねばならぬ。千種中將が四月八日に軍を率ゐて六波羅へ寄せた時、人々は

あら不思議、今日は佛生日とて心あるも心なきも灌佛の水に心を澄し供花燒香に經を翻して捨惡修善を事とする習なるに、時日こそ多かるに齋日にして合戰を始めて天魔波旬

の道を學ばるゝ條心得がたし

と舌を翻したとある。延朗上人造立の最福寺谷堂を燒拂つた爲に六波羅勢は覆滅したと思はれ、高師直は無二亦無三の靈場藏王堂を燒いた爲にその身は忽に亡んだ。寺領を沒收し法燈の光を消し塔の九輪を下して茶器となす横暴のものが餘殃なしに終る譯がない。忠臣結城宗廣でも僧尼を多く殺したので、地獄に墮ちて牛頭馬頭に散々呵責された。このやうな思想は仙院や尊き御上でも同樣に書き載せてゐる。卷三十五卷に載せてある北野通夜物語には色靑ざめた儒を旨としてゐる雲客と關東の舊臣であつた遁世者と內典に心をすましてゐた瘦法師の三人が座談式に世の治亂を語りあひ本朝支那印度の事例を引き世相を批判し、君道論も說いてゐるが延喜の聖主が阿鼻地獄にさまよはせられる說話の如きは恐れ多い次第である。要するに佛法の因果觀念の文學思想の根柢になつてゐるのである。かくて不臣な足利尊氏兄弟の如きも禪の名僧夢窓疎石の說を容れて後醍醐天皇の尊靈を祀る爲に嵯峨に天龍寺を建て佛殿法堂等七十餘宇の大建築を經營した。斯の如き佛敎に交涉が頗る多い。

## 第三節　增鏡と佛教

增鏡は後鳥羽天皇の御卽位より後醍醐天皇の建武中興に至る百五十年の史實を優美の筆で叙したもので、榮華に倣ひ編年體に書いてあるが所々源氏物語に倣つたところがある。序は大鏡に倣ひ嵯峨の淸凉寺に詣で、老尼の物語を記したさまにしてある。

大内山の卷には西園寺の造營のこと、煙のすゑ〴〵の卷には建長の始の蓮華王院等の炎上、北野の雪の卷には涅槃の儀式、御八講、如法經等の寫經の供養、あすか川の卷には七佛藥師五壇の御修法普賢延命、金剛童子、如法愛染の大法秘法の行はれること、むら時雨の卷にも主上御惱みの爲にさま〴〵の秘法の行はれた記事が載つてゐるが、事件の推移を主とし、個々の詳說は斟酌してある。これを太平記などに比べるとその量が極めて少い。

## 第四節　神皇正統記と佛教

北畠親房の陣中にありてこの國の前途を憂へ、一冊の最略皇代記を參考として筆を執つた神皇正統記(六冊)が我が國民の精神界に與へた影響は實に偉大であることは今更に論ずべきでもない。その開卷第一に「大日本は神國也、天祖初めて基を開き日神始めて統を傳へ給ふ異朝にその類なし」と喝破してあり、國體の尊嚴を說き三種の神器の由來を述べ、皇統の正閏を辨へ、大義名分を明にした點に於て、他に比類のない史書である。三種の神器につきて

鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照して是非善惡の姿あらはれずといふことなし。その姿に從ひて感應するを德とす。これ正直の本元也。玉は柔和善順を德とす。慈悲の本源なり。劔は剛利決斷を德とす。智慧の本源也。この三德をあはせ受けずしては天下の治まらんことかたし

と君道論を說き、凡そ

王土にはらまれて忠をいたし命を棄つるは人臣の道なり。必ずしもこれを身の功名と思ふべきにあらず云々

と臣道論を述べてある。この書は正直を本とする神道の第一書であるが、儒佛の教を採り三教一致の精神がその中にこめられてある。親房卿は己が傅育し奉つた世良親王の夭折を悲しみ一旦は佛門に入つた人、內典にも相當委しかつたであらう。創世說には倶舍論疏などの說を採つてゐる。當時行はれてゐた各宗に就きても多少の批評があり、中にも眞言宗は神道と一致すると考へてゐた。本書著作の目的が一般啓蒙の爲のみでなく、皇位繼承に關する意見を述べて新帝の乙夜の覽に供へ奉るのであつたから、佛教に關しては積極的に記してないのは自然のことである。我が國として最も大切な皇位論國體論として、水戶の大日本史、栗山潜峯の保建大記、山陽の日本外史、宗良親王の撰し奉つた新葉集と共に勤王思想を鼓吹したことは顯著なことである。

## 第五節　連　歌　と　佛　敎

室町時代に於ける文學には連歌があり、舞曲があり、謠曲があり、狂言があり、御伽草子

があり、その他前代の文學を繼承したものもある。由來國民文學と稱へられ來つた和歌は風雅集以下新續古今集に至る六つの勅撰が成つたが、この間に於ける傑れた作家は幽玄を旨とし當流を盛にした頓阿上人や勗めて新奇を出さんと企てた冷泉派の淸巖和尙の二人をはじめとして、僧侶歌人に注目すべき作家が多く、頓阿が高野の奧院で詠んだ

名も知らぬ深山の鳥の聲はして
　逢ふ人もなし眞木の下道

の如き草庵集の歌風は長く堂上派の範と仰がれ、淸巖の

右になし左になして遠くきぬ
　苔のうへゆく野邊の小川を

山もとの夕の雨に啼く鳩の
　ならぶこすゑぞ雲がくれゆく

の如き草根集の作には新しく奇拔のものがあつて他の追隨をゆるさないものがある。當時の

歌人には法樂の爲に百首詠を試みることが一つの仕事のやうになつてゐたが今一々說くことを控へる。

連歌は鎌倉時代より盛であつたが、この時代は特に隆昌を極めたもので、斯道の大家は殆ど皆桑門の人と云つても宜しい程で、三賢といはれた中の救濟周阿は勿論、その後をうけた梵燈庵主でも、また宗砌以下の七賢でも、また斯道の聖とも云はれる宗祇でも皆圓頂緇衣の人である。而して連歌の貴ぶところは人の句に對し、即座に應酬し、しかもその附合は變轉の妙があるのを貴ぶのである。前句の平凡なものが警拔に、眞面目なものが滑稽に、小さなことを大きな事件に、或は大きな事件を小さなものに、靜から動きへ、春景が忽ちにして秋景に、冬が忽ちにして夏にかはり、戀情が神祇釋教に、抽象的から具象的へ、樣々の變化を即けず離れず相むかへ相合して渾然たる珠玉となし、一座のだれ氣味にならないやうにするのが連歌の狙ひところである。例へば

うらか表か衣ともなし　に

東雲のあしたの山のうすかすみ

と宗砌が附け、

扇の紙を匂ふたきもの　に

山蔭に消えざる雪か梅の花

と救濟が附けた類を味讀すれば分るであらう。かういふ點は禪の境地と相通ずる。斯道のパトロンであつた二條良基の筑波問答に

連歌は前念後念つがず。又盛者憂苦のさかひを並べて移りもてゆくさま浮世の有様に異ならず。昨日と思へば今日に過ぎ、春と思へば秋になり、花と思へば紅葉に移ろふさまなど飛花落葉の感なからんや

とあるのも禪の精神が多分にはいつてゐる。佛國禪師や夢窓國師が晝夜これを弄ばれたのは定めてある意味をもつてゐられたとしてゐる。梵灯庵主は師の筑波問答に連歌は菩提の因緣であるとの說に基き、これを佛乘に配し、上句の始五字は五根、中七字は七覺、終五字は五

感、下句の七字は七佛、後の七字は七靈、上下二句合すれば則大日經三十一品、諸如來三十一相也。加之輪廻の迷を明らめ、餘念の雲を拂ひ思案の月に嘯く人自ら佛法の掟を具へたるが故に神明を納受し佛陀も感應を增したまふ云々と說き、七賢の一人心敬僧都はそのさゝめことの中に

歌連歌も佛の法報應の三身、空假中の三諦の等分侍るべくや

といひ、「歌も連歌も觀念の心肝要なるべし」といひ、その理想としてゐた幽玄體は宗敎心に根ざした修養によつて始めて成し得られると考へてゐた。これは能樂に於ける世阿彌の考とも一致してゐる。連歌が法樂の爲に賦しられ、中世に加持祈禱敎になつてゐた眞言宗に代つて如何なる經論說法よりも連歌が尊き祈禱と唱へられた程である。

室町時代には連歌と謠曲とが文學の中核をなしてゐた。而して連歌が社會の實生活に織りこまれてゐたことは他の文學に類がない程であつた。名高き社頭で法樂の爲に行つたことも少くない。宗祇は伊豆の三島神社で法樂千句を行つた。三條西實隆は宗碩と共に大永元年兩

吟でもつて住吉明神法樂千句を行つた。後には北野社や水無瀨宮では恒例に行はれたものである。また追善供養の爲にもこれが常に行はれた。菟玖波集を見ると、斯道の先進善阿の一周忌に千句が行はれ、柴屋軒宗長は藤原盛綱の爲に、三好長慶等は壽慶の爲に、宗牧は自然齋宗祇の年忌追善に、里村紹巴は父の追善に、細川幽齋等は天正十年織田右府追善に或は百韻或は千句等を行つてゐる。追善連歌には名號をよみ入れる習で、その法名とか或は佛樣の名前、或は經典の要文を冠字に織りこんで作をなす習である。例へば眞乘院宮追善には不動、釋迦、文殊、普賢、地藏、彌勒、藥師、觀音、阿彌陀、阿閦、大日、虛空藏、寳生を冠字としてある。懷紙の書きやうは薄墨でかすり筆を好み、上包は左り前に、水引は一筋といふことまで型が出來てゐる。今これらの例を擧げることは控へる。（拙著連歌の史的硏究參照）

## 第六節　舞曲と佛敎

武家の間に喜ばれた舞曲の詞章は叙事詩體のもので舞の本に收めたものが三十六曲。中に

判官物が十七曲、曾我物が七曲、平曲が五曲で、勇ましいものが多いが、敦盛の如きはさすがに花の如き青年の打死、熊谷の發心を叙して物のあはれを述べて佛教の思想をしみ〴〵と味はしめる。その終に近き

人間五十年下天のうちをくらぶれば夢幻の如くなり、一度生を受け滅せぬもの丶あるべきか

の一節は織田信長が好んでみづから謠ひみづから舞ふたといひ、桶峽間に突撃を試みる一瞬前にもこれを奏でたといふ。作者と傳へられる幸若丸は桃井若狹守の子、源氏を讃歎したもの丶多い中にも全く佛心はないではなかつた。

## 第七節　謠曲と佛教

能樂は舞曲と異なり、因果應報、欣求淨土、草木國土悉皆成佛を主想としないものは殆どない程で、一々これを擧げるには堪へないが、複式夢幻能に屬する賴政につきて少しばかりの說

明を試みて見やう。諸國一見の僧(ワキ)が洛陽の寺院を殘りなく拜みまはつて宇治へやつて來ると、老人(シテ)が現はれ、僧を平等院へ案内し、この扇の芝で源三位が自害した有樣を物語り、「われ賴政の幽靈と名のりもあへず」忽ち消え失せる。旅僧さてはと驚き且奇特に感じ回向をしてゐると、賴政の靈(後シテ)がありし世の姿で現れ、讀經の功力に引かれて佛果を得ることを喜び、宇治合戰の昔の樣を仕形話で語り、なほも「跡弔ひ給へ」といつて消え失せる。斯くむかしの勇將が名もない諸國一見の旅僧の回向によつて修羅の苦患から救はれ成佛得脫の身となつてゆくのである。一河の流一樹の蔭袖の觸合ふも他生の緣といふありがたさを示してゐる。謠曲の題材は種々のものが採られてあるが、特に佛法を題材にしたものは例へば、觀音の利益を說く籠祇王、文殊の靈驗を告げる九世戶、泉涌寺の佛舍利を奪つた鬼が韋駄天にとりかへされる舍利、曼陀羅の由來を語る當麻、愛宕山で空也が經文を讀誦してゐると龍神が現れて佛舍利を請ひ、その報謝に山上に水を出し奉つたといふ愛宕空也、一遍が熊野權現の示現により御札をひろめる誓願寺、日蓮が甲州石和川で鵜使の亡靈を成佛

させる鵜飼、草木の精が女になつて現れて日蓮に御法の有りがたさを示す身延、明惠上人のことが見える春日龍神、日蓮が蛇身を敎化した現在七面、輪藏を工夫した善慧のことを綴つた善慧、大唐の天狗が我が佛法の妨をしようとして高僧に祈られて遁げ歸る善界、天狗と禪の問答をし行德くらべをして終にこれを降伏させる車僧、鳶に化してゐた天狗が命を救つてくれた老僧に報恩の爲に靈山大會の樣を現して見せろといふ大會、草木の精魂が僧侶の供養を受ける遊行柳、西行櫻等の靈驗說話や、龍神說話や異類說話があり、その他にも佛敎の臭味のないものは殆どないのである。左に鵜飼の一節を引いて見よう。

シテ　濕る松明ふりたてゝ

ワキ　藤の衣の玉襷

シテ　鵜籠を開き取いだし

ワキ　島の巢おろし荒鵜ども

シテ　この川波にぱつと放せば

地、面白の有樣や、底にも見ゆる篝火に驚く魚追ひまはし、かづき上げすくひ上げ、隙なく魚を食ふ時は罪も報いも後の世も忘れ果てゝ面白や、漲る水の淀ならば生簀の鯉や上らん、玉島川にあらねども、小鮎さばしるせゝらぎにかだみて魚はよもためじ、不思議やな篝火、燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ鵜舟の篝影消えて闇路に歸るこの身の名殘惜しさを、いかにせん、名殘惜しさをいかにせん。

ワキ　ワキヅレ　上歌　河瀨の石を拾ひあげ、河瀨の石を拾ひあげ、妙なる法の御經を一石に一字、書きつけて波間に沈め弔はばなどかは浮まざるべき、などかは浮まざるべき。

後シテ　それ地獄遠きにあらず、惡鬼外になし云々

地　迷の多き浮雲も

シテ　實相の風荒く吹いて

地　千里が外も雲晴れて眞如の月や出でぬらん

地ロンギ　ありがたの御事や、奈落に沈む惡人を他所に送り給ふなるその瑞相のあらたさ

よ。云々

は鵜飼の一二節を抄略して示したに過ぎない。中にロンギとあるも叡山の六月會に於ける論義のなごりである。

謠曲の作者は能本作者注文などの發見せられない以前は多く僧侶が擬せられてゐたが、今日は斯道の天才世阿彌や金春禪竹等が筆を執つたといふことが明になつたが、尙多少は文才のあつた僧侶の手に成つたものもあるだらうと想像される。世阿彌は實演者であり、作家であるばかりでなく、その遺した十六部集は偉大な藝術論として注目される。彼は一休禪師と交涉を有し、禪竹に至つては一休の門弟となつてゐるので、その演出の精神に於ては禪の影響を受けてゐる點が少くない。世子の覺習條々に說いた無心の位に關する說述は實に臨濟錄の生死去來、棚頭傀儡一線斷時落々磊々の語を金科玉條として立論してゐる。禪竹が六輪一露に說いてゐる無味論の如きも禪の敎から出てゐるのである。その他述ぶべきことは少くないが、この小册子には唯その一隅を擧げて三隅を知らしめるに止めた。

## 第八節　狂言と佛教

狂言はその發生は極めて古いものであるが、室町時代に至り、能樂大成につれて、その伴奏劇として大に發展を遂げた。狂言六議に收めたものは二百番、狂言記に載せてあるものは二百五十番に上つてゐる。多くは諷刺、滑稽を旨としたもので、十餘の祝言物を除いた全部が可笑味を狙つたと云つて誤はない。取材によりて區分してみると、大名物が最も多くして七十篇に上り、次は僧侶の二十餘篇が多い方で、以下横綱、盗人、山伏、座頭といつた順である、謠曲の典雅沈靜の藝術と異なり、他の缺點を擧げておもしろおかしく噴飯に堪へないやうに仕組んだものが多い。例へば宗論の如きも淨土宗の僧と日蓮宗の僧とが互にけぎらひをし爭つてゐることを仕組んでである。僧侶にしても、狂言に登場するものは一人として學德の高い高僧のことは取らないで、全く無學、貪欲、破廉恥なものばかりを捕へ來つてひたすら可笑味をそゝつてゐる。弟子に法名を附けてやることも出來ない無學な僧侶を取扱つた

ものには比丘貞、呂連の如きがあり、附けて貰つたおのが法號を記憶しないものには名取川があり、挨拶もろくに出來ないものには骨皮の如きがある。酒好な住持を描いたものには酒講式があり、布施を貪るものには布施無經・泣尼・東西離の如きがある。出鱈目を云つてゐるものには魚說法の如きがあり、うまく胡麻化して一夜の宿を求めるものには地藏舞の如きがある。檀徒を坊主にしてしくじつた柱杖、物覺のわるい不腹立や、無理を通さうとする雪打や、濫行をしようとする水汲などがある。出來心の俄坊主や新發意のよくないものを特に捉へ來つて構成したものが多いから、果して社會の實相をうつしたか否やは斷定出來ないが、立派な聖に比べてわるい賣僧坊主のあらが民衆にもよく見えるので、自然さういふ題材をどつたかとも考へられる。

## 第九節　御伽物語と佛教

この時代の物語は低級のものが行はれてゐた。中に兒物語としては瞻西上人を主人公とし

た秋夜長物語があり、遁世物語としては三人法師があり、懺悔物語式になつてゐる。江戸時代の初期に於ける七人比丘尼物語や二人比丘尼物語の粉本となつた點が注目すべきである。女子供の讀み物として行はれた御伽草子にはさゞれ石、賓滿長者の如き佛教物語の外に毘沙門本地、貴船本地、梵天國等がある。本地とは法華本門の證果を得た地位との義で、多くは神佛の緣起由來を說き佛法流通の方便に用ひたもので、最初は白拍子がこれを謠つたものである。さゞれ石の如きは藥師の本地を謠つたもの、物臭太郎の如きも一方より見ればまた本地物の中に算へて然るべきか。すべて本地物の終には「此を見ん人々は皆三寶を敬ひ父母に志を盡し、君に仕へんものは忠節をなし、我より下の者には慈悲をなし、情なき事を振舞ふべからず」とある。毘舍門本地には以上の外、特に慈悲ありて毘沙門を信ぜん人は現世には福德をなし、後の世にては必ず淨土に生れ仕ふべし、何ぞ世の中の報なるに報はんや。此草子を見終らんは毘沙門の眞言におんへいしらまんなやそわかと三返南無吉祥天女と唱へ給ふべし」とさへ書加へてある。

# 第六章　江戸時代

## 第一節　和歌と佛敎

江戸時代の初頭に於て歌名の卓絶してゐたのは細川幽齋である。その作品の優れてゐるのは木下長嘯子である。共に武將であつてその門流から多くの歌人が出た。當時の僧侶歌人としては澤庵和尚及深草の元政上人を推すべく、澤庵禪師は我が出石の小出氏の出で、近世の高僧中の高僧で、上下の信頼の篤かつた人、歌はその餘技であるが、幽齋門下の烏丸大納言光廣卿に點を請うたこともあつてその作の見るべきものがある。山中百首があり、我庵百首があり、梅花百首があり、夢百首があり、千首詠もある。和泉山中百首の中に寂莫無人聲を詠んだ作には

とひよれど答ふる人の音もせず

柴の戸とぢて花のちる〳〵

の如きがある。丹霞焼本佛の意を詠じたものには

なにとなき筆のすさみをとり出でて

思はぬ人になく涙かな

の如きがある。また達磨面壁をば

面壁の祖師の姿は山城の

こまのわたりの瓜か茄子か

と詠んでゐる。禪機に觸れて無造作に出來た作がある。特にその山姥五十首は佛教に於ける差別觀より絶對平等觀を容易く人に知らしめる目的で詠じたもので、措辭は優雅でないけれど、一洞空谷の聲、無生音、常樂の夢、法性の嶺、上求菩提、下化衆生、邪正一如、色即是空などの眞理をつかんで謠つた作には自ら眼を引きつけられる。

元政上人は彦根中將井伊直孝に仕へてゐたが、二十六歳で剃髪染衣の人となり、深草に

瑞光寺を剏めた人、歌は幽齋門下の松永貞德の教を受け隱逸の氣に滿ちた作が多い。草山集から二三首を引く。

鷲の山常にすむてふ峰の月

假りにあらはれかりに隱れて　(1)

よるは猶心をのみぞ照すべき

窓の螢も何か集めむ　(2)

おもへ人たゞぬしもなき大空の

中にはもるゝ海山もなし　(3)

(1)は辭世で、上句は常住不滅の法體を含め、下句は生死往來の應佛の相を述べてある。(2)は大智度論の要文を翻した作、(3)は大我の心を詠じたもの、その人と作品と合せて味讀すべきである。

水戸中納言光圀卿の招きに應じ、逢阪山の柴庵を出で常陸は那珂港の天德寺に居はり、卿

と道交十六年の久しきに及んだ月坡禪師の手每花も當時に於ては注意すべき集である。

古學の基を開いた圓珠庵契沖阿闍梨は萬葉集代匠記を遺し、倭字正濫鈔及同要略を著し、古典研究の礎を置き、歷史的假名遣を始めて唱道したばかりでなく、富士百首を詠じ、六六歌賛を詠じた。その家集漫吟集には釋教の歌を二百五十首も載せてある。眞言の學僧のことゝて

生死の海にかよへるしほひ山
　心の月ぞ峰にみちける

の如き金剛頂經により宗義を詠じたものや、

鏡山みがけるものと聞ゆるも
　世を經てつもる塵にやあるらん

の如き煩惱卽菩提の心を詠じたものもある。長歌の中、六道を詠じたものは百九十句、無常を詠じたものは實に三百二十九句の雄大なものがある。六道の長歌は寒熱の地獄に始まり、

鳥も獸も生を競つてゐる畜生道から、飯に飢ゑ水に渴してゐる餓鬼道をうたひ、手束の弓、劍の雨と爭鬪を事とする修羅道より苦樂相交る人間道、それから天上道を謠つてある。無常の歌は首に靑年の空想歡樂を述べ、次に老病を叙し、最後に死滅のことを述べてあつて、我國宗教和歌の雄大な篇である。

また叡山安樂院の開山妙立和尙の集には宗教的情操を詠じた作が少くない。攝津の蓮池に安居してゐた頃の詠には

いつか身を繫がぬ舟の如くして
散りし蓮の花によそへむ

の如きがあり。述懷には

いかにせんたのめし人も大かたは
世をうしとだにいはずなりにき

を始め、十如是を詠んだ作もある。法華經の持經者のことゝてかゝる企に及んだものゝ如

く、風趣のある作が少い。

以上は江戸初期に於ける三四の名僧の作に觸れたに過ぎないが、これらは釋教和歌の九牛の一毛であらう。堂上といはず地下といはず三十一文字を口ずさむもので全く佛教に因める作を遺さないものはない。畏くも九重の雲の上にて敷道の道に優れさせられた後水尾院の御製集を繙いて見ると尊き釋教歌のかず〳〵を拜する。その中に

ぬしやたれ問へど答へぬ蜑の子の
　泊りさだめぬ波のうへかな

の如く金剛般若經の應無所住而生其心を詠ませられたものがある。

さやけしなかひこを出づる鳥が音に
　やぶしも分かずめぐる光は

の如く啐啄同時眼を賦せられたもの、

ゑみの眉ひらけし花は梅か桃か

誰知り知らん誰知らずとも

の世尊の拈華迦葉微笑を詠ぜられたもの。

染なすはこゝや西より來る秋の

色はいろなき庭の梢を

は一僧が如何是祖師西來意と趙州從諗に問うた時、州が店前拍樹子と答へた禪の問答を詠ませられたもの、また先帝の御崩御に方り倚盧の御所にうつらせられた時には、法華經の中心思想である諸法實相の事を思念遊ばされ、それを句頭に置きて詠ませられた

白雲のまがふばかりを形見にて

煙のすゑも見ぬぞかなしき

以下八首詠があり、山陰の桐庵にこもり、江山を望みて詩情の助となし、一鳥鳴かざる雪の朝岑寂を甘なひて禪定を修してゐた一絲和尚より十首の詩を奉つたのに對し、その韻を題として詠ませられた十首の御製がある。

閑

うらやまし思ひ入りけむ山よりも
　深き心のおくの閑けさ

醒

いかでそのすめる尾上の松風に
　われもうき世の夢を醒さむ

人

おもへこの身を受けながら法の道
　ふみも見ざらん人は人かは

以下金玉の御詠が少くない。またある時は諸無義患といふことを
仰げなほ八州の外も浪風の
　憂なしてふ法のまことを

と詠じ給ひ、寛永十四年の御述懐には

後の世のつとめの外は事なくて
　物にまぎれぬ身をつくさばや

と萬乘の君にましまして斯くの如くも詠ませられ、御辭世には

ゆき〳〵て思へば悲し末とほく
　みえし高嶺の花の白雲

の如く詠ませられてある。唯この御門ばかりではない。靈元天皇は法華經二十八品和歌をしば〳〵詠ませられた。否歴代の聖天子でこの方面の御製を遊ばされたことは一々擧げ奉ることが出來ない。(釋尊降誕二千五百年記念として自分が高楠博士等と共に撰んだ釋教歌詠全集第一卷の首に擧げた列聖釋教御製集を參照されることを望む。)

元祿以降の僧侶歌人の作には主一無能上人の勸心詠歌集がある。この集には念佛三昧の歌が多い。日課念佛十萬餘その化を受けたものが無慮十七萬人に及んだといふ高德の生活心情

がさながら歌となつてゐる。觀經の至誠、深、廻向發願三心をよめる卷頭の

いつはらずまた疑はずかの國を
　ねがふは三つの心なりけり

から彌陀の四十八願になずらへ、いろはを句頭に置いた四十八首詠などもある。その阿彌陀いろは和讃も世に行はれてゐる。

謁宿の牧野貞通侯の信頼の篤かつた西方寺長譽の岩間草や、能因法師の風雅を慕つてその遺跡に碑を立てた忍鎧惠南の空華落葉集や天桂和尚の和歌も見逃すことも遺憾であらう。忍鎧は黄檗の百拙和尚とも道交があり、また聞香の技にも長じてゐた風雅の人であつた。今これらの集にも一瞥を與へて見る。

岩間草には涅槃像を拜して

仰ぎ見る月のいるさの跡とめて
　光をのこすきさらぎの空

の如きがあり、空華落葉集には地藏菩薩の尊像を書きて多くの人に與へた時に詠んだ。

露の身を花のうへにと賴むから

消えてはおかぬ六つの道芝

の如き、亡妹を思ひて詠んだ。

寒からば着ませといひし紙衣を

かたみがてらや綴りおきけむ

の如きがある。天桂和尙は正法眼藏辨註の著者で、彼の臼挽き歌で名高い盤珪禪師並に心越禪師も大にその機を稱したほどの宏才で、口語を以てよく禪理を詠んでゐる。川渡り布袋を

世の中は流れわたりのうその皮

淺いこと〳〵子どもこちこい

寒山拾得を

手をあはせ祈る心は何かこれを

めしをたんとくだんされとや

佛といふ題を

いかなるが佛と問へば痲三斤

そへずへらさずありのまゝなり

と詠じ、坐禪坊主像に題して

この坊主瓢箪なまずの工夫面

押さへて見ればてんころとてん

と輕口に詠みなした。享保十一年臘月の夜、夢中で詠まれたものには

種による瓜は茄子はならぬもの

よしあしとても種はたねなり

假名にいふいろは匂へどきこえたか

合點ゆかずはさゐはいで候

の如き飄逸の作が多い。風雅を旨とした三十一字詩とは距離が遠く、宛も狂歌の如き觀があるが、唯面白をかしく人を笑はせるのを目あてとした狂歌とは詠作の精神に甚大な差異がある。禪機の横溢が文字に囚へられないで、思ふがまゝを放膽的にあらはしたものである。

これらと類を異にし、純正の歌を以て聞えた僧侶歌人の上に眼を轉じて見よう。逍遙院以來第一の歌人と折紙のついた武者小路實陰卿の高弟に葛城山の似雲がある。似雲は西行を慕ひ、その遺跡河内の弘川寺で終をとつた程の人、その年並艸にはかず〳〵の釋教和歌がある。機法一躰を詠んだ

秋の野は千草にむすぶ露ながら
　やがてうつろふ空の月かげ

觀無量經の是心是佛を

木にきざみ紙に心をうつし繪の
　ほとけも外のものとやは見む

般若心經の不生不滅を

石の火のつねなるものを打出でゝ
　世のはかなさに見るもはかなし

などゝ詠んだ二三の例でもその歌風を見るべきである。
近世禪家としてその名の隱れない白隱禪師の藻鹽草には逸氣の溢れた作がある。

忘れてはさむしと思ふ床の雪を
　はらふひまなき人もありしに

衣やうすき食や乏しききりぎりす
　きゝ捨てかねてもる涙かな

よしあしもたゞうち捨てよあだしのゝ
　ますほのすゝき風わたる頃

の如き措辭もよく整つてゐる。

嵯峨に隱栖し念佛のかたはら詠歌にいそしんだ涌蓮大德は冷泉爲村卿の高足で伴蒿蹊や大愚和尙と歌名を齊しくした人、その獅子巖和歌集は世に行はれてゐる。圓光大師の五百五十年忌に當り、大師の一枚起誓文の文字を逐次に冠字として詠んだ一集は法の江と呼び、每首厭欣、念死、安心起行の意を寫してある。卷頭の

もらさじの誓は人をえらばぬを
　　我が方よりや遠ざかるらむ

以下三百四十二首悉く法丈の歌である。書名は卷末に添へてある

立ちかへり見ればあやなし法の江に
　　かゝれとばかりかきし藻屑は

の詠によるもので、伴蒿蹊もこれに倣ひて續法の江三百四十二首詠を企てた。その後にも續法の江を詠んだ人が出た。

佛敎學者として著作の多い大我上人に蓮葉和歌集があり、

春雨のふりつゞく日の淋しさに
　花見にかへて言の葉をかく

の巻頭より始め、法藏菩薩の四十八願、淨土の十樂、法華の十如是、淨土の五正行、十戒等を優雅の詞で謠つてあり、また長歌も連ね、歌人として重要な地位を占め得べき人である。厭離穢土、欣求淨土、安心起行、普勸念佛の長篇もあるが、爰には短歌の一二例を引く。

　天雨四華

天の華四色まだらにふりしきて
　むしろたへなる法やとくらん

　諸法皆入佛道

むさし野の草の葉ごとにおくつゆの
　落ちて流るゝ玉川の水

の如きその風格を想ふべきである。

賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の如き國學者の間には神道を尊びて佛を排する傾向が强く、堤朝風の如きは排佛百首などを詠じてゐるが、眞淵の門葉が徒らに古典派に墮してゐるのを慨してたゞこと派を唱へた小澤蘆庵には

何をかは三世の佛に手向けまし
もとの心の花に咲かずば

の如く三世の佛に奉つた作もあり、

ことの葉に思ひわづらふ病をも
怠らしませ南無藥師佛

と佛前に額づきて祈つた歌もあり、また十牛の歌もある。埋木地藏に參つた時には

ぼだい樹の花になきよる山蜂は
いまも般若をよむかとぞ聞く

と實況を謠つてゐる。その家集六帖詠藻を繙いてみると優なる釋敎の歌も少くない。さすが

に偉大な歌才を忍ばせる。

凡そ國民として死を悲まないものはない。從つてその家集には部を立てないまでも、哀傷の歌は詠むのが普通で、葬のわざ、奥城も詠めば、忌日には供養もする。忌には一周忌より七年、十三年、十七年、三十三年、五十年より百年の遠忌を修する。忌日には季により春夏秋冬により春釋敎、夏釋敎、秋釋敎、冬釋敎と分け、無常の歌に於ても天につけ雲、風、雨露、霜につけ、山河海野、月雪花につけ、いろ〳〵と物に寄せてそれ〴〵無常の歌を詠んでゐる。また佛菩薩に關しても釋迦、藥師、地藏、不動等を詠み、釋尊の灌佛、成道、涅槃を諡ひ、人、天、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道を詠じ、淨土の四弘誓願、法華の十喩、諸經の要文を謠つた作が少くない。江戸時代の歌よみが手ならした類題集例へば草野集鰒玉集などを繙いて見て、それらの諸詠の多きに驚かされるのである。今草野集から國學者の人々の釋敎和歌數首を引いて見る。

葬　　橘　千蔭

立のぼる煙の末は跡なくて
　思ひをのみや世にとゞむらむ
　　墓　　　　　　　　　　　　　加藤枝直

七かへり霜おきかふる苔の下に
　ありしながらの名は朽ちずして
　　忌日　　　　　　　　　　　　　栗田土滿

更にまたおつる涙ぞせきあへぬ
　同じ月日はかへらざるらん
　　如是相　　　　　　　　　　　　村田春海

水の上にうつろふ月のおもかげは
　有りとみゆるも何かつねなる
　　諸行無常　　　　　　　　　　　富士谷成章

花の春もみぢの秋の色々は

よのつねなさをみするなりけり

此の如きは殆ど計量出來ないほど多きものである。

葛城の高貴寺の慈雲尊者は梵學津梁一千卷の大著をなし、また十善法語の名著を遺した人で神儒兩道をも兼修し、國體忠孝に篤き人で、同時に歌の天才である。生駒の双龍窟に閑居しては

柴の戶をさしていつとは知らねども

たゝく水鷄のをりをこそまて

と悠々と詠め、面壁達磨の賛には

このわろがこちら向くまでずゝみみよ

かつて藏さぬおのが面目

と率直に歌つてゐる。柳澤堯山公が評したやうに、尊者の集にはよく道に叶へるもの、戯る

るもの、歌と見えぬものが錯綜してゐて讀むにつれ興味の津々たるものがある。

圓覺寺の中興誠拙禪師は一面また歌人で、法の教子在焉居士即ち俗の香川景樹に和歌の添削を請はれた。竹の杖草鞋ばきにて十二州三十三山を巡られた虚行實記の中にも多少の歌を交へてあり、嵯峨に住みたる頃には嵯峨歌集があるが、桂園の歌風に入つたのは晩年である。

春雨のわきてそれとはふらねども
　世にある人はよそに聞くらむ

とふ人のなきをたのみに隱れけむ
　落葉にうづむ三輪の山陰(玄賓の跡を尋ねて)

惠まるゝ瓜のはつなりめでたさに
　つまで心にあぢはひにけり

の如く實感を詠ひて經典の要文などを特更に詠ずる方はなかつたやうである。

禪師が相國寺や嵯峨の天龍寺で夢窓錄や碧巖の提唱された時景樹は常にその座に侍つたも

ので、桂園一枝や桂園遺稿の中には禪味を帶びた作が相當にある。

狗の子は何の心もなかりけり

何のこゝろがありと尋ねむ

は趙州無字の公案を詠じたもの

御佛もほのほを出でよこの世から

牛の車の我みちびかん

は丹霞天然禪師が木佛を燒いた畫に題したもの、菩薩乘を多少體認しなくては詠まれないであらう。

桂園門下の高足熊谷直好も同じく誠拙禪師に參禪し、師より香月居士の稱號を貰つた人、師弟の關係もむつまじくその七回忌を鹿苑院で行つた。その家集浦の汐具の中には

世の中はねても起きてもありぬべし

煙はのぼり水は流れて

の如きも禪に基いた作もある。釋尊をも詠めば、また

心より思ひむかへの小車に
　おのれとのるははかなからずや

の如く地獄を詠じてゐる。述懷の中には

世の中を思ひ定めしあしたより
　雲と水とにゆく心かな

の如きがある。法隆寺襲藏聖德太子の尊像を天王寺で開帳された時の長篇もある。田山花袋の如き小說家もその集を愛讀したのは何か共鳴するところがあつたのであらう。

近世の碩德で諸宗より景仰されたのは福田行誡上人である。上人は飯田厚比を師とし、桂園の流を酌み、詠歌にも傑出してゐた。その落葉集（正、續）も釋敎百首も世にもてはやされてゐる。

いたづらに枕をてらす燈火も

おもへば人の油なりけり

の秀吟は御歌所長高崎正風をして感嘆せしめた作。横濱三寶寺の長歌々人辨玉に冬日綿子を贈つた時の詠には

よこはまの濱のはま風さむければ

この綿子きて埋火によれ

の如きあり、人の扇に書きつけた歌には

あふがれていつまで世にはふる扇

やがて骨ともなりはつる身を

の如き悟の作もある。南條文雄師が印度を巡遊して歸朝され上人を訪づれられた時、古人は天竺の地を踏むに擬へて熊野の海に足を浸したといふが、師の足こそ正しく佛跡を踏んだ尊い足だと云はれて接足作禮とはしがきして

御佛のみあとふむ足尊しな

我いたゞかむ御跡ふむ足

の一首を贈られた。また常不輕品の心をとりて

我が袖の玉とひろひて包まばや

うちつけられし石も瓦も

と詠まれた作もある。その德風を想ふべきである。

幕末から明治の初期にかけて歌で聞えた女流作家には大田垣蓮月を第一に推すべく、高畠式部これに亞ぎ、税所敦子はやゝ後れてあらはる。尙幕末にかゞやいた人には野村望東がある。中に蓮月は才色共に優れたが家庭には惠まれず、而も孝順貞烈世に稱せられ、夫なき後は陶器を造り自詠をやきつけて生業となす。

寒き夜の佛のまへにうつぶしぬ

うつぶし染の袖かづきつゝ

たてまつる香の煙の一すぢに

をはり亂れぬこゝろともがな

玉くしげふた世をかけて安かれと
　めぐみあまねき御佛ぞこれ　（羅漢の繪に）

この頃をとふ人あらば山寺に
　うしろ安くてありと云はまし

後の世をかけよ〳〵と聞ゆなり
　阿彌陀か峯に鳴くほとゝぎす

あけ立てば埴もてすさび暮ゆけば
　佛をろがみ思ふことなし　（述　懷）

中々に胸のはちすや開くらむ
　心の鬼のうらうへにして　（鬼の念佛）

うるはしき佛の國に思ふどち

ゆきてすみなば嬉しからまし　（述懐）

塵ほどの心にかゝる雲もなし

けふをかぎりの夕暮の空　（辭世）

これらの諸詠を讀むとそのつゝまやかにして敬虔の念に滿ち、修養を怠らなかつたことがうなづかれる。

越後の萬葉歌人良寬上人に師事してその老をよく看護した貞心尼の歌集にも讀者の心胸に浸徹するものがある。

生き死にの境はなれてすむ身にも

さらぬ別れのあるぞ悲しき

來て見れば人こそ見えね庵もりて

匂ふはちすの花のたふとき

うき雲の姿はこゝにとゞむれど

心はもとの空にすむらむ

わが爲にあだなすものもにくからで

後の世までをあはれとぞ思ふ

明治の才媛にして德高く夙く夫に後れ姑に事へ、島津齊彬公の御目鏡にかなひ若君の守役、また貞姫君の老女となりて近衞家に入り、後宮中に奉仕した稅所敦子刀自の歌には誦すべきものが多い。今その家集御垣の下草にはふれないで、父母十恩經を詠じた親の恩を引く。

一、懷胎守護の恩

唯しばし露をやどせる草の葉も

おきふしやすきものとかはしる

二、臨産受苦の恩

いき死の海の浪間をわけてこそ

この白玉はかづきあげしか

三、生子忘憂の恩

鶯の谷間をいづる一聲に

こぞの寒さも忘れはてつゝ

十、究竟憐愍の恩

世を救ふ三世の佛の心にも

似たるは親の心なりけり

譯和歌は實感を謠つたものほどにはないが、目白僧園に參じ雲照律師に從ひて菩薩三聚十善戒を受け信仰にも生きた女性の作品として見ると一段の尊さが感じられる。

尙近代の譯和歌の序に一言すべきは亘海東流の碧巖百葛藤や高見祖厚の寒山詩偈讃歌にも少しく觸れねばならぬ。碧巖錄は宋の佛果圜悟禪師の名著で、禪宗に於ける宗門第一書の如く見做されてゐる。東流は世田谷の豪德寺に住んでゐてこの書を出したのは文政四年のことである。

二則　趙州至道無難

ろもかいもよし捨てはてし難波江の
　あしまの小手のなにゝさはらん

四則　德山挾複問答

になひきしおのが重荷も白雪の
　ふりつもりたる山賤の柴

七則　惠超問佛

時きぬとつぐる深山のほとゝぎす
　たゞ一聲に月ぞふけゆく

十二則　洞山麻三斤

麻をさして佛といへどしづたまき
　巻きそめし手をたれかしらいと

これらでその一班が知られる。寒山詩偈讃歌は祖厚が大德寺の高桐院で詠じたもの。句題和歌である。その二三例

庭際何所有　白雲抱幽石

塵の世をよそにみやまのしづけさは

庭のいはをも雲につゝみて

泣露千般草　吟風一様松

まつ風に露ちる草のしづくのみ

人なき山の友ときゝつゝ

践草成三徑　瞻雲成四隣

たち隔つ雲をとなりの心ちして

みすぢの道をかよふしづけさ

琴書須自隨　祿位用何爲

風ならす松の小琴をきゝながら
　　ふみよむ身には世をもおもはず

の如し。

相國寺の大拙和尙に箝槌を受け後圓覺寺の双龍窟に住した今北洪川の集、本願寺の明如上人の六華集、大德寺の黃梅院大綱の大綱遺稿等にも釋敎に關する金玉の詠があるが今一々説くことを控へる。

## 第二節　俳諧と佛敎

江戶期に於て隆昌を極めた俳諧は和歌よりも一層大衆的であつて、その諷詠するところ、民間の風俗に關するものが少くない。今試に馬琴の撰んだ俳諧歲時記から二月三月の間に於ける佛敎に因みのある季の物を拾つて見ると四五十の多きに上つてゐる。即ち

水間祭　東福寺懺法　本妙寺詣　摩耶參　行基祭　二月會式一に吉野の餅配　二月堂の

行　水取針供養　祇園御八講　湯島の砥餅　遺教經會　涅槃會　西行忌　嵯峨の柱炬
積塔　踊念佛　圓宗寺最勝會　聖靈會　北野御忌日　吉祥院の八講　季の御讀經　時宗
踊念佛　彼岸　以上二月
天王寺經供養　御燈　石山寺　粟津祭
一乘寺祭　高尾の法華會　藥師最勝會　泉涌寺開山忌　吉野の會式　禮拜講　壬生念佛
千本念佛　木母寺大念佛會　嵯峨大念佛　勸學會　人麿忌　淺草祭蓑市　御身拭　池上
千部　弘法大師御影供　永代寺山開　順の峯入（以上三月）

のやうである。一年を通じては夥しい數に上る。これらの題材以外に他の動植物及自然等を詠むにも、佛敎思想を詠みこんだ作も少くない。例へば江戸の春を賦した作に

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春　（其　角）

の如き、門松に

門松や死出の山路の一里塚　（來　山）

と詠じ、陽炎の題には

かげろふや地祭經の聲高し　（百　明）

と詠じ、鵜飼をば

おもしろくやがて悲しき鵜舟かな　（翁　）

と詠ずるやうな類が少くない。これらは表と裏とを考へる時無常思想を誘起するので自ら佛敎の句を生むに至つたのである。今年中行事のうち佛敎に關する名句を四季の順に擧げて見る。

涅槃會や皺手合する珠數の音　（芭　蕉）
善根に灸すゑてやる彼岸かな　（太　祇）
心ゆく彼岸の空や天王寺　（嘯　山）
うぐひすや彌陀の淨土の東門　（一　茶）
骸骨のうへを粧うて花見かな　（鬼　貫）

灌佛の闇よりいでゝ櫻かな　（其角）

卯月八日死んで生るゝ子は佛　（蕪村）

水雞啼く夜半に遊行の勤かな　（其角）

あまた蚊の血にふくれをる坐禪かな　（太祇）

蝶とまる芥子は維摩の坐敷かな　（翠竹）

浮雲の晴れて淨土の月見かな　（葵山）

入る月を闍耨童子のおもひかな　（狐袞）

木魚うつ音から霧ははれにけり　（扇之）

唐音の施餓鬼身にしむ夕かな　（百里）

百生や蔓一すぢの心より　（千代尼）

ともかくもあなた任せの年の暮　（一茶）

僧とめて後世にいりけり夜の雪　（桃如）

勤行に腕の胼やらす衣　（太祇）
達磨會やもつさう飯の一文字　（史邦）
夜念佛の鉦もまぎれぬ十夜哉　（蝶翁）
西念はもう寢た里をはち敲き　（蕪村）
無縁寺の夜は明けにけり寒ね佛　（召波）
からびたる三井の二王や冬木立　（其角）

以上の如く涅槃會といひ、彼岸といひ、灌佛といひ、施餓鬼といひ、御忌、達磨忌等はいづれの里いづれの人でもお參りをし佛心にならうとしないものはなかつた。隨つてそれが十七字文學ににじみ出てゐるのである。更にこの道に分け入る人は追善供養の爲に單獨で或は集まつて故人を慕ひ、その靈を慰める爲に句を作つたもので、それらの名吟は少くない。また和歌の方では祖師の事績を讃唱したり、經文の要文などを譯和することが古くより行はれてゐたが、俳句に於ても同じコースを取つた。加賀の千代の「百生や蔓一すぢ」の如きも三

界一心を詠んだもの、杉風の「成佛の花の色香や夏のふじ」の如きも「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」の偈から出てゐる句である如く今多くの例を引くまでもない。法然上人の一枚起請文の文字を頭に置いて詠んだ法の江や續法の江の如き試をするものもある。禪の行はれるや、宋の慧開禪師の無門關に倣ひ、芭蕉の「蛙とびこむ水の音」以下をとり、四十八則を擧げ、愚得坊鼠腹の評、雪中庵蓼太の頌を加へて寶曆壬午十二年に上梓したものがある。

古いけや蛙飛びこむ水の音　（ばせを）

其角翁に問て曰、山吹やの五文字を置て莊嚴せばいかんせん。

翁曰、汝に在ては可也、余においては不可也と宣ふ。

評曰、學者角の風調を得んとおもはゞ山吹に參せよ。翁の風調を得んとおもはゞ古池に參せよ。是はこれ祖翁佛頂和尙の禪に參得して頴悟の時の一句也。今天下の俳をいふもの此句を知らざるものもなく、此句をしれるものも亦なし。凡俳諧の發句附合も解すべ

からず、理解すべからず。つとめて師に參しておのづから頴悟の日あるべし。たとへ祖翁の會下にありともつとめて參得するにあらずんば、奇句を吐き妙句を吐く事、日々に五百三百も皆是依レ草附レ木の精靈也。只日夜朝暮俳諧のうちに居ながら、眼前の一切皆俳諧なる事を知らずんば、是等の妙句に至て終に領悟の日あるべからず。或日此句却て妙所ありや又なしや。曰無。又曰、誰能此句を會すや。曰、一子親得。頭長三尺、知是誰、相對無言、獨是立。

　頌　曰

世にふる池の古きみくさに蛙なく夜の降りみふらずみ、ひとりにひたる草の戸なれば、こがねの色もうしや山吹

に於けるがやうにして、非有非無、辛崎の朧以下俳諧三鳥に至る。無門關が碧巖錄と共に曹洞宗に於ける從容錄の如く、濟家を始め參禪の徒に重要視されるのに則つたもので、評はその粘提及着語に擬し、頌はさながら踏襲してある。

尙芭蕉は半僧半俗にして他に超越してゐた。佛頂禪師に學んだ禪がその作品に透徹性を加へたことゝ思はれる。その門下の李由でも千那でも智月でも圓頂緇衣の身、その作品にもその悟道の精神が多少その作にあらはれたらうと考へられるが、その跡は確かでない。

## 第三節　小說と佛敎

江戶時代の初期には小說としては低級な假名草子の類が行はれた。この草子類の中には佛敎小說が中心となつてゐる。蓋し時世の反映であつて、德川家康は佛敎を用ゐて啓蒙期の人心を和げ、信仰世界を統べさせた結果の現れである。例へば好色ものと見るべき恨之介やそれを模倣した薄雪物語の如きものでもその底には無常思想が流れてゐる。戀に成功した左衛門が近江路の旅に上つてゐる間にその愛妻の薄雪が病死する。これを聞いて夫は自殺しようとしたが、思ひ返して佛門に入り高野に上りて往生を遂げるといふ筋の如き、その徵證である。この物語は寬永九年の開版を始めとしてその後屢々板を新にしてゐる。世の愛讀の一書

であつたことが知られる。後に薄雪物と云ふ演劇界に一圏さへ生ずるに至つた。中には懸想を長々と書き綴つたやうで、實は教訓物である類ひもある。彼の三浦長門守爲春のあだもの語の如きは種々の鳥が北山のうそ姫を戀慕するさまに綴つてあつて、一面からいへば魚鳥平家のすぢを引いて擬物語であるが、好色は主とするところでなく、鳥の社會に假りた教訓小說で、うそ姫が耳無の池に身を投げた緩兒の後を追ふにも十恩經に說いてあるくさ〴〵の恩を忘れることを悲しみ、弔ひに來た梟法師の小僧の蝙蝠が高座に上りて五時八教の說法をするなど、佛教の教理を說くのが本旨となつてゐる。大覺寺宮空性法親王がこれを後水尾院の叡覽に供へ、烏丸光廣が跋を加へた程有名なものとなつた　薄雪物語が愛の消息で物語を綴つたのはゲーテのウェルエルス、ライデンを聯想させる。あだ物語は薄雪物語の消息を和歌に代へ、園部衛門の代りに諸鳥を以てした。

以上の外、佛教の色彩顯著なものには懺悔物があり本地物がある。前者には七人比丘尼や二人比丘尼があり、後者には中將姫の本地、阿彌陀裸物語、辨才天の本地、七夕草紙、月日

の本地、愛宕地藏の物語等がある。七人比丘尼は一名を懺悔物語といふ。室町期に於ける三人法師の系を引いたもので、善光寺に參詣する人々の爲に關川の宿に湯攝待をする尼が居て、そこに今阿彌、白菊、左京の御臺、花かづら、兵部の御方、菊井殿、三池殿の侍女尼が來て、互に懺悔譚をするさまに綴つてある。

この系統に屬するものに、鈴木正三の二人比丘尼がある。須田彌兵衛の若妻が夫の戰死した野邊をさまよひ、夜もすがら回向してゐると、骸骨ども手拍子うち或は經本をかざして歌舞して無常を示すのに驚きて尼となつてゐると、他の一人の不幸な女が尼となるといふ如き筋で、四人比丘尼も同じ流のものである。尤も七人比丘尼の今阿彌の如きは煩惱卽菩提と悟るが如き、禪的の悟入があり、二人比丘尼の方はこの身は地水火風の假のもの、六賊煩惱の種子を絕つといふことが强調されてゐる差異が認められる。作者はこの一篇に、その人生觀を托してゐる。「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電の觀念を以て現世の一切を夢幻と觀じ、早く勇猛精進の信念を抱いて捨身念佛の業を積まねばならぬとし、この思想を具體的に

現したこの小說中、他界した美しい女性が亡き骸は野に捨てられ、初七日にいきて見ると花の俤は消え、髮はおどろに亂れ、五體は膨れたゞれて見るもいぶせく、怖しく、二七、三七、四七、五七と參るたびにかはりはて、終には白骨が草の根にころがりてゐる狀を描いてゐる。この白骨と化してゆく一段は一部の大切な楔であつて、一體の骸骨草子の「いづれの時か夢の中にあらざる、いづれの人か骸骨にあらざる」云々の條より採つたか、或は蘇東坡の九相詩の翻案か分らないが、とにかくこの身の憑まれないことを痛切に知らしめてゐる。正三は一に石平道人と號し、三河の石平山恩眞寺に住した人ほどあつて、この草子も娛樂を旨とする小說とちがひ、むしろ法話に近いものがある。自余の著に於ては特に然りである。(また往生傳としては勇大の扶桑往生傳、如幻の近世往生傳、洞空女人往生草、洞空の女人往生草等があつた。)

讀本の作者としてその名の沒しられぬ上田余齋は都賀庭鐘に倣つて怪異小說を著した。雨月物語九篇中、白峯の一篇はその傑作と云はれてゐる。西行法師は仁安三年西國の歌枕を見よ

うと志し、讃岐の眞尾阪の林に杖をとどめてゐる中、かねて恩顧を辱うした崇德院の白峯の山陵に詣で、院の尊靈と問答をかはした。この一話は撰集抄に基いたものであるが、その行文の迫力はそれと日を同じくして語られない程である。松柏の茂りあひたる山は高く、千仭の谷底より生ひ上る雲霧はあたりをこめ、御墳はうばらやかつらに埋れ人跡を絕ちたる境地、頃は神無月の初、寒さは骨にしみ入る夜もすがら徐に經文を誦し供養し奉つてゐる。異形の尊靈の忽ちあらはれて鬼氣身に迫るものがあるけれども、西行は從容としてありし世の事はお忘れになつて、佛果圓滿の位に昇らせ給ふことを申上げ奉ると、院は重なる御恨みにより魔道に志を傾けてゐらせらるゝことを宣べさせられ、西行が諫め奉ると、院は西行を以て佛に搖し未來解脫の利慾を願ふとなし、問答を重ねる中、峯も谷も動搖し、風は叢林を倒し、沙石は空に卷上げ陰火は御膝の下より燃え上り、龍顏は魔王の形にかはらせられ、化鳥翔け來る鬼氣は一段ともの凄い光景を現じたが、西行は隨緣の歌を口吟し奉ると陰火も消えてゆく狀を靈筆で綏みなく叙してある。而して自我と佛我の論が一篇の中心をなしてゐる。佛敎

を旨とした假名草子のやうに要文などを多くは引いてないが、生活の擴張と信仰の純一とがはつきり人の心に浸込むところ、佛教文學の佳なるものとして然るべきである。尙佛法僧の一篇には靈跡高野の狀況が相當によく描かれ、殺生關白の亡靈の出現を書いてある。靑頭巾の一篇は愛する稚兒の死から啖人鬼となつた老僧を得度させた快庵禪師の物語であつて、怪談とのゐ袋の坐禪を以て怪を伏す奥州の禪僧及魔佛を以て一如となす悟道の聖人の二章に據つたもので、證道歌を引いてある。筋は矢張り怪異小說である。

山東京傳の讀本で宗敎的の形式をとつたものは本朝醉菩提（十卷）である。稻妻表紙の後編として公にしたものであるから、梅津話の後日譚もあるが、明の桃花庵の醉菩提を翻案して一休和尙の俗說を題材とし、樣々の人物を配合した長篇である。各篇の部を法華經の品によつて次第し、それに一々十六羅漢の名を冠らせてある。跋羅駄闍尊者善惡因果序品第一、迦諾迦代蹉尊者得品譬喩品第二といふ如く、注荼半託迦尊者髑髏化城喩品第十六に至る。その見出しが一寸見ると、頗るペダンチツクのやうであるが、著者はその卷頭に

如是我聞佛門廣大なり。其の一端を見て得たりとして妄想すべからず

云々と經典ばかりに書き始め、序曲に於て、修行者曾根松が鳥邊野の六堂の辻に止まり、有緣無緣の諸精靈成等正覺頓證諸菩提南無阿彌陀佛と念佛してゐると、夜中に至り管絃の妙へなる音が聞えて來る。主從の人が修羅の巷からやつて來て怨を晴さうとする。忽にして閻魔王の許から奪魂鬼や奪精鬼や縛魄鬼などがやつて來て地獄相の圖の如き光景が演出されるとしてあるのでも、作者は宗教小說として筆を起したものと見える。その思想上の立場は善惡因果應報に一貫してあるが、酒脫な一休禪師の佛法遊戲三昧の諸法を描かうして樣々の材料をとり入れたので、動もすれば一篇の精神が往々不鮮明になつてゐる。併し讀本として佛教をかくまで取入れたところに著者の力量が見られる。中に面白く綴つてあるは地獄信解品第七で、住吉の牀菜庵にゐた一休和尙が遊君として當時最も名高かつた堺の地獄太夫を呼び、泥醉して扇を開きて立上り

釋迦殿が目なし殿になり得て天地萬法を勸めらる。悉く目なしたりと說き給ふ。草木さ

へも佛になればまして況んや人間のなどか佛にならざらん……方便虚言は皆實。謠へや飮めや一寸先は闇の夜、謠ふも舞ふも法の聲、水の面みな目無を顯はせば、謠ふも舞ふも法の聲、來世も過去もあらばこそ、三世不可得人心、おこらぬ所は極樂にておこりし心は現世な……悟るは何の悟りぞや、悟らぬ先が悟りなり

と聲高らかに謠ひ足拍子をふみ鳴して舞ひ、それより大夫の請により、水鏡の法語や骸骨の法語をなし、心眼空濶の時がやがて來ると禪の妙諦を說いてゐる。作者は禪の一端を體得してゐたと想はれる。

この品と並んで法味の多いのは赤繩囑累品十五である。一休が生駒山の麓に弟子箔藏主等をつれて住んでゐた一年の除夜に債鬼が集り來つて居催促をして歸らない。箔藏主は自ら一休となつて極樂の大軍が地獄城を攻め拔く機略に富んだ說敎をなした。最初は居眠をしてゐた掛取も目を覺まして耳を傾ける。閻魔王は冠を脫いで降參する。そこで「王を始として冥官冥衆の姿をそのまゝに曼陀羅の聖衆に引きのぼせて等流法身と地獄に佛國をうつして唯心の

淨土となされた。これによりて佛鬼一如の道理を悟るが宜しい。衆生の心々で地獄ともなり極樂ともなると教へ、「閻魔獄卒は實有の情にあらず、衆生妄業の力を以てこれを見る」と正法念經に說いてあると立證し、また法相には「於繩蛇覺」といふことがあると漸次佛典に深く說き入り、人々の請ふに從ひ、大乘論に念々壞滅の無常、和合離散の無常、畢竟如是の無常の三つがあるがと掛取等の身の上に合せて滔々と說き、切實の法談は一層切實に說くので、彼等は終に感涙に咽び、貸帳に棒を引きて債務を解消させた上に、更に御布施を寄進するに至つた大說教を載せてある。これは假の一休實は箔藏主の機略な計らひであつたが、一休の所考を最もよく代辯したものであらう。最後の髑髏化城喩品第十六には百魔岩芝といふ惡婆が一休禪師に逢つて來世の苦患を救つて貰ふ一くさりで、これは謠曲山姥をとつたもので、山姥が息の下なる聲で謠ふと一休が助聲して、一念化生の鬼女となつて目前に來るものに對し、

邪正一如と見る時は色卽是空其の儘に、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳はみどり花は紅のいろ〳〵

とつけ、老女が又

　よしあし曳の山姥が山廻りするぞ苦しき云々

禪師が

　門松は冥途の旅の一里塚

　　めでたくいはふ人のおろかさ

御用心々々々で終る。煩惱卽菩提は絕對觀と柳綠花紅は差別觀、山姥の山廻りは衆生の輪廻の昔を思はしめたもので、禪宗文學の大きな著作と云ふべきであらう。

讀本作者として偉大な瀧澤馬琴には純然たる宗教小說は見ない。博洽の方は佛典も相當に讀んでゐて、隨所にこれを引用することは忘れなかつた。占夢南柯後記には尼の名に拈華微笑の名を附け、嚴島明神を遙拜しては光明經の紐を解きて「廣宣流布、乃至得聞、是經當令悉得猛心不可思議。大智慧衆聚不可量福德之報」と讀經の聲の澄み渡りといひ、昔語質屋庫の石童丸高野詣の脚絆に於ても大集經を引いたり、名鷹と雷神傳說を主とした雲妙間雲後月

にはゆくすゑは瑜伽行者と期待された西啓が父が殺生の惡報によつて牝戀ふ鹿に妄念發り、出家は出家後の出家を堅固にせよの敎に背き、神崎の蓮葉に迷ひ、いよ〳〵邪道に陷つて、終に雨田法師といふ惡魔になつて諸の惡行を行つてゐる。最後に伊原太次吉及妙女兄弟に討取られる。その期に臨んでは高野大師の水月喩の

法身寂々大空住
諸趣衆生互入歸

の偈を唱へさせてゐる。一方孝女妙は觀音信仰に篤く、時に普門品を唱へて祈願の達成を祈つてゐる。斯ういふ風に一部の部分的には佛典の引用や信仰や、因果應報の理を示したものが相當にあるが、その主眼とするところは怪異を綴り、勸懲の一助にするのが目的であつた。その大作八犬傳の序幕に里見義實の愛女伏姬が番犬八房に伴はれて富山に入り、法華經を念じて妖犬を德化したが、物類相感の理によつて懷姙の身となり、自殺しようとして、家臣金碗孝德の銃丸に殪れた。この場に訪ね來つた父は八つの珠數に祈つて一旦は蘇生した

が、姫は自ら刄に伏して果てた。その傷口から白氣が昇つて八方に散る。その八つの念珠に表れた如是畜生發菩提心の文字は仁義禮智忠信孝悌に變り、これが八犬士の所生の因となつてゐる。怪異小說であるにもあまりに奇矯に出てゐるが、これも伏姫の法華經讀誦の功德が大いに働いてゐることが誌されてゐる。

## 第四節　劇曲と佛敎

劇と佛敎との連繫は極めて深く、いづこの演劇もその源を溯れば佛供養に胚胎するといはれる程である。慶長元和の頃に廣く行はれてゐた淨瑠璃は十二段草子の外阿彌陀胸割と牛王姫とであつた。阿彌陀胸割は六段から成つた宗敎劇で、毘舍利國の長者勘志兵衞の惡魔に根ざしたもので、孝行な天壽姫の身代りに阿彌陀如來が立たれたと結ぶ。牛王姫と共に平易な文體で書かれてある。この佛が身替となつて人を助ける趣向は薩摩太夫の正本「はなや」の觀音の身替から、「さんせう太夫」の地藏の身替や寬文期の八幡太郞誕生記に於ける賴光等

の身替、笠寺觀音御緣起や、善光寺本地の如き靈驗物の粉本となつたものである。

今寛永から寛文の頃にかけての宗教を織り込んだ淨瑠璃の曲目を長友若月紫蘭氏の古淨瑠璃の新研究から拾つて見ると

| | |
|---|---|
| 說教かるかや | 寛永八年 |
| はなや | 同十一年 |
| あみだの本地 | 寛永廿一年 |
| さんせう太夫 | 寛永頃 |
| 諏訪本地兼家 | 正保三年 |
| 說教しんとく丸 | 同五年 |
| とうだいき | 慶安三年 |
| 淸水の御本地 | 同四年 |
| むねわり | 同 |

| | |
|---|---|
| にちれんき | 承應三年 |
| 熊野權現記 | 萬治元年 |
| 達磨の本地 | 同　三年頃 |
| 釋迦の本地 | 同　四年 |
| しんとく丸 | 寛文元年 |
| 一切記 | 同 |
| 月界長者 | 同　二年 |
| 御開山親鸞記 | 同　三年 |
| 日蓮記 | 同　四年 |
| 熱田大明神の御本地 | 同　五年 |
| 安藝の宮島辨才天利生 | 同　年 |
| よこそねの平太郎 | 同 |

鬼子母神　同　七年

さんせう太夫　同

阿彌陀本地　同

愛宕の本地　寛文中

誓願寺本地　同　八年

中將姫御本地　同　九年

びんばしやらわう　同

釋迦八相記　同

善だう記　同　十年

勝尾寺御本地　同

西國三十三番順禮記　同

十界記　同　十二年

比翼連枝之由來　同

十界二河白道　同　十三年

聖德太子御本地　寬　文　頃

此の如く澤山にある。この中には劇としての要素の全備しないものも多少あるけれども、それ〴〵太夫に語られ、また操人形に合せてその狀況を目覩して樂ましめた。この中には本地物、一般宗教に關するもの、高僧の傳に屬するものもあるが、多くは一旦は窮地に陷り、災厄に苦しむも、神佛の加護により再び救はれて幸福の身となるか、或は極樂界に往生するといふ趣向のものが多きを占めてゐる。

淨瑠璃の發生は既に室町期にあることは宗長手記などによりても明かであるが、その一大進步を見るに至つたのは天才近松巢林子の出現に由るのである。その時代物にも國姓爺合戰、曾我會稽山、關八州繫駒の如き名篇もあるが、その傑作は世話物に多く存することは今更に喋々を要せず。義理人情をからませた世話物に鬼神をも泣かしめるものがあると云は

れ、佛教の精神を十分に體得してうら若き兩性が死地に就くに方りてはその因緣に順從し、來世の榮光を信じて悔無からしめた手腕は他の隨從をゆるさぬのである。かくてその作品には佛教精神の橫溢するものが多く、各篇佛語の交らぬものは殆どない程で、佛典に通じてゐたことも驚くべきものがある。余は嘗て近松全集を繙いてその中に散在せる佛語を拾ひて統計を試みたことがある。佛、法、僧、經の如き常に見える語は除きその他を計量したところが、亡慮六千二百三十三に上る佛語を見たのである。而して特に佛教說話を取扱ひたるものは割合に多くはなくて

釋迦如來誕生會
善光寺御堂供養
一心五戒魂
賀古敎信七墓廻

の數種に過ぎない。

中には釋迦如來誕生會は彼が四十三歳の時の作にかゝり、享保八年卯月八日竹本座に於て上演した。固より灌佛會にあてこんだ作であつて、その降誕から出家得道、難行苦行入涅槃の大往生までを五段物としてある。佛教は既に遠く昔より國民の心に融化してゐる。假名草紙に釋迦八相物語があり、釋迦如來一代記があり、釋迦の本地があるが、劇としてはこれが始めてのものである。その書出しから

如是我聞きゝ、九土まち〳〵にわかれ四生族をことにす、とこしなへに火宅に遊びともに苦界にしづむ、かかるが故に能仁大師、法界をすべて我智とし虚空をつくして我身とし、一切種智の光明に蠢々たる懷生喝々たる生類、草木國土悉皆成佛の機を與へ、六通自在の神足に魔軍靡の如く捲て現世安穩の益を施し、三千世界三千の衆生惠日に照す大恩教主幸ひ量りなしとかや

と筆を起し、その用意の周到なものがある。奇しきその誕生から后の耶輸陀羅女の述懷、花園に於ける相愛のことあげ、太子出門のさま、愚直の行者槃特が鳩肉の代りにおのが身を

切りて提婆達多の內人、渡す譚より、悉達太子の道行、檀特仙の難行苦行、祇園精舍の萬燈會、最後に娑羅雙林に於ける涅槃の大團圓に至るまで靈筆を揮つてあつて、特に道行文は人の心を捉へる。五濁に迷ふうき世の人々を導く爲に十善の王位を捨てて、法の道に向はんと一千三百五十餘里を踏破し檀特山にのがれ入る。舍人車匿や愛馬犍陟の歎き物のあはれを盡してゐる。

善光寺御堂供養は享保三年六十六歲の時の作。山本土佐椽の古淨瑠璃善光寺に多少の潤色を加へたもので、中天竺、支那百濟を經て我邦に到來した閻浮檀金の尊像を本田善光が信州麻績の里に奉安した緣起を骨子とした五段もの。第一段は本尊佛の濫觴を示す爲に中天竺、第二段は百濟國へ東漸の次第、第三段以下が日本の舞臺である。寺傳にある善光の妻の彌生、一子善助も登場して興趣深き劇的資料を供給してゐる。

一心五戒魂は近松の壯歲の作。宇治加賀掾の爲に作つた戀塚物語の改作で、文覺上人の一心五戒を主題として脚色した佛教戲曲である。第一段は殺生戒、第二段は偸盜戒、第三段は

邪淫戒、第四段は妄語戒、第五段は飲酒戒となつてゐる。遠藤盛遠が袈裟御前に横戀慕してこれを殺した物語に尾鰭を附けたもので、その破戒的行動は那智の瀧に荒行をして絶息してゐる間に夢現の中にあらはれるといふ筋立となつてゐて、袈裟御前の貞烈も佛緣に說いてしまふが如き抹香臭いものが多いが、芝居として見せる爲には胸の裡から五色の魂が飛んで四方に散つてゆき、それが一つ一つ働いた風にしてある。善光寺御開帳があつてそれにあて込んだものと思はれるが相當人を引きつける爲には景事や、筋事や、好色や、御家騷動型などを取入れてある。

賀古敎信七墓廻は實在の隱士の名だけを借り、親の敵高梨友重と嫂とが一日の中に死んで仇と情の無常を觀じ法師となり、菩提の爲に七墓巡をするといふ五幕物で、喰人蜘蛛がその母親を呑み、母が呪詛してゐた人々をむごたらしく喰ひ殺すことや、その姪の眞光といふ小法師を中心に種々の罪業を釀す因果劇や、その濫行により閻魔の勅により火車上に召捕れることから、敎信が七墓廻をすることを仕組んであつて、播州中山寺にある閻魔の起請文の由

來や、賽の河原の哀れな描寫や、櫻祭文の節事や、鉢叩きの節事、艶書和讃の景事を交へ、荒唐無稽な慘劇を緩和して芝居に見せてゐる。

此等の如く佛教說話を中心にしない時代物や心中物に於ても世相を考へ佛教を挾むことは常に忘れなかつた。百日曾我に於ても、曾我の末弟禪師房が召捕られ、賴朝公の前で刑戮されやうといふ際に悲歎にくれる母を慰める爲に佛の自受用卽身成佛の說法を試みさせてゐる。

ア丶愚かなり母上さま、疾病におかされ劍にふし、火に入り水に溺るゝも前世の業、品こそかはれ生死の緣免るゝ道のあるべくは、世尊入滅有るべしや、十神力をあらはせば一日も百千歲「迷ひの衆生は以如半日」あかず惜しと思ひなば、千歲の夢の心ぞや、母も姉も聞き給へ禪師坊が最後に、自用受卽身成佛の御法を說いて聞すべし云々

近松の心中物の中の傑作と云はれてゐる天網島の名ごりの橋づくしは死を眼前にひかへた哀れにも尊い宗教的人情詩である。「要所狂ひの身の果は、斯くなりゆくと定まりし、釋迦の敎

も有ることが、見たし憂身の因果經、……死神に誘はれゆくも高買に、疎き報と觀念もとすれば心ひかされて歩み惱」み、「今置く霜は明日消ゆる果敢なき譬のそれよりも、先へ消行く闇の中」、蜆川を西に見「難波小橋から舟入橋の濱傳ひ、是迄來ればくる程は冥途の道が近付くと歎」きあひ涙にくれ、せめて「此世でこそは添はずとも先のその「さきの世までも夫婦ぞや、一つ蓮の賴みには、一夏に一部夏書せし、大慈大悲の普門品妙法蓮華經京橋を越れば到る彼岸の玉の臺に法を得て、佛の姿に身をなり橋、衆生濟度がまゝならば、流れの人のこの後は、絶えて心中せぬやうに守りたいぞと及びなき願も世上のよまひ言思ひ遣られ」、山の端白み寺々の曉の鐘なる頃、最期の場所に着き、今はの際に臨んで、「よしない事に氣を觸れ最期の念を亂さず、西へ西へと行く月を如來と拜み目を放さず、只西方を忘りやるな」と心づけ、遂に一蓮托生南無阿彌陀佛と終を告げた。市井の愛の絆に迷ふのも彌陀の救を必ず受けるとした。近松の心中物にはその名文なるが故に、無分別の追隨者を出したと謂はれる。

容易に人をゆるさぬ物徂徠が曾根崎心中のおはつ德兵衛の道行の

此世の名殘り夜も名殘り、死に、行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えてゆく、夢の夢こそあはれなれ、アレ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて殘る一ツが今生の、鐘の響きの聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり

の名文に絶大な贊辭を呈したこの世話物に於ても、絶大の悲哀詩である。作者自身の信仰はいづれの宗旨を嫌はなかつたものか、心中萬年草には弘法大師の靈域、女人禁制の結界地に於ける小姓と町の娘の心中を描き、當時に於ける一山の風俗慣習を寫し出した。さうしてその往生には型を破つて彌陀の念佛を唱へず、「おんあぼきやべろしやの眞言陀羅尼の呪文を唱へて終をとつてゐる。また心中重井筒には南無妙法蓮華經の御題目で皃をつけてある。要するにその博洽の才。世相をなるべく如實に寫し、義理と人情との葛藤を描き、各奉ずるところの宗旨で生かさんとしたものと見える。

# 第七章　結　語

今この一篇を書き終へるに臨み、短い結語を加へて置く。國文學の代表的作品はこの小冊子に悉く擧げえられない。擧げたうちにその要諦をつかみえなかつたことをことわらねばならぬ。（自分が嘗て釋教歌詠全集に收めて置いた有賀長伯の片岡山の後半の如く縱文によりて和歌を分けて載せることもしなかつたことも自分ながら物たらない感じがすることをも付け加へて置く。）明治以降に於ても和歌の部に於て行誡上人や税所刀自や、寒山拾得詩偈和歌などに觸れるにとゞめたことも同じ感じがする。維新當時排佛毀釋の風盛に煽つて、興福寺の五重塔も危く燒却されようとした時代は過ぎて、久しき間國民の精神上の糧となつてゐたこの宗教も復活され、中里介山の大菩薩峠の如きは大正二年九月都新聞に發表以來斷續十餘年に亙る長篇小說で十二因緣の無明行の世界をゑがいてをり、詩の方では曉烏敏氏の迷ひの跡には「親鸞上人の誕生」、「光明攝生」、「劫火焰」、「常住の光」、「歡喜」、「蛇穴に入る」の如き諸篇を收め、仁科幽溪の靈華集には「ながき光」、「慈悲の海」、「靈美の華」、「死して後」、「歡喜のほのめき」、「とはの佛」、「大靈の光」、「金色」、「佛」、「世界の泉」、「唯觀

聖者」、「蓮華草」、「佛の月日」、「佛淨樂地」の諸篇を含み、池本奇璪の玉ぶちにも「木佛」、「栴檀林賦」、「出界少女」、「廣大池のほとり」、「龍女賦」等を載せ、平木白星は釋迦の一冊子を出してゐるが、いづれも習作のたぐひである。白蓮女史は阿難尊者と摩登伽女の詩劇を出し戀と宗教との深き思想を熾烈にゑがき、高橋五郎、小森彥次二氏は梵劇サクンタラ姫を出し、大正に至り白蓮は戲曲指鬘外道を出した。この一篇は群をぬいたものとの定評がある。その他小說界に於ける「出家とその弟子」等々論ずべきも少くないが、玆には紙數の關係もありてすべてを省いて貴き硏究者の手に遺して置く。(大尾)

昭和十四年八月廿五日印刷
昭和十四年九月五日發行

國文學と佛教

定價壹圓貳拾錢

著者　福井久藏

編輯者　東京帝大佛教青年會

發行者　東京市神田區神保町一丁目一番地
株式會社　三省堂
代表者　龜井豐治

印刷者　東京市小石川區白山御殿町十八番地
大文堂合名會社
代表者　大居倉之助

福井佛教

發行所　株式會社　三省堂
本社（東京市神田區神保町一ノ一　振替東京三一五五五）
支店（大阪市西區阿波座下通二ノ六　振替大阪八一三〇〇）

# 發刊の辭

本叢書は佛教に關する正確なる知識を平明なる文章によつて傳へ、以て佛教の正しき思想・信仰を國民一般、特に青年層に普及・徹底せしめようとする意圖の下に編まれたものである。各編の執筆者はそれぞれの方面に於ける佛教學の權威者であるのみならず、我が佛教青年運動に於ける同志の人々であるから、其の學問的水準の高いばかりでなく、其の行文に於て常に佛教への親切なる嚮導を忘れてゐない。佛教を知らんとする者、佛教を理解せんとする者、更に進んで其の道を求め、其の道を行はんとする者に對してよき指南書たるべきことを信じて疑はないのである。

我等は夙に佛教精神の自覺・興隆を目的として結合し、其の實踐に精進してゐる。殊に我が青年の間に佛教の思想・信仰を樹立し、其の精神生活に確乎たる根抵を與へようとすることは我等多年の念願であつて、此のために曩に佛教の肝要を選んで「佛教聖典」を編修し、之を標準として能ふべくんば青年佛教ともいふべきものを確立しようと試みて居る。本叢書は恰も此の「佛教聖典」を基本として、これを解釋し、展開し、斯くて此の青年佛教確立の目的を促進せんとするものに外ならぬのである。

今や西洋文明模倣の時期は過ぎた。國民は新たに自らを意識しようとしてゐる。しかし、其は徒らに民族的自我の高揚に終つてはならぬ。我が歷史的文化の切實なる反省・批判によつて、其の本來の面目を明かにすることを忘るべきでない。然るときに佛教こそは我が國民を文化的に完成し、我が國民をして世界文化に貢獻せしむる原理であることを發見するであらう。

昭和十年九月

東京帝國大學佛教青年會

H—633

H—631